

# 中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(33)

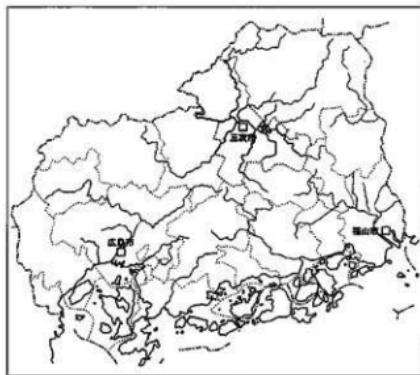
## 箱山第3～6号古墳

2014

公益財団法人 広島県教育事業団

# 中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(33)

## 箱山第3～6号古墳



三次市位置図 (☆は箱山第3～6号古墳)

2014

公益財団法人 広島県教育事業団



a 第3～6号古墳遠景（南東上空から）



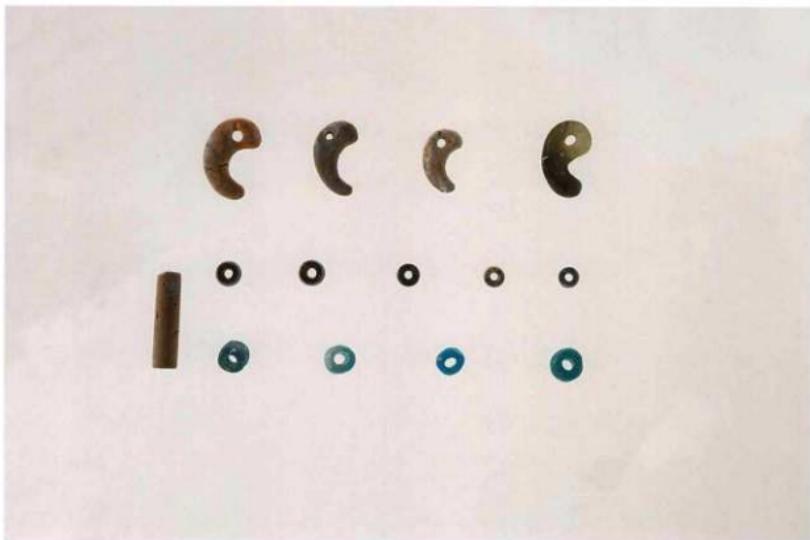
b 第3～6号古墳全景（南南東上空から）



a 第4・5号古墳全景（南西から）



b 第5号古墳 S K 5-1 (棺内) (南西から)



a 第4～6号古墳周辺出土玉類



b 第5・6号古墳周辺出土土器

## 例　　言

- 1 本書は、平成18（2006）年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る箱山第3～6号古墳（三次市向江田町字箱山所在）の発掘調査報告である。
- 2 発掘作業及び整理作業・報告書作成は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により、財団法人広島県教育事業団が実施した。（平成25年4月1日より公益財団法人に移行）
- 3 発掘調査の対象は当初、箱山第3～5号古墳であったが、調査の結果、箱山第6号古墳が発掘範囲に含まれることが判明したことから、箱山第3～6号古墳として報告する。
- 4 発掘作業及び出土遺物等の整理作業の担当者は、次のとおりである。  
発掘作業（平成18年度）岩本正二（事業調整監、退職）、唐口勉三（調査研究員）  
整理作業（平成25年度）梅本健治・山田繁樹・唐口勉三（主任調査研究員）、川崎真二・新井真吾（調査研究員）、大田けい子（資金職員）
- 5 本書は、I・IIIを岩本・唐口が、IIを沢元保夫（事業調整監）が、IV・Vを唐口がそれぞれ執筆し、唐口が編集した。
- 6 第4～6号古墳の箱式石棺の石材・第5号古墳の葺石の石材・調査区内出土の石製品の石材については、柴田喜太郎氏（考古地質学研究所）から教示を得た。
- 7 本書で使用した遺構の表示記号は、SK：埋葬施設である。
- 8 土器の断面については、須恵器は網目、そのほかは白ヌキとした。
- 9 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は、同一である。
- 10 本書に使用した北方位は、すべて旧日本測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北である。
- 11 第2図は、国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図（三良坂）を使用した。
- 12 発掘調査の記録類及び出土品は、広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目8-49）において保管している。

## 目 次

I はじめに .....	(1)
II 位置と環境 .....	(8)
III 調査の概要 .....	(18)
IV 遺構と遺物 .....	(23)
V ま と め .....	(63)

## 挿図目次

第1図 中國横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図 .....	(2)
第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000) .....	(9)
第3図 周辺地形図 (1 : 2,000) .....	(19)
第4図 調査前地形測量図 (1 : 300) .....	(21)
第5図 第3~6号古墳墳丘測量図 (1 : 300) .....	(22)
第6図 第3号古墳墳丘測量図 (1 : 100) .....	(24)
第7図 第3号古墳土層断面実測図 (1 : 60) .....	(25)
第8図 第3号古墳石室実測図 (1 : 40) .....	(26)
第9図 第3号古墳周辺出土遺物実測図 (1) (1 : 3) .....	(28)
第10図 第3号古墳周辺出土遺物実測図 (2) (1 : 3.1 : 2) .....	(29)
第11図 第4号古墳墳丘測量図 (1 : 100) .....	(31)
第12図 第4号古墳土層断面実測図 (1 : 60) .....	折込み
第13図 第4号古墳SK4-1実測図 (1 : 30) .....	折込み
第14図 第4号古墳SK4-2・SK4-3実測図 (1 : 30) .....	(34)
第15図 第4号古墳出土遺物実測図 (2 : 3) .....	(35)
第16図 第4号古墳周辺出土遺物実測図 (1 : 3) .....	(36)
第17図 第5号古墳墳丘測量図 (1 : 100) .....	(37)
第18図 第5号古墳葺石立面測量図 (1 : 100) .....	(39)
第19図 第5号古墳土層断面実測図 (1 : 60) .....	折込み
第20図 第5号古墳SK5-1実測図 (1 : 30) .....	折込み
第21図 第5号古墳SK5-2実測図 (1 : 30) .....	(43)
第22図 第5号古墳SK5-3実測図 (1 : 30) .....	(44)
第23図 第5号古墳SK5-4~SK5-6実測図 (1 : 30) .....	(47)
第24図 第5号古墳出土遺物実測図 (2 : 3) .....	(48)
第25図 第5号古墳周辺出土遺物実測図 (1 : 3) .....	(49)

第26図 第6号古墳墳丘測量図(1:100) .....	(51)
第27図 第6号古墳土層断面実測図(1:60) .....	(52)
第28図 第6号古墳SK6-1実測図(1:30) .....	(54)
第29図 第6号古墳SK6-2・SK6-3実測図(1:30) .....	(57)
第30図 第6号古墳周辺出土遺物実測図(1)(1:3) .....	(58)
第31図 第6号古墳周辺出土遺物実測図(2)(2:3) .....	(58)
第32図 調査区内出土遺物実測図(1:3) .....	(59)
第33図 調査区内出土古銭拓影(原寸) .....	(59)
第34図 第4~6号古墳埋葬施設の頃位 .....	(66)
第35図 第4~6号古墳埋葬施設の規模(長さ×幅) .....	(67)

## 表 目 次

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧(1)~(3) .....	(3)~(5)
第2表 箱山第3~6号古墳一覧表 .....	(20)
第3表 土器類・土製品観察表(1)・(2) .....	(61)~(62)
第4表 金属製品計測表 .....	(62)
第5表 石製品計測表 .....	(62)
第6表 ガラス製品計測表 .....	(62)
第7表 漆製品計測表 .....	(62)
第8表 古銭計測表 .....	(62)
第9表 広島県内の方墳の分布状況 .....	(63)
第10表 中心埋葬・従属別の埋葬施設一覧 .....	(65)
第11表 箱式石棺の属性 .....	(67)
第12表 備後北部の古墳出土の鉈・鐵鐵(主に前期・中期) .....	(69)
第13表 備後北部の古墳出土のガラス製小玉・石製勾玉・石製白玉(主に前期・中期) .....	(71)
第14表 広島県の方墳一覧(1)~(3) .....	(82)~(84)

## 図版目次

卷頭図版 1 a 第3~6号古墳遠景(南東上空から)	b 第3~6号古墳全景(南南東上空から)
卷頭図版 2 a 第4・5号古墳全景(南西から)	b 第5号古墳SK5-1(棺内)(南西から)
卷頭図版 3 a 第4~6号古墳周辺出土玉類	b 第5・6号古墳周辺出土土器
図版 1 a 第3~6号古墳遠景(南東上空から)	b 第3~6号古墳全景(真上から、右上が北)
図版 2 a 第3~6号古墳遠景(南東から)	b 第3~5号古墳調査前状況(南西から)

- |      |                                 |                           |
|------|---------------------------------|---------------------------|
|      | c 第4～6号古墳調査前状況(北東から)            |                           |
| 図版3  | a 第3号古墳調査前状況(南西から)              | b 第3号古墳墳丘検出状況(南西から)       |
|      | c 第3号古墳土層(B-B')(南から)            |                           |
| 図版4  | a 第3号古墳土層(C-C')(南西から)           | b 第3号古墳土層(A-A' 墳丘内)(南東から) |
|      | c 第3号古墳土層(A-A' 墳丘内)(南から)        |                           |
| 図版5  | a 第3号古墳土層(A-A' 墳丘内)(南東から)       | b 第3号古墳石室検出状況(東南東から)      |
|      | c 同上(南南西から)                     |                           |
| 図版6  | a 第3号古墳石室奥壁(東から)                | b 第3号古墳石室南側壁(北北東から)       |
|      | c 同上(北西から)                      |                           |
| 図版7  | a 第4号古墳調査前状況(南西から)              | b 第4号古墳調査状況(南西から)         |
|      | c 同上(蓋石除去後)(南西から)               |                           |
| 図版8  | a 第4号古墳土層(A-A' 南西側)(南東から)       | b 第4号古墳土層(A-A' 墳丘内)(南から)  |
|      | c 第4号古墳土層(A-A' 北東側)(南東から)       |                           |
| 図版9  | a 第4号古墳土層(B-B' 墳丘内東南寄り)(北東から)   |                           |
|      | b 第4号古墳土層(B-B' 墳丘内北西寄り)(北から)    |                           |
|      | c 第4号古墳土層(B-B' 北西側)(北東から)       |                           |
| 図版10 | a 第4号古墳SK4-1(蓋石)(南東から)          | b 同上(棺内)(南東から)            |
|      | c 同上(棺内)(南西から)                  |                           |
| 図版11 | a 第4号古墳SK4-1遺物出土状況(北から)         | b 第4号古墳SK4-2(蓋石)(北北西から)   |
|      | c 同上(棺内)(北北西から)                 |                           |
| 図版12 | a 第4号古墳SK4-2(棺内)(西南西から)         | b 第4号古墳SK4-3(蓋石)(南西から)    |
|      | c 同上(墓坑)(南西から)                  |                           |
| 図版13 | a 第5号古墳調査前状況(南西から)              | b 第5・6号古墳調査前状況(北東から)      |
|      | c 第5・6号古墳全景(真上から、右上が北)          |                           |
| 図版14 | a 第5・6号古墳全景(北東上空から)             | b 同上(南東上空から)              |
| 図版15 | a 第5号古墳墳丘検出状況(北東から)             | b 同上(南西から)                |
|      | c 同上(西から)                       |                           |
| 図版16 | a 第5号古墳墳丘検出状況(南から)              | b 同上(東から)                 |
|      | c 第5号古墳土層(E-E' 北東側、溝内)(南東から)    |                           |
| 図版17 | a 第5号古墳土層(E-E' 墳丘内上段北東寄り)(東から)  |                           |
|      | b 第5号古墳土層(E-E' 墳丘内上段南西寄り)(北西から) |                           |
|      | c 第5号古墳土層(E-E' 墳丘内南西寄り)(西から)    |                           |
| 図版18 | a 第5号古墳土層(E-E' 南西側、溝内)(南東から)    |                           |
|      | b 第5号古墳土層(F-F' 墳丘内北西寄り)(西から)    |                           |
|      | c 第5号古墳土層(F-F' 墳丘内上段北西寄り)(南西から) |                           |
| 図版19 | a 第5号古墳土層(F-F' 墳丘内上段南東寄り)(南西から) |                           |

- b 第5号古墳土層(P-P' 墳丘内南東寄り, 南から)  
c 第5号古墳SK5-1・SK5-2検出状況(北東から)
- 図版20 a 第5号古墳SK5-1・SK5-2検出状況(蓋石除去後)(北東から)  
b 第5号古墳SK5-1(蓋石, 粘土検出状況)(北西から)  
c 同上(蓋石, 粘土除去後)(北西から)
- 図版21 a 第5号古墳SK5-1(蓋石, 粘土除去後)(南西から) b 同上(棺内)(北西から)  
c 同上(棺内, 床面)(北西から)
- 図版22 a 第5号古墳SK5-1(棺内, 床面)(南西から) b 同上(棺内, 北東端粘土)(南西から)  
c 同上(棺内, 床面半截状況)(南東から)
- 図版23 a 第5号古墳SK5-1(棺内, 遺物出土状況)(南東から)  
b 第5号古墳SK5-2(蓋石)(南西から) c 同上(棺内)(南西から)
- 図版24 a 第5号古墳SK5-2(棺内)(南東から) b 同上(棺内, 北西端粘土)(南東から)  
c 同上(棺内, 床面半截状況)(南西から)
- 図版25 a 第5号古墳SK5-3(蓋石)(南東から) b 同上(墓坑)(南東から)  
c 第5号古墳SK5-4(蓋石)(北東から)
- 図版26 a 第5号古墳SK5-4(墓坑)(北東から) b 第5号古墳SK5-5(蓋石)(南西から)  
c 同上(蓋石)(北西から)
- 図版27 a 第5号古墳SK5-5(墓坑)(北西から) b 同上(墓坑, 遺物出土状況)(西から)  
c 第5号古墳SK5-6(蓋石)(南南西から)
- 図版28 a 第5号古墳SK5-6(墓坑)(南南西から)  
b 第5号古墳墳丘外(SK5-6南西側)遺物出土状況(西から)  
c 第6号古墳墳丘検出状況(北東から)
- 図版29 a 第6号古墳墳丘検出状況(北西から) b 第6号古墳北東側周溝(北西から)  
c 第6号古墳土層(B-B' 南東側)(北東から)
- 図版30 a 第6号古墳土層(B-B' 墳丘内南東寄り)(東から)  
b 第6号古墳土層(B-B' 墳丘内北西寄り)(北から)  
c 第6号古墳土層(B-B' 北西側)(北東から)
- 図版31 a 第6号古墳調査状況(南西から) b 同上(蓋石除去後)(南西から)  
c 第6号古墳SK6-1(土層, 北西-南東方向)(南西から)
- 図版32 a 第6号古墳SK6-1(土層, 南西-北東方向)(南東から)  
b 同上(粘土検出状況)(南西から) c 同上(粘土検出状況)(南東から)
- 図版33 a 第6号古墳SK6-1(粘土除去後)(南西から) b 同上(粘土除去後)(南東から)  
c 第6号古墳SK6-2(蓋石)(北西から)
- 図版34 a 第6号古墳SK6-2(蓋石)(南西から) b 同上(棺内)(北西から)  
c 同上(棺内)(南西から)

- 図版35 a 第6号古墳SK6-3(蓋石)(南西から) b 同上(蓋石)(北西から)  
c 同上(棺内)(南西から)
- 図版36 a 第6号古墳SK6-3(棺内)(北西から)  
b 第6号古墳墳丘外(北西側斜面)遺物出土状況(西から)  
c 第6号古墳墳丘外(東側斜面)遺物出土状況(南から)
- 図版37 出土遺物(1)
- 図版38 出土遺物(2)
- 図版39 出土遺物(3)
- 図版40 出土遺物(4)

## I はじめに

箱山第3～6号古墳の発掘調査は、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴うものである。中国横断自動車道尾道松江線は、中国地方を南北に貫き、瀬戸内海側の広島県尾道市から世羅郡世羅町・三次市・庄原市を経て日本海側の島根県松江市に至る総延長約137kmの高速自動車国道である。本事業は、山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道を接続するだけではなく、西瀬戸自動車道（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって、中四国地域連携輪構想の推進、経済圏・商業圏の拡大、山陽・山陰間の交流促進、広域観光ネットワークの創造を図ろうとするもので、広島県内の路線は約86kmである。

道路建設事業を推進する日本道路公团中国支社広島工事事務所（以下、「道路公团」という。）は、平成12（2000）年3月10日、当該事業地内の双三郡三良坂町大字長田（現・三次市三良坂町長田）～三次市四拾貫町間の文化財等の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）と協議した。県教委は現地踏査を行い、平成13（2001）年8月6日、事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。平成14（2002）年11月、県教委は試掘調査を実施し、平成15（2003）年1月9日、県教委は事業地内に箱山第3～5号古墳を確認した旨、道路公团に回答した。その後の三次市三良坂町から庄原市水越間の設計変更に伴い、平成17（2005）年7月25日、道路公团は当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについての協議書を、県教委に再度提出した。同年8月31日、県教委は設計変更後の事業範囲に対応した各古墳の範囲を道路公团に回答した。

その後、日本道路公团は解散し、中国横断自動車道尾道松江線建設事業は平成17（2005）年10月1日に西日本高速道路株式会社に引き継がれた。箱山第3～5号古墳の取扱いについて、県教委と西日本高速道路株式会社中国支社（以下、「西日本高速」という。）は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。

西日本高速は平成18（2006）年2月9日付けで三次市教育委員会（以下、「三次市教委」という。）宛てに文化財保護法第94条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し、三次市教委は同年2月14日付けで、西日本高速宛てに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。

中国横断自動車道尾道松江線建設事業は平成18年度から国土交通省の直轄事業となるため、西日本高速に代わり国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下、「国土交通省」という。）は、平成18年3月2日付けで財団法人広島県教育事業団（以下、「教育事業団」という。）に箱山第3～5号古墳の調査依頼を行い、国土交通省と教育事業団は同年4月3日付けで委託契約を結んだ。

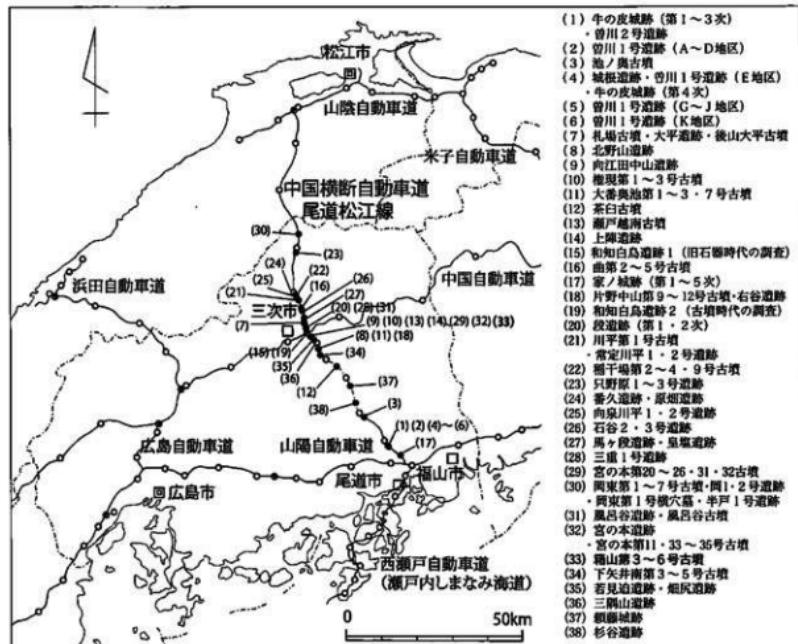
教育事業団は同年7月6日付けで市教委宛てに文化財保護法第92条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘調査届を提出し、同年7月18日付けで市教委から発掘調査報告書を作成・提出すること及び出土品については遺失物法等の規定に基づいて取扱うことに留意しながら慎重に発掘調査を実

施するよう指示を受け、同年8月21日から12月8日までの約3か月間発掘調査を実施した。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、また、この地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所、三次市教育委員会及び地元の方々に多大なご協力をいただいた。また、次の各氏から発掘調査方法や遺物の整理方法等に関する指導・助言等をいただいた。記して感謝の意を表します。(氏名は五十音順、敬称略、所属等は当時のもの。)

加藤光臣(三次市文化財保護委員)、河瀬正利(財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員・広島大学名誉教授)、藤野次史(広島大学大学院文学研究科助教授)、古瀬清秀(財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員・広島大学大学院文学研究科教授)、松下正司(財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員・比治山大学名誉教授)



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図((1)～(38)は報告番号)

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧(1)

報告番	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容			
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次	歎状堅堀群	平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	城跡			
		第2次	1～4郭	平成15年7月7日～ 10月31日						
		第3次	西堅堀	平成15年11月10日～ 11月28日						
曾川2号遺跡				平成15年1月20日～ 3月7日	尾道市御調町 大町字西川	古代末～中世	集落跡			
(2)	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14年度 調査区	平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町 大町字曾川	弥生時代～中世	集落跡			
		B地区	旧・P2第一調 査区	平成15年4月7日～ 5月23日						
		C地区	旧・P2第二調 査区	平成16年1月6日～ 2月5日						
		D地区	旧・P1	平成16年1月6日～ 2月5日						
(3)	池ノ奥古墳				世羅郡世羅町 宇津戸字天神 10月28日	古墳時代後期	古 墓			
(4)	城根遺跡				尾道市御調町 大町字城根 3月7日	古墳時代か	箱式石棺			
	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次	5郭	平成18年1月30日～ 2月24日	尾道市御調町 大町字二の丸	中 世	城 跡			
	曾川1号遺跡	E地区	旧・P4	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町 大町字米田	縄文時代後期～ 中世	遺物包含層			
(5)	曾川1号遺跡	G地区	旧・P3	平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町 大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
		H地区	旧・P3側道							
		I地区	旧・P4側道	平成17年1月11日～ 3月4日						
		J地区	旧・P2							
(6)	曾川1号遺跡	K地区		平成17年4月11日～ 7月1日	尾道市御調町 大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
(7)	札場古墳				三次市後山町 字札場 平成18年1月27日	古墳時代後期	古 墓			
	大平遺跡				三次市後山町 字大平 平成19年6月25日～ 10月5日	弥生時代後期～ 古代	集落跡			
	後山大平古墳				三次市後山町 字大平 平成19年6月25日～ 10月5日	古墳時代後期	古 墓			
(8)	北野山遺跡				三次市吉舎町 敷地字北野山 平成18年7月3日～ 8月4日	平安時代	仏教関連の 施設跡			
(9)	向江田中山遺跡				三次市向江田町 字中山 平成18年4月17日～ 6月23日	古墳時代末～ 古代	集落跡			
(10)	椎現第1～3号古墳				三次市向江田町 字椎現 平成17年7月1日～ 11月11日	古墳時代中期	古 墓			
(11)	大番奥池第1～3・7号古墳				三次市吉舎町 敷地字中山 平成18年4月17日～ 8月4日	古墳時代後期	古 墓			
(12)	茶臼古墳				三次市甲尻町 宇質字茶臼 平成20年7月7日～ 9月5日	古墳時代中期	古 墓			
(13)	瀬戸越南古墳				三次市向江田町 字瀬戸越 平成19年6月25日～ 8月10日	古墳時代中期	古 墓			
(14)	上陣遺跡				三次市向江田町 字上陣 平成19年7月9日～ 8月31日	古墳時代中期	集落跡			
(15)	和知白鳥遺跡(第2次)				三次市和知町 字白鳥 平成19年9月25日～ 12月21日	後期旧石器時代	集落跡			

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧(2)

報告番号	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容			
(16)	曲第2~5号古墳			平成19年7月2日~9月21日	庄原市口和町 金田字本谷	古墳時代中期	古墳			
				平成19年12月3日~12月7日		縄文時代前期・後期	石器製作跡・包含地			
(17)	家ノ城跡	第1次	南東郭群	平成15年9月16日~10月31日	尾道市木ノ庄町 木製字家城東平	中世	城跡			
		第2次	南東郭群	平成16年5月17日~6月11日						
		第3次	I郭周辺	平成17年10月17日~11月11日						
		第4次	I郭・北尾根	平成18年4月17日~7月21日						
		第5次	I郭・北西尾根	平成19年4月16日~6月15日						
(18)	片野中山第9~12号古墳			平成19年4月16日~8月8日	三次市吉舎町 敷地字中山	古墳時代中期	古墳			
	右谷遺跡			平成19年4月16日~8月8日		古墳時代後期~古代	集落跡			
(19)	和知白島遺跡(第1次)			平成18年4月17日~12月22日	三次市和知町字白島・四拾賀町字三重	古墳時代中期~古代	集落跡・古墳			
(20)	段遺跡	第1次		平成18年9月19日~12月15日		古墳時代中期~後期	集落跡			
		第2次		平成19年9月25日~12月21日		後期旧石器時代	集落跡			
(21)	川平第1号古墳			平成20年4月21日~6月20日	庄原市口和町 常定字川平	古墳時代後期	古墳			
	常定川平1号遺跡					古墳時代中期	集落跡			
	常定川平2号遺跡					縄文時代	陥穴			
(22)	船干場第2~4・9号古墳			平成19年10月9日~12月23日	庄原市口和町 大月字船干場	古墳時代後期	古墳			
(23)	只野原1号遺跡			平成20年9月8日~9月26日		古墳時代	箱式石棺			
	只野原2号遺跡			平成22年4月19日~11月19日	庄原市高野町 下門田字只野原 庄原市高野町 下門田字登立	—	自然流路			
	只野原3号遺跡	第1次		平成21年5月18日~8月28日		旧石器時代~古墳時代	包含層			
		第2次		平成22年4月19日~11月19日		集落跡				
(24)	番久遺跡			平成20年7月28日~12月25日	庄原市口和町 大月字番久	縄文時代~古墳時代	集落跡・陥穴			
	原原遺跡					弥生時代~古墳時代	集落跡			
(25)	向泉州平1号遺跡			平成20年4月21日~7月11日	庄原市口和町 向泉字川平	旧石器時代~縄文時代	包含地			
	向泉州平2号遺跡					弥生時代~古墳時代	集落跡			
(26)	石谷2号遺跡	第1次		平成21年4月13日~6月12日	庄原市口和町 金田字塙谷	縄文時代	陥穴			
		第2次		平成22年4月12日~6月23日						
	石谷3号遺跡			平成21年4月13日~6月12日	庄原市口和町 金田字塙谷	古墳時代後期	集落跡			
(27)	馬ヶ段遺跡 馬ヶ段第1号横穴墓 馬ヶ段第2号横穴墓			平成20年4月21日~7月11日	庄原市水越町 字馬ヶ段	古墳時代後期~奈良時代前期	集落跡・横穴墓			
	皇塙遺跡				庄原市水越町 字皇塙	古墳時代後期	炭窯跡			

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧(3)

報告番	道路名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(28)	三重1号遺跡	第1次	平成20年11月4日～12月19日	三次市四拾賀町字三重	古墳時代～古代	集落跡
		第2次	平成21年4月13日～9月25日		古墳時代中期	集落跡
(29)	宮の本第20～26・31・32号古墳		平成19年4月16日～12月21日	三次市向江田町字宮本・天神	古墳時代前期～後期	古墳
(30)	岡東第1～7号古墳		平成20年5月7日～9月26日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代中期	古墳
	岡1号遺跡				時代不詳	竪穴
	岡2号遺跡		平成21年4月13日～5月15日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	集落跡
	岡東第1号横穴墓		平成24年9月3日～9月21日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	横穴墓
	半戸1号遺跡		平成22年4月12日～5月14日	庄原市高野町岡大内字半戸	绳文時代	竪穴
(31)	風呂谷遺跡		平成21年4月13日～11月20日	三次市四拾賀町	後期旧石器時代 縄文時代早期 古墳時代後期 古代	包含地 集落跡
	風呂谷古墳				古墳時代後期	古墳
(32)	宮の本遺跡		平成20年4月21日～10月31日	三次市向江田町字宮本	古代	集落跡
	宮の本第11・33～35号古墳				古墳時代後期～古代	古墳
(33) (本初)	箱山第3～6号古墳		平成18年8月21日～12月8日	三次市向江田町字箱山	古墳時代前期～後期	古墳
(34)	下矢井第3～5号古墳		平成19年10月9日～12月21日	三次市吉倉町矢井字西見山・敷地字北野山	古墳時代前期～中期	古墳
(35)	若見追遺跡		平成19年4月16日～5月25日 平成19年10月18日～10月19日	三次市三良坂町岡田字若見追	古代	集落跡
	烟尻遺跡		平成21年4月13日～6月5日		旧石器時代 縄文時代 近世	集落跡
(36)	三隅山遺跡		平成24年4月9日～8月10日	三次市三良坂町長田字三隅山・堂面	中世～近世	墳墓
(37)	頬藤城跡		平成20年4月21日～7月31日	三次市甲坂町小豆字隈ヶ迫・小豆山	中世	城跡
(38)	杉谷遺跡		平成21年9月7日～10月16日	世羅郡世羅町東上原字杉谷	古墳時代 中世～近世	集落跡

## 第1表の報告書一覧

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A～D地区)』2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡・曾川1号遺跡(E地区)・牛の皮城跡(第4次)』2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号遺跡(G～

J地区)』 2008年

(6) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曽川1号遺跡(K地区)』

2008年

(7) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年

(8) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』 2009年

(9) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向江田中山遺跡』 2010年

(10) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 検現第1~3号古墳』 2010年

(11) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大番奥池第1~3・7号古墳』 2010年

(12) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12) 茶臼古墳』 2011年

(13) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13) 潮戸越南古墳』 2011年

(14) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(14) 上陣遺跡』 2011年

(15) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15) 和知白島遺跡1』 2011年

(16) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16) 曲第2~5号古墳』 2011年

(17) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17) 家ノ城跡』 2012年

(18) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 片野中山第9~12号古墳・右谷遺跡』 2012年

(19) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(19) 和知白島遺跡2』 2012年

(20) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20) 段遺跡』 2012年

(21) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21) 川平第1号古墳・常定川平1・2号遺跡』 2012年

(22) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22) 銀干場第2~4・9号古墳』 2012年

(23) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(23) 只野原1号遺跡・只野原2号遺跡・只野原3号遺跡』 2013年

(24) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(24) 番久遺跡・原畠遺跡』 2013年

(25) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(25) 向泉川平1号遺跡・向泉川平2号遺跡』 2013年

(26) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(26) 石谷2号遺跡・石谷3号遺跡』 2013年

(27) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(27) 馬ヶ段遺跡・皇塙遺跡』 2013年

- (28) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (28) 三重1号遺跡』2013年
- (29) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (29) 宮の本第20～26・31・32号古墳』2013年
- (30) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (30) 岡東第1～7号古墳・岡1号遺跡・岡2号遺跡・岡東第1号横穴墓・半戸1号遺跡』2014年
- (31) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (31) 風呂谷遺跡・風呂谷古墳』2014年
- (32) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (32) 宮の本遺跡、宮の本第11・33～35号古墳』2014年
- (33) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (33) 箱山第3～6号古墳』2014年
- (34) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (34) 下矢井第3～5号古墳』2014年
- (35) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (35) 若見迫遺跡・煙尻遺跡』2014年
- (36) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (36) 三隅山遺跡』2014年
- (37) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (37) 頼藤城跡』2014年
- (38) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (38) 杉谷遺跡』2014年

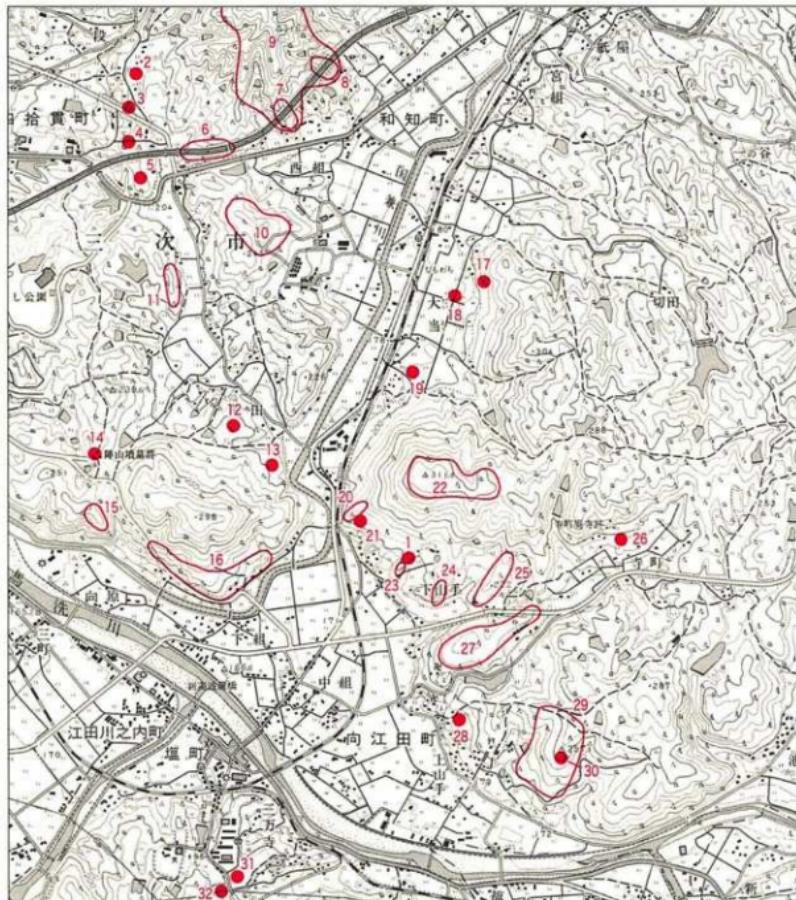
## II 位置と環境

箱山第3～6号古墳は三次市向江田町字箱山に所在する。箱山古墳群（9基で構成）は、西流する馬洗川（江の川水系）北側の丘陵部に立地している。茶臼山城跡の所在する標高311.9mの山塊から南東に派生する尾根上に第1～8号墳が並んでおり、直径20mを超える円墳の第9号墳はやや離れて、小城城跡を挟んで尾根先端部に位置している。古墳群の所在する現在の三次市は、平成の大合併によって旧三次市、双三郡三良坂町・吉舎町・三和町・作木村・布野村・君田村、甲奴郡甲奴町の1市4町3村が、平成16年4月に対等合併して誕生した。面積は778.19平方キロメートルで、県内の自治体では庄原市について2番目の広さで、人口は56,122人（平成25年12月1日現在）を擁している。三次の気候は大きくは瀬戸内式気候に属するが、広島より年平均気温は2度弱低く、年較差も沿岸部より大きい。日照時間は沿岸部の半分程度で、冬には比較的曇天の日が多く、秋から早春にかけては霧が発生しやすく、「三次の霧の海」として知られている。

広島県の地形は大きく脊梁山地面・吉備高原面・瀬戸内面の三段の侵食小起伏面に区分されるが、三次市域は中国脊梁山地の南に接して分布する中央盆地列の一つである三次盆地を中心に、吉備高原面に属する作木高原・甲奴高原・世羅台地の一部などに区分される地形面が広がっている。このうち三次盆地は県内で最も広い東西に長い盆地で、東西約40km、南北約25kmの規模である。盆地内の最低所は、神野瀬川・馬洗川・可愛川・西城川の各河川が集まる盆地中央部の三次市三次付近にあり、標高は約150mで、盆地周縁部との高低差は300mほどある。盆地中央部で集まった河川は江の川となりさらに西流し、備北山地と芸北山地のあいだの江川閨門を経て日本海に注いでいる。これらの河川を利用した水運とともに、山陰と山陽を結ぶ陸路も古くから発達しており、盆地内には約4,000基の古墳や寺町廃寺跡、上山手廃寺跡などの古代寺院が分布している。交通の要衝としての重要性は今日も変わっておらず、JR芸備線・福塩線・三江線が通るほか、中国自動車道や本古墳群の調査の契機となった中国横断自動車道尾道松江線の高速道路をはじめとする道路網が整備されている。

次に周辺の主な遺跡について発掘調査の行われた遺跡を中心に概観する。

旧石器時代 旧三次市域の馬洗川南岸では、酒屋高塚古墳<sup>(1)</sup>、岡竹遺跡<sup>(2)</sup>、下本谷遺跡<sup>(3)</sup>、宗佑池遺跡<sup>(4)</sup>、松ヶ迫A・B地点遺跡<sup>(5)</sup>、塩町遺跡<sup>(6)</sup>などが、北岸では下山遺跡<sup>(7)</sup>や近年、当事業によって調査の実施された和知白鳥遺跡<sup>(8)</sup>、段遺跡<sup>(9)</sup>、風呂谷遺跡<sup>(10)</sup>などがある。また、馬洗川上流や上下川沿いの三良坂町、吉舎町では、油免遺跡<sup>(11)</sup>、宮風呂遺跡<sup>(12)</sup>、塩野裏遺跡<sup>(13)</sup>、徳市遺跡<sup>(14)</sup>が知られている。このうち、下本谷遺跡（配水池地点）の石器群は、三瓶池田火山灰とAT（姶良Tn火山灰）の間の層準から出土しており、後期旧石器時代初頭から中期旧石器時代に遡る可能性が指摘され、当地域で最も古いもののと考えられている。これに類似する石器が出土している、岡竹遺跡、宗佑池遺跡、松ヶ迫A・B地点遺跡、宮風呂遺跡についても、この頃の所産である可能性がある。これらに続く後期旧石器時代ナイフ形石器文化前半期の遺跡として、部分加工のナイフ形石器をもつ、下本谷遺跡（最高所地点）、下山遺跡や油免遺跡、徳



- |             |               |           |            |           |
|-------------|---------------|-----------|------------|-----------|
| 1 箱山第3～6号古墳 | 2 風呂谷遺跡・風呂谷古墳 | 3 段遺跡     | 4 三重1号遺跡   | 5 和知白鳥遺跡  |
| 6 上四拾貫古墳群   | 7 天城山城跡       | 8 陣山城跡    | 9 国広城跡     | 10 南山城跡   |
| 11 権現古墳群    | 12 向江田中山遺跡    | 13 上陣遺跡   | 14 陣山墳墓群   | 15 附山城跡   |
| 16 大仙大平山古墳群 | 17 大当瓦窯跡      | 18 上大興古墳  | 19 河原田2号遺跡 | 20 濱戸越古墳群 |
| 21 濱戸越南古墳   | 22 茶臼山城跡      | 23 小城城跡   | 24 野船城跡    | 25 野船南古墳群 |
| 26 寺町庵寺跡    | 27 下山手古墳群     | 28 上山手庵寺跡 | 29 宮の本古墳群  | 30 宮の本遺跡  |
| 31 塩町遺跡     | 32 重岡山遺跡      |           |            |           |

第2図 周辺道路分布図(1:25,000)

市遺跡があげられる。また、段遺跡や和知白鳥遺跡でも A T 下から石器集中部が複数検出されている。さらにナイフ形石器文化後半期になると、国府形ナイフ形石器が単独出土した酒屋高塚古墳や石器が表面採集されている塩町遺跡、塩野裏遺跡が知られている。また、風呂谷遺跡の石器群は A T よりも上層から検出されている。なお、ナイフ形石器文化期に続く槍先形尖頭器文化期・細石刃文化期の遺跡については、細石刃が出土した段遺跡がある。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡については、明確な遺構の検出された遺跡は少なく、松ヶ迫 B 地点遺跡で、早期の押型文土器（黄島式併行）を伴う竪穴住居跡が確認された程度である。住居跡以外の遺構としては、陥穴と考えられる土坑がいくつかの遺跡で検出されているが、遺構に伴って土器等の出土したものは少なく、周辺調査区出土遺物や土坑の形態から縄文時代の遺構と考えられている。松ヶ迫 A 地点遺跡<sup>(15)</sup>（6 基）、緑岩遺跡<sup>(16)</sup>北調査区（10基）、南調査区（22基）、下本谷遺跡（郡衙政庁地点）（2基）、油免遺跡（12基）、畠尻遺跡<sup>(17)</sup>（6基）などで検出されている。その他の遺跡からは、断片的に土器が出土しているが、早期の押型文土器の出土例が多く、中期の資料は希薄である。このほか特徴的な遺物として、上山手廻寺跡<sup>(18)</sup>で出土したスタンプ形石製品（石冠）がある。

**弥生時代** 弥生時代前期の集落跡としては、浅い皿状の直径 4 m の竪穴住居跡内から縄文時代晚期の刻目突帯文土器片と遠賀川式土器片や石鎌、石錐などが出土した高峰遺跡<sup>(19)</sup>がある。このほかの弥生時代前期の集落跡については、大歳遺跡<sup>(20)</sup>の円形竪穴住居跡がこの時期の可能性があるものの、これ以外に明確な集落跡は見つかっていない。前期の墳墓としては、高平遺跡群<sup>(21)</sup>の高平 A 号墓があり、松ヶ迫矢谷遺跡<sup>(22)</sup>（D 地点）もこの時期の可能性がある。高平 A 号墓は 3 基の埋葬施設（木棺・土坑）上を角礫で覆った積石墓で、類例がほとんど知られていない。松ヶ迫矢谷遺跡（D 地点）では 12 基の埋葬施設（木棺・土坑）を確認しており、このうちの S T 1 内から 18 点の碧玉製管玉が出土しているが、土器類の副葬は認められない。

弥生時代中期の集落跡としては、県北の弥生時代中期後半の指標となる塩町式土器が出土した塩町遺跡<sup>(23)</sup>がある。調査では、10軒以上の竪穴住居跡が確認され、加飾性に富んだ壺、甕、高杯、鉢などが出土しているが、調査成果の詳細は明らかになっていない。塩町遺跡に先行する中期前半～中ごろの集落跡には、高平遺跡の 1・2 号住居跡や原田遺跡<sup>(24)</sup>がある。高平遺跡の 2 号住居跡では鍛冶作業が行われていたと推定されている。原田遺跡からは方柱状片刃石斧が出土している。このほか勇免遺跡<sup>(25)</sup>や前六反田遺跡<sup>(26)</sup>も塩町遺跡とほぼ同時期の集落跡とみられ、上下川沿いに立地する大谷遺跡<sup>(27)</sup>や線刻画の描かれた壺の出土した土森遺跡<sup>(28)</sup>でも竪穴住居跡が検出されている。中期の墳墓としては、四拾貫小原遺跡<sup>(29)</sup>、陣山墳墓群<sup>(30)</sup>、宗佑池西遺跡<sup>(31)</sup>、殿山墳墓群<sup>(32)</sup>をあげることができる。四拾貫小原遺跡では石列を伴う墳墓群（5 基の土坑墓）を検出している。陣山墳墓群は 5 基の墳丘墓で構成されるが、四隅突出型墳丘墓の成立過程を見るこことできる墳丘墓群として、国史跡に指定されている。3 基の貼石を伴う墳丘墓が見つかった宗佑池西遺跡も四隅突出型墳丘墓のもっとも古い形態のものと評価されている。また、これらに後続する殿山墳墓群では明瞭な突出部をもつ殿山 38 号墓・39 号墓の 2 基の四隅突出型墳丘墓が確

認されている。

弥生時代後期の集落遺跡としては、住田遺跡<sup>(33)</sup>、帰海寺谷遺跡<sup>(34)</sup>、岡竹遺跡、井上佐渡守土居屋敷跡<sup>(35)</sup>があげられる。住田遺跡と帰海寺谷遺跡は美波羅川中流域に営まれた小集落で、住田遺跡では円形の竪穴住居跡4軒が、帰海寺谷遺跡では円形の竪穴住居跡4軒と掘立柱建物跡1棟検出されている。岡竹遺跡では円形の竪穴住居跡2軒のうち1軒にベット状遺構が見られ、井上佐渡守土居屋敷跡でも、円形の竪穴住居跡が中世の土居屋敷の遺構とともに見つかった。後期の墳墓には、大仙大平山第21・22号古墳下層遺跡<sup>(36)</sup>、陣床山遺跡<sup>(37)</sup>、花園墳墓群<sup>(38)</sup>、岩脇遺跡<sup>(39)</sup>、矢谷墳丘墓<sup>(40)</sup>などがある。大仙大平山第21号古墳下層遺跡では、後期後半の箱式石棺7基、石蓋土坑1基、木棺1基が集中して見つかった。大仙大平山第22号古墳下層遺跡では、第21号古墳下層の墳墓群に先行する後期前半を中心とする箱式石棺2基、石蓋土坑4基、土坑2基、土器棺2基が検出されている。花園墳墓群は墳丘墓2基と溝で区切られた6つの墓域が検出された墳墓群で、埋葬施設の数は未確認のものを含めると500基にのぼると推定され、西日本有数の墳墓である。岩脇遺跡では四隅突出型墳丘墓とみられる2基の墳丘墓が調査されており、箱式石棺の隅部の形態などから後期後半ごろのものと推定されている。矢谷墳丘墓は弥生時代終末期の前方後方形の四隅突出型墳丘墓で、墳丘内から11基の埋葬施設が検出され、中心埋葬施設からはガラス製小玉や碧玉製管玉が出土している。周溝部分から墳丘墓上での祭祀に使用されたと考えられる多量の土器が出土しており、その中には山陰地方と共通する特徴をもつものや吉備型の特殊器台、特殊壺が出土しており、山陰・吉備地域との関係が注目されている。

古墳時代 古墳時代の調査例は多いが、集落跡の調査例については、古墳時代前期のものは少ない。三段畠遺跡<sup>(41)</sup>では6本柱の円形竪穴住居跡が確認されている。このほか、上下川沿いに近接する土森遺跡、大谷遺跡、油免遺跡では弥生時代から断続的に古代までの住居跡が確認されており、大谷・油免遺跡には前期の住居跡がある。この3遺跡は集落の時期的な推移が重なっており、土森遺跡では前期の住居跡ではなく、中期の住居跡については大谷遺跡でないが、土森・油免遺跡では存在しており、遺跡間の関係が注目される。中期以降の調査例は増加するが、帰海寺谷遺跡は5世紀初頭～6世紀初頭の集落で、三次地域で最古の例となる6世紀初頭の造り付けカマドがS B 4で検出されている。和知白鳥遺跡<sup>(42)</sup>は5世紀中頃～6世紀中頃の集落跡で、竪穴住居跡35軒、掘立柱建物跡4棟などが見つかっており、製塙土器やスサ入り粘土の出土も見られる。住居跡の中には鉄生産に関わる作業場も想定されている。三重1号遺跡<sup>(43)</sup>は5世紀中頃～6世紀後半の集落跡で、竪穴住居跡29軒、掘立柱建物跡2棟などが検出され、鍛冶炉やオンドル等との関連が考えられるL字形カマドのある住居跡も見られる。風呂谷遺跡も5世紀～7世紀の集落跡で、埋没谷（自然流路）を取り巻いて竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡2棟などが検出され、当該期集落の土地利用状況の一端を示す調査例となっている。松ヶ迫遺跡群<sup>(44)</sup>は6世紀後半～7世紀前葉頃の後期の集落跡で、A・B・F・Gの4地点が調査で明らかとなっている。このうちB・F地点は集落跡のほぼ全容が明らかとなっている。丘陵斜面を階段状に造成し、多くの住居跡が重複しているが、同時に存在した建物は竪穴住居跡6～10軒と他の建物跡数棟程度と考え

られている。多様な出土遺物や造り付けのカマドのあるものや鍛冶炉のあるものなどもあり、山間地域における後期集落跡の様相を理解するうえで重要な遺跡群である。ここまで見たように、中期から後期集落跡には鉄製品生産に関わる遺構が多く見られるが、白ヶ迫製鉄遺跡<sup>(45)</sup>では、6世紀後半頃とみられる2基の砂鉄を原料とする製錬炉が確認されている。付近には、精錬の際に使用する木炭を生産したと考えられる半地下式横口型炭窯（通称ヤツメウナギ）が発見された植松炭窯<sup>(46)</sup>がある。また、同形態の炭窯は南山遺跡<sup>(47)</sup>でも見つかっている。植松炭窯は7世紀中ごろ、南山遺跡の2基の炭窯は7世紀後半～8世紀と考えられている。このほかの生産遺跡として、2基の須恵器窯跡を検出した松ヶ迫窯跡群<sup>(48)</sup>がある。6世紀後半頃のものと考えられており、付近に竪穴住居跡2軒と作業場とみられる建物跡がセットで確認されている。

古墳については、先に述べたように約4,000基が三次市域で確認されている。その多くは古墳時代中期～後期に築造されたもので、前期古墳とされるものは少ない。昭和30年に調査が実施された岩脇古墳（岩脇第1号古墳）<sup>(49)</sup>は、竪穴式石室の形状や他の埋葬施設の状況から4世紀代の可能性が考えられている。前方後円墳である若宮古墳<sup>(50)</sup>は、未調査であるが、墳丘の前方部と後方部の比がほぼ1：1であることから前期のものである可能性がある。宮の本第24号古墳<sup>(51)</sup>は径30m、高さ4mの三段築成の円墳で、上段埴輪斜面にはほぼ全面に葺石が施され、下段平坦面に92本の埴輪列が検出された。墳頂部の埋葬施設は南北に並列して3基あり、竪穴式石室とその北側に大型箱式石棺、南側に半壊状態の箱式石棺がある。埴輪の特徴から4世紀末頃の築造と考えられている。この古墳を取り巻くように宮の本第25号古墳<sup>(52)</sup>をはじめとする円墳が所在しており、同時に調査が実施された古墳は、5世紀～7世紀前半の築造であることが判明している。それぞれの古墳の埋葬施設は、土坑・箱式石棺・横穴式石室で、その変遷過程を追える調査となっている。

中期には大形古墳が築造され始めるとともに、小地域単位の小規模な古墳が増加し古墳群を形成するようになる。四拾貫古墳群<sup>(53)</sup>（約140基）、浄楽寺古墳群<sup>(54)</sup>（117基）、七ヶ塚古墳群<sup>(55)</sup>（60基）はその代表的な古墳群である。糸井大塚古墳<sup>(56)</sup>は全長約65mの帆立貝形古墳で、周庭帯を含めると100mを越しており、三次地域最大の規模である。未調査のため詳細は不明であるが、墳丘は三段築成で、葺石や埴輪（円筒埴輪・家形埴輪）が確認されており、三次地域を統括した首長墓と考えられている。また、吉舎町では、帆立貝形古墳である八幡山第1号古墳<sup>(57)</sup>（全長45m）、三玉大塚古墳<sup>(58)</sup>（全長41m）、海田原第4号古墳<sup>(59)</sup>（全長42m）が相次いで築造されている。中期末頃には、三次市街地の南側の丘陵に酒屋高塚古墳が築造されている。全長46mの帆立貝形古墳と推定されており、2基の竪穴式石室が確認され、その第1石室から画文帶神獸鏡が出土している。この鏡は、江田船山古墳（熊本県）と同范のもので、大和王權との強いつつながりが想定されている。これらの帆立貝形古墳は、三次地域の特色のひとつとなっているが、上大綱古墳<sup>(60)</sup>の墳形は、円丘の南北に方形部が敷設された双方中円墳で、三次地域唯一のものである。全長約26mで、周溝部分から中期後半頃の円筒埴輪や土師器が出土している。

後期になると、群集墳が形成され、古墳の数は爆発的に増加し、新たに横穴式石室が構築され

はじめる。全長約22mの前方後円墳の若屋第9号古墳<sup>(61)</sup>は、後円部に両袖式の横穴式石室があり、県内でも最古級の横穴式石室と考えられ、6世紀前半ごろのものとされている。その本格的な普及は6世紀後半からで、栗屋高塚古墳<sup>(62)</sup>、岩脇大久保古墳<sup>(63)</sup>、四拾貫第16号古墳<sup>(64)</sup>、久々原第2号古墳<sup>(65)</sup>などは大型の横穴式石室を埋葬施設としている。寺側古墳<sup>(66)</sup>は長さ約6.6mの無袖式の横穴式石室を埋葬施設としており、石室内に石を立てて埋葬区画を作り、床面に敷石を施している。このように床面に敷石を伴う例としては、陣床山第5・6号古墳<sup>(67)</sup>、札場古墳<sup>(68)</sup>などがある。また、須恵器の壺身・壺蓋などを石室の床面に敷いた古墳としては風呂谷古墳<sup>(69)</sup>、大仙大平山第22号古墳<sup>(70)</sup>、見尾山第1号古墳<sup>(71)</sup>、皇渡古墳<sup>(72)</sup>、植松第3号古墳<sup>(73)</sup>などがある。これらの敷石や土器床をもつ古墳は、三次盆地を中心とした地域に特色的にみられる。終末期の古墳は小型の横穴式石室を埋葬施設とするものが多い。和知白鳥第1～3号古墳<sup>(74)</sup>は、和知白鳥遺跡調査時に発見されたものある。3基のうち最大の規模の第3号古墳の石室の内法は、幅0.6m、長さ2.5mで、出土した須恵器から7世紀後半頃と考えられている。

古代 現在の三次市域は、古代の三次郡、三谷郡、高田郡・世羅郡・甲奴郡の一部に当たり、西端部は備後・安芸国の境界となっていた。平城京出土の「備後三上郡（現庄原市）調銅壹拾口天平一八（746）年」と記された木簡などから当地を含めた県北地域は、税を鉄製品で納めるほど古代から鉄の生産の盛んな地であった。

古代の遺跡としては官衙跡、寺院跡などがあり、中でも県史跡の下本谷遺跡<sup>(75)</sup>は三次郡の郡衙として著名である。7世紀後半～9世紀に造営群は4時期に分けられ、コの字上に建物配列が明らかになっている。このうちの正殿とみられる掘立柱建物跡は、四面庇建物から二面庇建物、さらに側柱建物に変化している。I期には、轆の羽口、鉄滓、砥石などが出土から、鍛冶工房と考えられる掘立柱建物跡も見つかっている。三谷郡の郡衙は地名や園場整備に伴うなどか試掘調査の知見から、志幸町幸利地区にあった可能性が指摘されている。寺院跡には、本古墳群近くに所在する寺町廃寺跡<sup>(76)</sup>、上山手廃寺跡<sup>(77)</sup>などがある。9世紀前半の仏教説話集「日本靈異記」に記載された三谷寺に比定される寺町廃寺跡は、西に金堂、東に塔、その奥中央に講堂を配した法起寺式の伽藍配置である。多量の瓦や磚のほか唐三彩も出土し、瓦の中には特徴的な軒丸瓦の瓦頭に三角形状の突起の付く「水切り瓦」がある。7世紀後半～末頃に創建されたと考えられる。寺町廃寺跡の南西約1kmには上山手廃寺跡がある。寺町廃寺跡と同様の伽藍配置と考えられるが、塔跡は検出されていない。多量の瓦磚類や土器が出土しているが、瓦の中には寺町廃寺跡と同様のものがある。寺町廃寺に続いて7世紀末頃創建されたものと考えられている。同時期の和知町の大当瓦窯跡<sup>(78)</sup>は5基程度の窯の存在が知られるが、このうちの1基の調査では、寺町廃寺と同様のものも出土している。これらのほかに、北野山遺跡<sup>(79)</sup>では掘立柱建物跡2棟、土坑、柱穴列が検出され、9世紀後半～10世紀初頭頃の山林に設けられた修業の場である仏教関連施設の可能性が考えられている。この項の最初に述べた鉄生産に関しては三良坂町の道ヶ曾根遺跡<sup>(80)</sup>で、7世紀～8世紀の集落跡が検出され、鍛冶炉や円面鏡が7点出土している。一般的な集落内の鍛冶作業と考えにくく、律令体制下において専門的な鉄製品の生産を行っていた可能性が高い。

中世 平安時代末期、備北地域には大田荘（世羅郡）、地毗莊（庄原市）、泉莊（庄原市）など多くの莊園が存在したが、三次市域では甲奴町の小童保を除き、その存在が確認されていない。このことは、三次地方は国衙領として存続し、地元有力者らが在庁官人として組織されていたことを示しているとも言えるが、当時の状況は不明な部分が多い。南北朝期以降の状況については、三吉氏及び広沢氏（後の和智氏、江田氏）の動向として史料にあらわれてくる。三吉氏の出自については明らかでないが、三次郡にあって、南北朝期からその活動が知られる。やがて室町幕府の奉公衆に名を連ね、その居城は畠敷町の比叡尾山城<sup>(81)</sup>とされる。天正年間には三次町の比熊山城<sup>(82)</sup>にその本拠を移したとされている。広沢氏は相模國波多野莊を本貫地とする波多野氏から分流し、武藏國広沢郷を保有した保元元（1156）年以後に広沢姓を名乗っている。13世紀後半には三谷郡に移住してきたと考えられており、14世紀初めには江田・和智の両家に分流し、戦国時代末まで江田荘・和智荘を中心とする地域の国人として活躍する。和智氏は南北朝期に、広沢懇領家に替わり幕府から三谷西条（現吉舎町・三良坂町）を安堵され、その本拠地を吉舎町の南天山城<sup>(83)</sup>に移している。一方、江田氏は三若町の旗返山城<sup>(84)</sup>を本拠としていた。3氏は国人領主としてそれぞれ成長していくが、15世紀末の応仁・文明の乱を経て、西の大内氏と山陰の尼子氏の影響力が及ぶようになると、他の周辺国人衆と同様に、両氏の間で離合集散を繰り返すようになる。当古墳群周辺を舞台として、大永7（1527）年に尼子軍と大内・毛利連合軍が合戦に及んだ和智細山合戦は、大内・毛利方の勝利に終わったが、戦国時代に備後で展開された最初にして最大の激戦の一つとみられている。この合戦の際、尼子氏は和智氏の支城とされる國広城<sup>(85)</sup>に入っており、陣城としてハチが壇城<sup>(86)</sup>及び南山城<sup>(87)</sup>を築いたとされる。これらの城跡が古墳群の北方に所在している。一方、大内氏・毛利氏は古墳群の所在する尾根を上った頂部の茶臼山城<sup>(88)</sup>と古墳群西方の陣山城<sup>(89)</sup>に入ったとされている。合戦に際しての3氏の動向は不明確な部分があるが、当初、尼子方であった和智氏は合戦中に大内方に転じ、三吉氏は尼子方、江田氏が大内方であったと考えられている。その後の郡山合戦や敵島合戦を経て、毛利氏が中国地方の霸者となる過程で、江田氏は天文22（1553）年に毛利氏の軍門に下り滅亡し、三吉・和智氏は毛利氏の支配体制の中に組み込まれていった。

ここまで述べたような状況の中で、中世の遺跡として目につくものは、山城跡が中心となる。発掘調査の実施された城跡は少ないが、粟屋町の加井妻城跡<sup>(90)</sup>は最高所の郭の南側（背後）を土塁・堀切で区画し、北側に向かって郭を連ねている。小規模な建物跡や鍛冶遺構などが検出され、輸入陶磁器や国産陶器などの出土遺物から15世紀後半～16世紀の使用が考えられている。天城山城跡<sup>(91)</sup>は國広城跡の一部と考えられ、備前焼や瀬戸・美濃焼などの戦国期の遺物が出土している。和知町の陣山城跡<sup>(92)</sup>は4つの郭と土塁、複数の堀切・堅堀が確認されており、4棟の小規模な建物跡が検出されている。同じく和知町の古城山城跡<sup>(93)</sup>は、3段の郭の背後を土塁と堀切で遮断し、先端部にも堀切を設けた比較的単純な網張りで、15世紀代の青磁が出土している。井上佐渡守土居屋敷跡は三吉氏の居城であった比叡尾山城跡の南東約1.5kmに位置し、掘立柱建物跡1棟、井戸、堀などが検出された土居屋敷跡である。本古墳群に近接して所在する小城

城跡<sup>(94)</sup>は、主に3段の郭からなり、背後の北側に堀切と土塁状の高まりがある。このほかの遺跡としては、古代～近世の集落跡である山崎遺跡<sup>(95)</sup>があげられる。注目されるのは2枚の円札に挟まれた和鏡と古錢、土師質土器皿の出土遺物で、2枚の円札には墨書が表裏に施され、その内容から何らかの呪術行為が行われたものと考えられている。

#### 参考文献

- 広島県教育委員会『広島県遺跡地図』電子版  
広島県『広島県史 地誌編』 1977年  
三次市『三次市史』 I 2004年  
三次市『三次市史』 II 2004年  
角川書店『角川日本地名大辞典 広島県』 1987年

#### 註

- (1) 広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』 1983年  
(2) 三次市『三次市史』 II 2004年  
　　三枝健二「三次盆地の地形と歴史—旧石器時代—」『研究紀要』第5集 広島県立歴史民俗資料館 2005年  
(3) 広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』 1980年  
　　広島県教育委員会『下本谷遺跡第2次発掘調査概報』 1981年  
　　広島県教育委員会『下本谷遺跡第4～6次発掘調査概報』 1983～1985年  
　　三次旧石器文化研究会『下本谷遺跡の基礎的研究』 2007年  
(4) 姉尾周三『三次市南島敷宗祐池採集の旧石器』『芸備』第12集 芸備友の会 1982年  
(5) 三枝健二「松ヶ迫遺跡群出土の流紋岩製石器について」『旧石器考古学』第36集 旧石器文化談話会 1988年  
(6) 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『地宗寺遺跡発掘調査報告』 1982年  
(7) 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『下山遺跡発掘調査報告』 1980年  
(8) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15) 和知白鳥遺跡1』 2011年  
(9) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20) 段遺跡』 2012年  
(10) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(31) 風呂谷遺跡・風呂谷古墳』 2014年  
(11) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塙ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(IV) 2003年  
(12) 三枝健二「いわゆる石器資料について」『研究紀録』V 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1995年  
(13) 註(6)と同じ  
(14) 三枝健二「吉舎町德市遺跡出土のナイフ形石器」「みよし風土記の丘」8 みよし風土記の丘友の会 1982年  
(15) 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』 1981年  
(16) 広島県教育委員会『綠岩古墳』 1983年  
(17) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(35) 煙尻遺跡・若見迫遺跡』 2014年  
(18) 広島県教育委員会『上山手廻寺跡第2次発掘調査概報』 1980年  
(19) 註(6)と同じ。  
(20) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『大歳遺跡』 1994年  
(21) 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』第九集 1971年  
(22) 註(4)と同じ。

- 四 松崎寿和「古代村落の復元－広島県三次盆地を中心として－」『広島県双三郡・三次市史料総覧』第一編 双三郡・三次市史刊行会 1956年
- 54 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「原田遺跡」 1998年
- 55 伊藤実「勇免遺跡」『三次市史』II 三次市 2004年
- 56 伊藤実「前六反田遺跡」『三次市史』II 三次市 2004年
- 57 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「灰塙ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(VI) 2003年
- 58 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「灰塙ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(VII) 2003年
- 59 四拾貢小原発掘調査団「四拾貢小原」 1969年
- 60 三次市教育委員会「陣山遺跡」 1996年
- 61 三次市教育委員会「宗祐池西遺跡」 2000年
- 62 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大判・上定・殿山」 1987年
- 63 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1997年
- 64 註54と同じ。
- 65 三次市教育委員会「井上佐渡守土居屋敷跡」 1998年
- 66 三次市教育委員会「大仙大平山第21・22号古墳」 2000年
- 67 陣床山遺跡発掘調査団「陣床山遺跡群の発掘調査」 1973年
- 68 三次市教育委員会「史跡 花園遺跡－調査と整備－」 1979年
- 69 三次市教育委員会「史跡 花園遺跡－第二次調査と整備－」 1980年
- 70 河瀬正利「三次市岩脇遺跡」「芸備」第25集 芸備友の会 1996年
- 71 三次市教育委員会「深茅遺跡・岩脇墳墓群」 2013年
- 72 註54と同じ。
- 73 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「三段畠遺跡」 1990年
- 74 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（19）和知白鳥遺跡2」 2012年
- 75 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（28）三重1号遺跡」 2013年
- 76 註54と同じ。
- 77 三良坂町教育委員会「白ヶ迫製鉄遺跡」 1994年
- 78 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「植松遺跡群」 1987年
- 79 三次市教育委員会「南山遺跡」 2012年
- 80 註54と同じ。
- 81 潟見浩「遺跡・遺物の概要」『広島県双三郡・三次市史料総覧』第五編 広島県双三郡・三次市史料総覧刊行会 1974年
- 82 註54と同じ。
- 83 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第20～26・31・32号古墳」 2013年
- 84 註54と同じ。
- 85 桑原隆博「四拾貢古墳群」『三次市史』II 三次市 2004年
- 86 伊藤実「淨秦寺・七ヶ塚古墳群」『三次市史』II 三次市 2004年
- 87 註54と同じ。
- 88 桑原隆博「三次地域における古墳の様相（1）一糸井大塚古墳－」『芸備』第16集 芸備友の会 1986年
- 89 広島県双三郡・三次市史料総覧刊行会「広島県双三郡・三次市史料総覧」第五編 1974年
- 90 古舎町教育委員会「三玉大塚古墳」 1983年
- 91 註54と同じ。

- 例 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『上大網古墳・下の創造跡』 1989年
- 例 松崎寿和・潮見浩「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻 広島市 1961年
- 例 山崎信二『横穴式石室の地域別比較研究（中・四国編）』 1985年
- 例 三次市教育委員会『岩脇大久保第1号古墳・岩脇大久保遺跡』 1991年
- 例 妹尾周三「四捨貫第16号古墳」『三次市史』II 三次市 2004年
- 例 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979年
- 例 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『寺衝古墳』 1995年
- 例 註90と同じ。
- 例 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（7）札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年
- 例 註90と同じ。
- 例 註90と同じ。
- 例 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 1994年
- 例 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『皇波古墳発掘調査報告書』 1987年
- 例 註90と同じ。
- 例 註90と同じ。
- 例 広島県教育委員会『下本谷遺跡第1～6次発掘調査概報』 1980～1985年
- 例 三次市教育委員会『備後寺町房寺跡一推定三谷寺跡第1～3次発掘調査概報』 1980～1982年
- 例 広島県教育委員会『上山手磨寺跡発掘調査概報（1～3）』 1979～1981年
- 例 三次市教育委員会『備後寺町房寺跡一推定三谷寺跡第4・5次発掘調査概報』 1982・1983年
- 例 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（8）北野山遺跡』 2009年
- 例 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(II) 1998年
- 例 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第四集 1996年
- 例 註90と同じ。
- 例 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『山崎遺跡』 1994年

### III 調査の概要

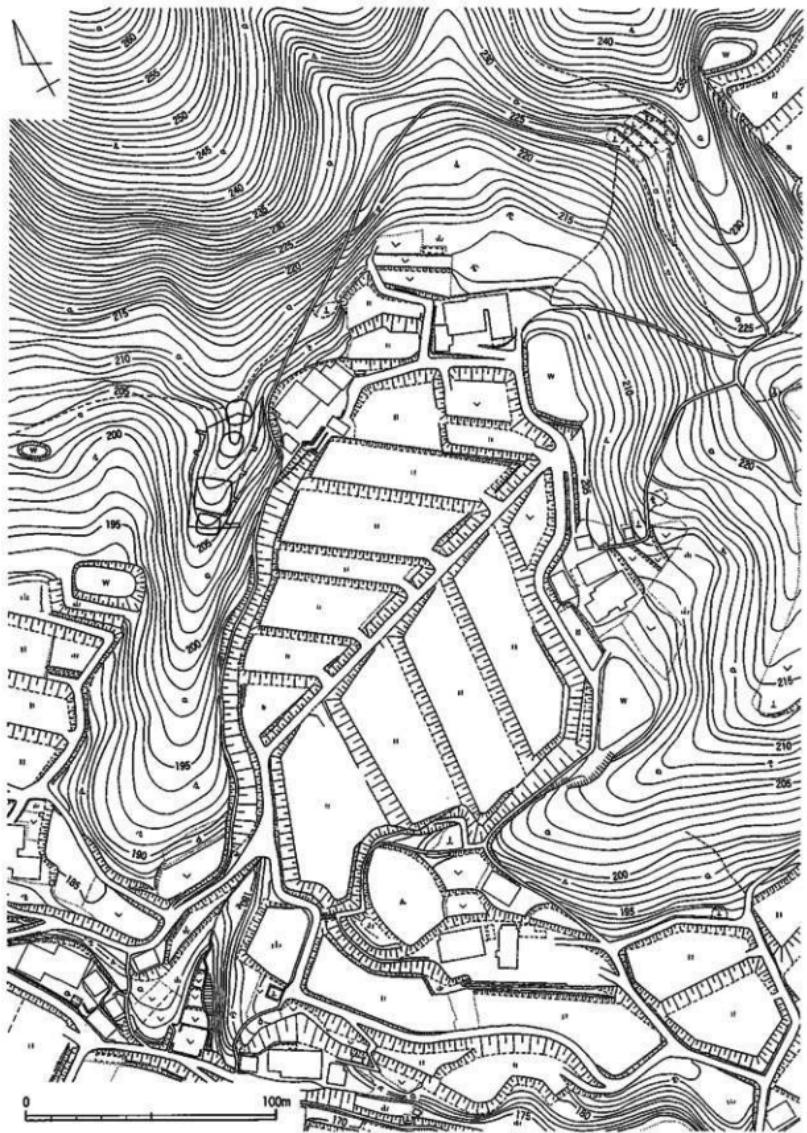
箱山第3～6号古墳は三次市向江田町字箱山に所在する。馬洗川と支流の国兼川とに挟まれた地帯には川に沿って開けた水田地帯があり、その北・東側には低丘陵が展開する。本古墳群は北側丘陵の一画を占める天良山（標高311.8m）から南西に延びる細い尾根上にあり、第1号古墳から第9号古墳まで計9基の古墳からなる。当初、第3～5号古墳を対象として調査に着手したが、調査途中に第5号古墳調査範囲内で新たに古墳の一部を確認した。この古墳はすでに分布調査で確認されていた第6号古墳に該当することが判明したため、合わせて調査を行った（第4・5図）。調査区は標高が203～211mであり、周囲の谷水田との標高差は約10mである。調査前は第3～6号古墳周辺の尾根は山林であり、第4号古墳墳頂部には祠のコンクリート基礎が残っていた。

発掘調査は最初に地形測量を行い、墳丘の高まりを基準に各所に土層観察用の畦を残しながら人力による遺構検出作業を行い、各埋葬施設を確認しながら遺構の掘り下げを行った（第4・5図、なお、第4図の墳形は表土掘削前の測量時に推定した墳幅ラインである）。

第3号古墳は調査区外に墳丘が続いているが、直径10m程度、高さ1.6～2.5mの円墳と推定される。尾根部分に地山を削り込んで、幅3.1～3.7m、深さ0.5～0.8mの周溝を巡らしている。埋葬施設は大半が調査区外に拡がるため、詳細は明らかにできなかったが、両袖式または片袖式の横穴式石室と推定される。天井石はすべて抜きとられており、石室内も荒らされているようである。墳丘外の東側斜面から須恵器破片が多数まとまって出土したほか、土師器・弥生土器の破片や耳環1点などが出土している。

第4号古墳は直径8.4～10m、高さ0.8～1.75mの円墳である。尾根の地形に制約され、北東～南西方向に長い楕円形になっている。墳丘には葺石などの外表施設はなく、墳丘の周囲で周溝は検出していない。埋葬施設は墳頂部に3基ある。SK4-1は中心埋葬で、箱式石棺である。石棺の内法は全長約1.7mである。石棺内側には赤色顔料が塗られていた。SK4-2は從属葬で、小型の箱式石棺である。SK4-3は從属葬で、小型の石蓋土坑である。SK4-2・SK4-3は幼児墓とみられる。遺物はSK4-1の石棺内からガラス製小玉が4点出土した。

第5号古墳は2段築成の方墳である。下段の幅は北東～南西方向が12.7～13.7m、北西～南東方向が13.2～14.2m、上段の幅は北東～南西方向が9.3～10.3m、北西～南東方向が9～9.3m、下段からの高さは1.4～3.2mの規模である。墳丘の北東側と南西側で尾根を切断して直線的な溝を掘り、墳丘を造成している。墳丘の外表施設は葺石が墳頂部を除いて上下2段に存在する。各段の基底部には人頭大の自然石を縦長に据え付け、その上部は拳大の小型の石を使用している。下段上部と上段裾部の間には帯状にめぐる幅0.5～1mのテラス面があるが、埴輪等は出土しなかった。埋葬施設は墳頂部に3基、北東側溝の北西端付近に3基の計6基ある。SK5-1は中心埋葬の箱式石棺で、石棺の内法は全長約1.67mである。床面全面に小円礫を敷き詰めて礫床とし、北東端に灰白色粘土を厚さ約3cm敷いて枕としている。石棺内側には赤色顔料が塗られていた。



第3図 周辺地形図(1:2,000)(アミ目は調査区)

S K 5-2は從属葬の箱式石棺で、石棺の内法は全長約1.34mである。床面にはS K 5-1と同様、碌床と粘土枕があり、石棺内側に赤色顔料が塗られていた。墳頂部のS K 5-3及び北東側溝の北西端付近にあるS K 5-4～S K 5-6は從属葬で、小型の石蓋土坑である。いずれも規模が小さく幼児墓とみられ、時期的にはS K 5-1・S K 5-2よりも新しい。遺物はS K 5-1の石棺内から銚1点・鉄錐1点・堅櫛1点が、S K 5-5の墓坑内から石製勾玉3点・石製白玉5点が出土した。

第6号古墳は一辺9～9.8m、高さ0.7～2mの方墳である。墳丘には葺石などの外表施設はないが、墳丘の周囲では周溝を検出した。南東側の周溝は斜面で流失しているが、北西側の周溝は尾根部分の地山を掘り込んでおり、幅約1m、深さ0.1mほど残っている。埋葬施設は墳頂部に3基ある。S K 6-1は中心埋葬で、組合式木棺である。木棺の内法は長さ約1.7m、幅0.25～0.35mと復元できる。S K 6-2・S K 6-3は從属葬で、小型の箱式石棺であり、幼児墓であろう。遺物は墳丘斜面から石製勾玉1点・石製菅冠1点が出土した。

第3号古墳は出土遺物から6世紀後半～7世紀前半頃に築造され、7世紀前半頃に追葬が行われたと考えられる。また、第4～6号古墳は立地・墳丘盛土・葺石・埋葬施設・出土遺物などから4世紀代～5世紀代に、第4号→第5号→第6号の順に築造されたと考えられる。

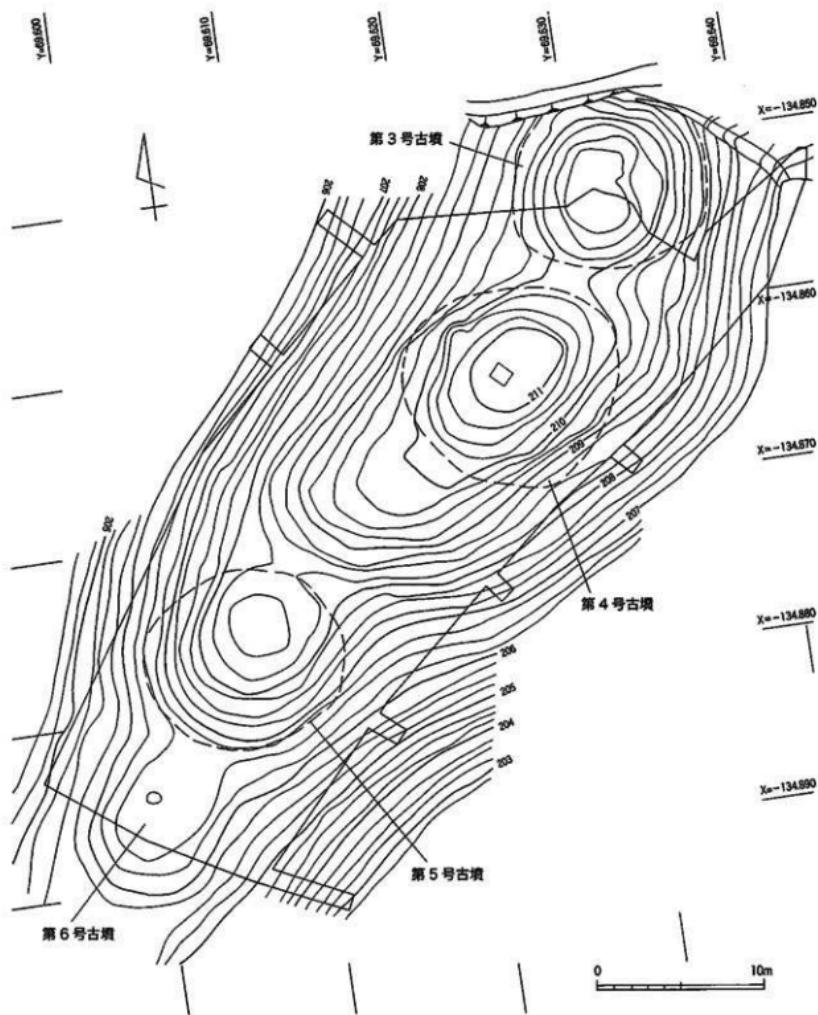
なお、第4～6号古墳の箱式石棺の石材及び第5号古墳の葺石の石材は、概ね流紋岩質結晶溶結凝灰岩と分析されている。

第2表 箱山第3～6号古墳一覧表

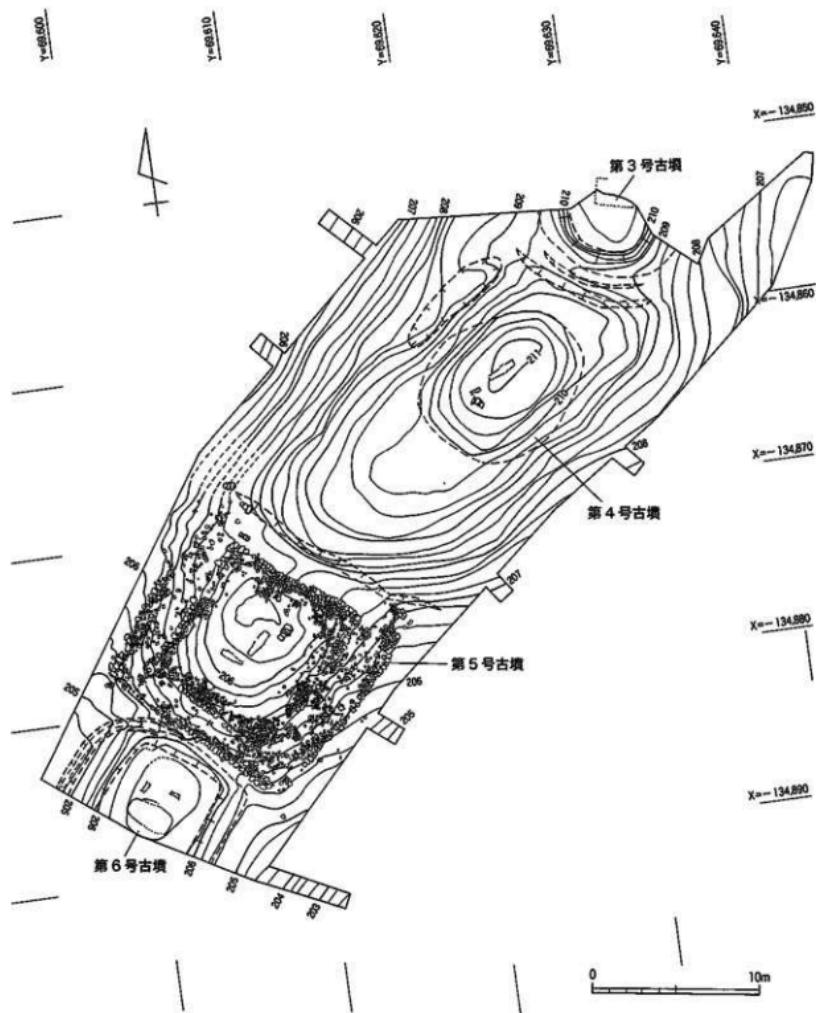
古墳 番号	理査 施設 登記 番号	内容	主軸方向	標位	尼根部 との 関係	墓室の 平面形	前方後圓 (cm) <sup>*</sup>		石蓋範囲 (cm) <sup>*</sup>		石棺内法 (cm) <sup>*</sup>		板石の枚数	出土遺物	備考
							長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ			
第3号		円墳、底径約10m、高さ約1.8～2.5m、石なし、周溝あり、埴丘外（東側斜面）から須恵器片多数・耳環1点など出土。	複合式石室	N102°E 東南東	直交	長方形	-	110	-	-	240	(160)	-	-	両袖または片袖式か、天井石欠か。
第4号		円墳、底径約4.10m、高さ約0.8～1.75m、葺石なし、周溝なし、埴丘周辺から土防熱片など出土。	複合式石室	N64°E 東北東	平行	長方形か	287	160	63	237	96	170	43	7 5・5	ガラス製小玉4点
第5号		複合式石室	N 72°E 西北東	平行	長方形	95	68	25	67	40	50	19	2 2・3	幼児墓か。	
		石蓋土坑	N 40°W 西北	直交	扇円形	56	32	25	76	43	38	16	5	-	幼児墓か。
方墳、2段構成、幅12.7～13.7×13.2～14.2m、高さ1.4～3.2m、葺石あり、尾根の前傾に有り、埴丘周辺から土防熱片など出土。															
SK5-1	石蓋式石棺	N 48°E 北東	平行	長円形	268	182	116	210	90	167	45	5 6・5	馬1点、 馬頭1点、 馬鞍1点、 馬繩1点	石棺内側に赤色顔料	
SK5-2	石蓋式石棺	N 50°W 北西	直交	長方形	225	116	70	147	76	134	37	5 4・5	馬頭1点、 馬鞍1点、 馬繩1点	石棺内側に赤色顔料	
SK5-3	石蓋土坑	N 36°E 北東	平行	長方形	76	54	30	101	62	67	45	5	-	幼児墓か。	
SK5-4	石蓋土坑	N 126°E 南東	直交	長方形	86	40	36	71	21	37	13	4	-	幼児墓か、 壁間に繩を張る	
SK5-5	石蓋土坑	N 136°E 南東	直交	長円形	92	65	80	83	56	30	8	3	-	石輪軸至3 点、石輪臼 至5点	
SK5-6	石蓋土坑	N 102°E 東南東	直交	長円形	65	45	38	73	42	43	26	3	-	幼児墓か。	
方墳、一辺約9～9.8m、高さ約1.7～2m、葺石なし、周溝あり、埴丘周辺から土防熱片・石輪軸1点・石輪臼1点など出土。															
SK6-1	複合式木棺	N 126°E 南東	直交	長方形	276	150	44	-	-	(170)	(35)	-	-	木棺周縁で私財出	
SK6-2	石蓋式石棺	N 45°E 北東	平行	長方形	130	104	45	93	55	58	22	4 3・4	-	幼児墓か。	
SK6-3	石蓋式石棺	N 127°E 南東	直交	長方形	101	63	41	70	39	52	19	3 2・2	-	幼児墓か。	

\*1 計測値は最大値。（ ）は推定値

\*2 計測値は最大値。木棺の場合内法、石蓋土坑の場合土坑の下端。（ ）は推定値



第4図 調査前地形測量図(1:300)



第5図 第3～6号古墳位置測量図(1:300)

## IV 遺構と遺物

### 1 箱山第3号古墳

#### (1) 立地と調査前の状況 (第4・5図、図版1a～2b・3a)

調査区の北東端に位置し、墳丘中央部付近が調査区の境界となっている。墳頂部の標高は約211.09mである。南西側に第4号古墳が所在し、北東側の調査区外に第2号古墳がある。また、第3号古墳の北側の調査区外に尾根を横切る峠道が東西方向に通っており、その山道によって第3号古墳の墳裾の一部が削られている。調査は古墳の南側の調査区内について行い、北側の調査区外は未調査である。調査前の観察では石室は露出していなかった。調査前の試掘の際に墳頂部において石室の一部を確認していた。

#### (2) 墳丘、周溝 (第6・7図、図版3b～5a)

古墳の状況は北側の調査区外が未調査のため不明確であるが、直径10m程度の円墳と推定される。高さは南西側の周溝の底面から約1.6m、西側墳裾から約1.7m、南東側墳裾から約2.5mである。東側の斜面が急傾斜のため、西側に比べて東側が高くなっている。墳丘には石積や列石などの外表施設は調査区内では検出されていない。なお、墳丘の南側から西側にかけて周溝が廻っている。

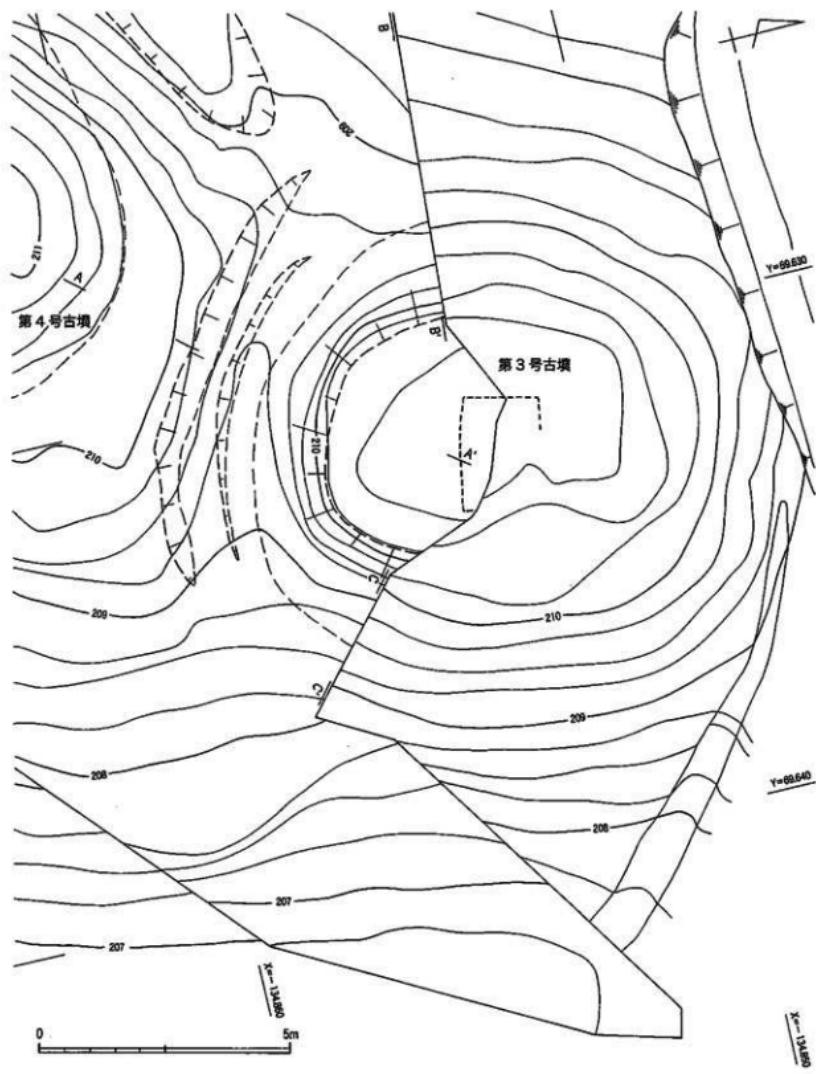
**墳丘の土層断面** 墳丘南西側の南西-北東方向の土層断面をA-A'、墳丘西側の東西方向の土層断面をB-B'、墳丘南東側の北西-南東方向の土層断面をC-C'とする。

A-A'は石室をやや斜めに横断する方向である。土層断面を下方から順にみると次のとおりである。①掘方は地表面を掘り込み、石室を構築している。掘方内に33～41層を埋めており、黒色系土(33・34・39・41層)と黄褐色系土(37・38・40層)を交互に積み重ねている。同時に地表面直上に35・36層を積んでいる。②石室側壁を構築しながら14～32層を積んでおり、黒色系土(15・17・19・20・23～32層)と黄褐色系土(14・16・18・21・22層)を交互に積み重ねている。この間では黄褐色系土は上位に多く、下位にはほとんどない。③天井石を架構しながら、10～13層を積んでおり、黒色系土(10層)と黄褐色系土(11～13層)を積み重ねている。この間では黄褐色系土がほとんどである。なお、10・11層より上は1層(表土)になっており、かつての盛土は流失している。本来は上方にさらに盛土されていたと思われる。

B-B'は墳丘西側の墳裾付近を断ち割った状況で、石室までは到達していない。墳丘盛土は3～5層で、暗灰色土(3層)と黄褐色系土(4・5層)を積み重ねている。

C-C'は墳丘南東側の墳裾付近を断ち割った状況で、石室までは到達していない。墳丘盛土は4～9層で、4層と5～9層で大きく分かれる。まず、5～9層を積み重ね、その後4層を積んでおり、A-A'の②～③の状況と似ている。

**周溝** 周溝は墳丘の南側から西側にかけて廻っており、尾根部分の地山を2段に掘り込んでいる。規模は長さ約9m、上端の幅3.1～3.7m、下端の幅約0.5～0.8m、深さ約1mである。埋土

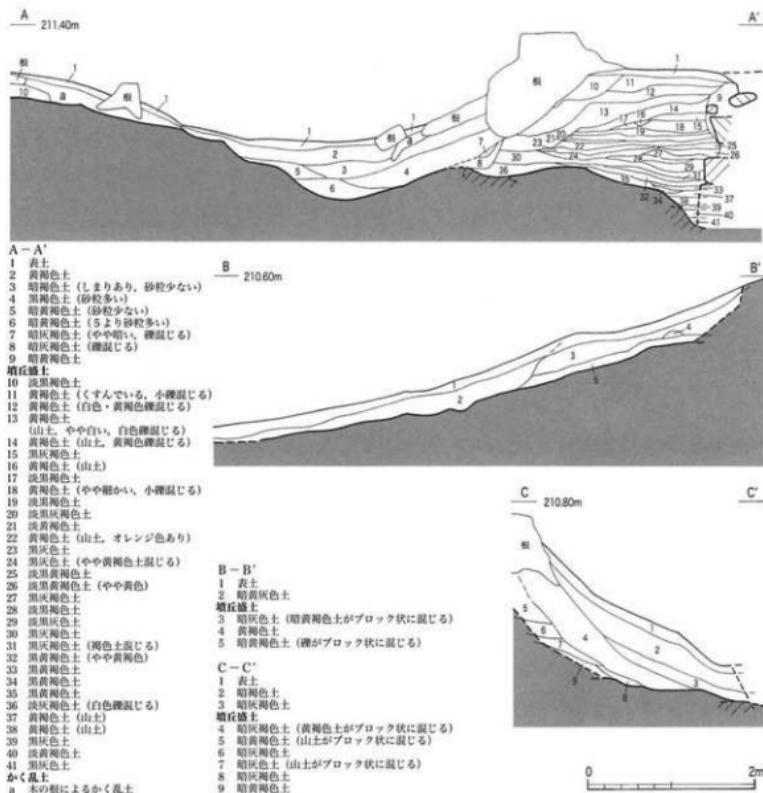


第6図 第3号古墳墳丘測量図(1:100)

は土層断面A-A'の2~6層で、レンズ状に自然堆積している。

### (3) 埋葬施設 (第8図、図版5 b~6 c)

埋葬施設は墳丘のほぼ中央部に位置する。埋葬施設の大半が調査区外であるため、調査の範囲は南側から西側にかけての一部にとどまった。そのため、埋葬施設の全体の詳細は不明であるが、確認した側壁の状況から横穴式石室と推定された。調査時には玄室の天井石はすべて抜きとられており、石室内の状況は不明であるが、荒らされた状態と考えられる。羨道が調査区外のため未確認であるが、玄室の南東隅の石が袖石と想定されることから、両袖式あるいは片袖式の横穴式



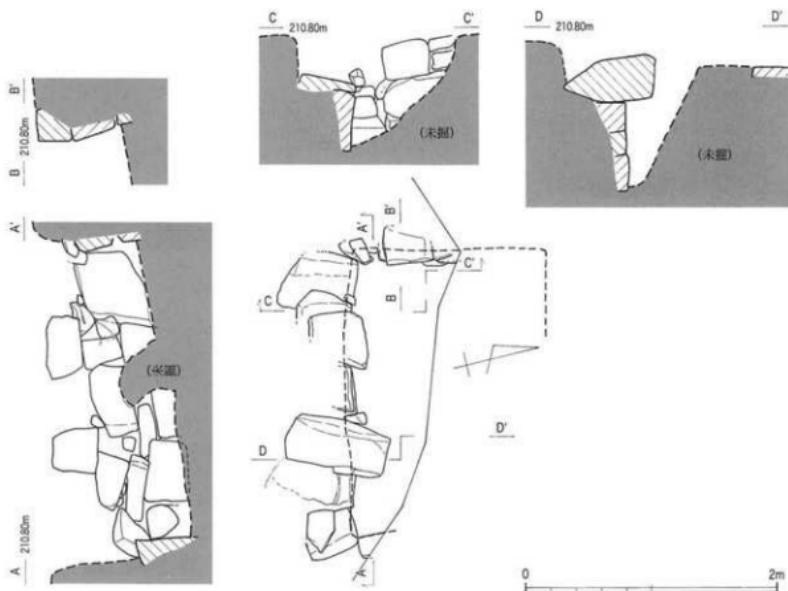
第7図 第3号古墳土層断面実測図(1:60)

石室と考えられる。主軸方向は西北西-東南東方向（N103°E）で、東南東方向に開口するとみられる。玄室の規模は長さ約2.4mで、幅は不明だが、ピンボールによる探査から1.6m程度と推定される。玄室の高さは現状で約1.1mであるが、奥壁・側壁の上部の石が欠失している可能性があるため、本来は1.1m以上とみられる。床面の状況は床面までの掘り下げができなかつたため不明である。掘方の規模・形状についても墳丘全体の掘り下げができなかつたため不明である。

天井石 天井石は調査区内では確認されず、天井石の枚数・大きさ・形状は不明である。

奥壁 奥壁は幅1.6m程度と推定され、そのうち、南寄りの上部の幅約0.8m、高さ約0.8mの範囲を検出した。奥壁の基底石の状況は不明である。検出した範囲での奥壁の状況は板石を横長にして、横方向に2列以上並べ、縦方向に3段以上積み重ね、やや内傾気味に立ち上げている。板石の大きさは横幅約0.2～0.5m、縦約0.1～0.3mで、奥行き0.3m程度とみられる。

左側壁 玄室南側の左側壁は長さ2.4mである。左側壁の上方の壁面を検出し、その東寄りの一部では床面近くまで掘下げたと思われる。その東寄り下位の石3個は基底石と考えられ、そのうち、東端の1個は不明確であるが、他の2個は横長にして並べている。このうち、中央部の基底石は横幅約0.5m、縦約0.35mとみられる。なお、奥壁寄りの基底石は不明である。基底石の上には、横長の板石を3段程度（基底石を含めると4段程度）、やや内傾気味に積み上げており、



第8図 第3号古墳石室実測図(1:40)

主に小口積とみられる。奥壁寄りで横幅約0.6m、縦約0.6m、奥行き約0.6mの比較的大きな石を使用し、そのほかは、横幅0.1～0.6m、縦0.1～0.4m、奥行き0.3～0.85mの板石を積み重ねている。

左袖 左側壁の東端に側壁と直交するように左袖とみられる板石を据えている。この板石は横幅25cm以上、縦45cm以上、奥行き約20cmであり、立石になる可能性がある。

#### (4) 出土遺物（第9・10図、図版37・38）

第3号古墳の埋葬施設や墳丘上から遺物は出土していない。墳丘外の東側斜面から須恵器の破片が多数まとめて出土したほか、土師器壺・弥生土器壺などの破片・耳環1点が出土した。なお、現代のガラス片などが混ざっており、かく乱されているようである。他に墳丘外の南西側斜面から土師器壺の破片が出土した。

##### ① 土器類（第9・10図1～17）

須恵器 1～16は須恵器で、いずれも墳丘外の東側斜面から出土した。

1～5は杯蓋である。法量は口径13.5～14cm、器高4.5cm前後である。1・2はやや平坦な天井部から緩やかに湾曲し、3～5も同様の形態と思われる。4・5の口縁部はほぼ直立し、その他はやや斜めで開き気味である。いずれも口縁端部は丸く収めている。

6～10は杯身である。法量は口径10.6～12.2cm、受部径11.6～14.8cm、器高4.1cm前後である。6～8はやや平坦な底部から緩やかに立ち上がり、9・10も同様の形態と思われる。いずれも受部の端部は丸く収めている。7・10の口縁部の立ち上がりは反り気味で、端部は尖り気味である。その他は直線的に内傾し、端部は丸く収めている。6は1cm程度立ち上がり、その他は数mm～5mm程度の立ち上がりである。なお、8の受部の端部に刻目を5mm前後の間隔で4か所施している。刻目は幅1～4mm、深さ1～4mmである。

11は台付椀である。底部は丸みを持ち、体部は大きく屈曲してほぼ直立し、口縁端部は尖り気味である。体部中央部に幅4mm前後の沈線を2条施している。底部に「ハ」の字状の低い脚部が付くようであり、この脚部に幅7mm程度の縦長の透かしを施しているとみられる。

12は壺の口縁部とみられる小片で、杯蓋の可能性もある。頸部がラッパ状に開いたあと、口縁部が内湾気味に斜めに立ち上がる形態と考えられる。その屈曲部分に明瞭な段があり、その上側に凹線がある。口縁端部は丸く収めている。

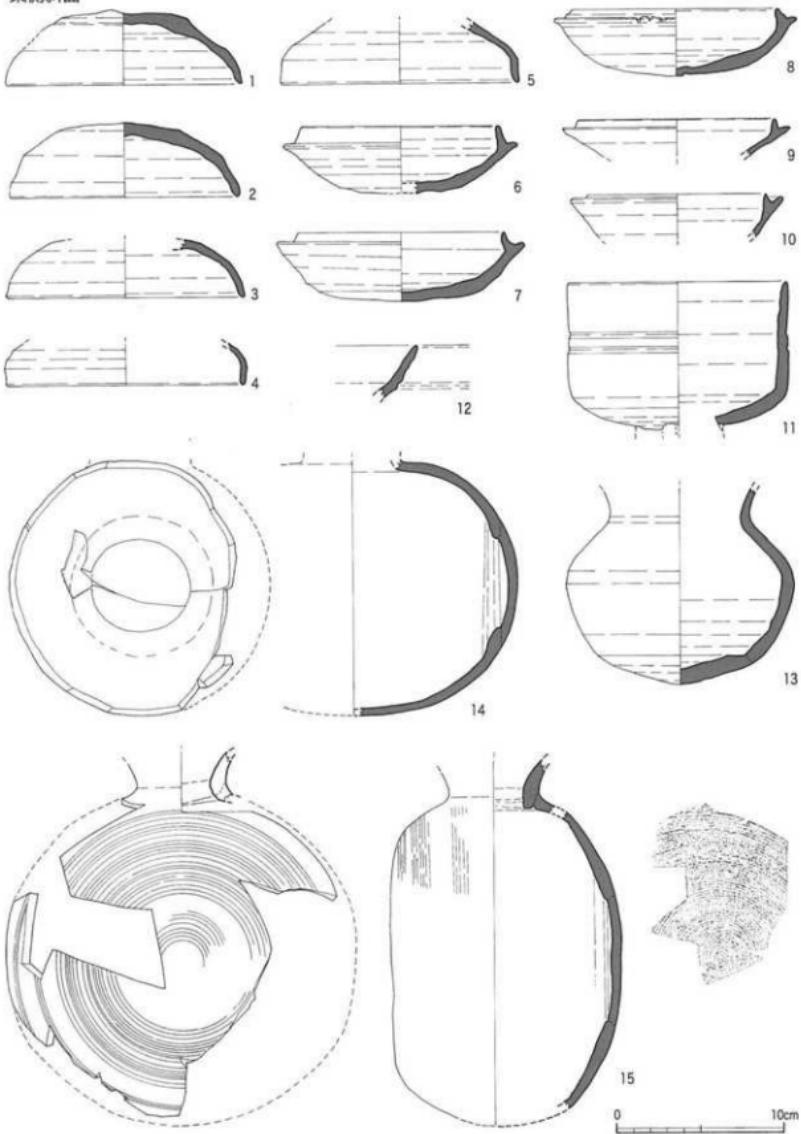
13は壺である。丸底で、体部はやや扁平な球形である。頸部は緩やかに湾曲している。口縁部は端部が欠損しているため不明確であるが、口頸部の状況から短頸壺とみられる。

14は横瓶の体部の破片で、口頸部は欠損している。体部の正面形は円形、側面形は橢円形になるとみられる。

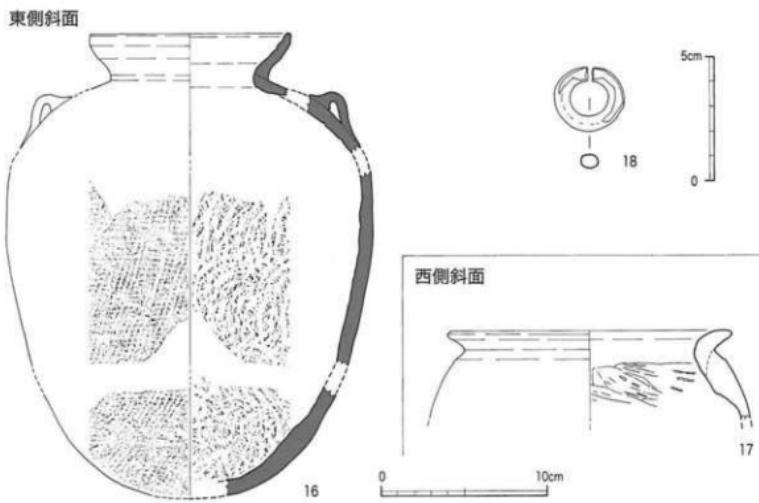
15は提瓶の体部の破片である。正面形は円形、側面形は橢円形で成型時の底部側が平坦である。なお、円盤充填側の外面に平行する2本のヘラによる刻線があり、ヘラ記号の可能性がある。

16は壺の破片で、図面上で復元した。底部は丸底気味で、体部は橢円形と推測される。体部上

東側斜面



第9図 第3号古墳周辺出土遺物実測図(1)(1:3)



第10図 第3号古墳周辺出土遺物実測図(2)(1:3, 1:2)

部には環状の耳が付いている。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は短く外反した後、上部は若干内湾し、端部は丸く收める。体部外面は縦方向の平行タタキ目上の横方向のカキ目調整を行い、内面は同心円のタタキ目が明瞭に残っている。

土師器 17は甕の口縁部～体部上部の破片である。頸部は「く」の字に強く屈曲し、口縁部は短く外反し、端部は丸く收める。頸部から体部上部にかけて内面は粗いヘラケズリであるが、その断面は分厚い。口頸部の形状や分厚い断面など全体的に特異な形態である。墳丘外の西側斜面から出土した。

## ② 金属製品 (第10図18)

耳環 18は耳環で、銅芯があり、銀を貼っているが、一部剥落している。断面は梢円形である。法量は外径2.55cm×2.73cm、厚さ0.58cm×0.72cm、重さ13.75gである。墳丘外の東側斜面から出土した。

## 2 箱山第4号古墳

### (1) 立地と調査前の状況 (第4・5図、図版1a～2c・7a)

調査区の北東寄りで、第3号古墳南西側の周溝から約1.5m、第5号古墳の北東側約10mに位置する。墳頂部の標高は211.25mで、調査区内では最高所である。墳頂部にかつて小規模な祠が所在しており、コンクリートの基礎が残存していた。このため、墳丘はある程度削平を受けてい

るようである。調査前の観察では墳頂部には石棺は露出していなかった。調査前の試掘の際に墳頂部の3か所で石棺の蓋石を確認していた。

### (2) 墳丘 (第11・12図、図版7 b～9 c)

墳形は円墳で、幅の狭い尾根上に立地しているため、地形に制約されて橢円形になっている。直径は北東-南西方向が約10m、北西-南東方向が約8.4mである。高さは北東側墳裾から約0.8m、南西側墳裾から約1.3m、南東側墳裾および北西墳裾から約1.7mであり、尾根上の墳裾からは低く、両側の斜面の墳裾からは高くなっている。墳丘には葺石や列石などの外表施設は検出されていない。また、墳丘の周りで周溝は検出されていない。なお、墳丘外の北西側斜面で、北東-南西方に直線状に延びる溝状の落ち込みを確認した。その規模は長さ約7m、幅約2m、深さ約0.6mである。埋土の中位から土師器鉢(24)が出土している。

墳丘の土層断面 南西-北東方向の土層断面をA-A'、南東-北西方向の土層断面をB-B'とする。

A-A'は尾根線に平行し、中心埋葬SK4-1の主軸にほぼ平行する方向である。土層断面を下方から順にみると次のとおりである。①地山の直上に14・15層(灰褐色系土)がある。14層は旧表土の可能性がある。②14・15層の上に6～13層(黄褐色系土)を積み重ねている。③6層の上に1層(表土)が薄く堆積している。部分的に祠のコンクリート基礎の掘り下げが6層まで到達し、また、真砂土やかく乱土が6層の上でみられる事から、祠の設置時や使用時に6層の上方が削平され、造成が行われたようである。このことから、かつては6層の上方に墳丘の盛土が存在したようであり、その後の自然的な流失や人為的な削平を受けたようである。

B-B'は尾根線に直交し、中心埋葬SK4-1を横断する方向である。A-A'の堆積状況と基本的に同様である。すなわち、①地山の直上に旧表土と思われる18層(灰褐色系土)がある。②18層の上に10～17層(黄褐色系土)を積み重ねている。③10層の上に1層(表土)が薄く堆積し、部分的に祠のコンクリート基礎の掘り下げが10層や石棺の蓋石まで到達し、また、かく乱土が10層の上でみられる。なお、北西側斜面の墳丘と溝状の落ち込みの間で倒木の影響により大きな空洞ができる、地山も含めて大きく抉れている。

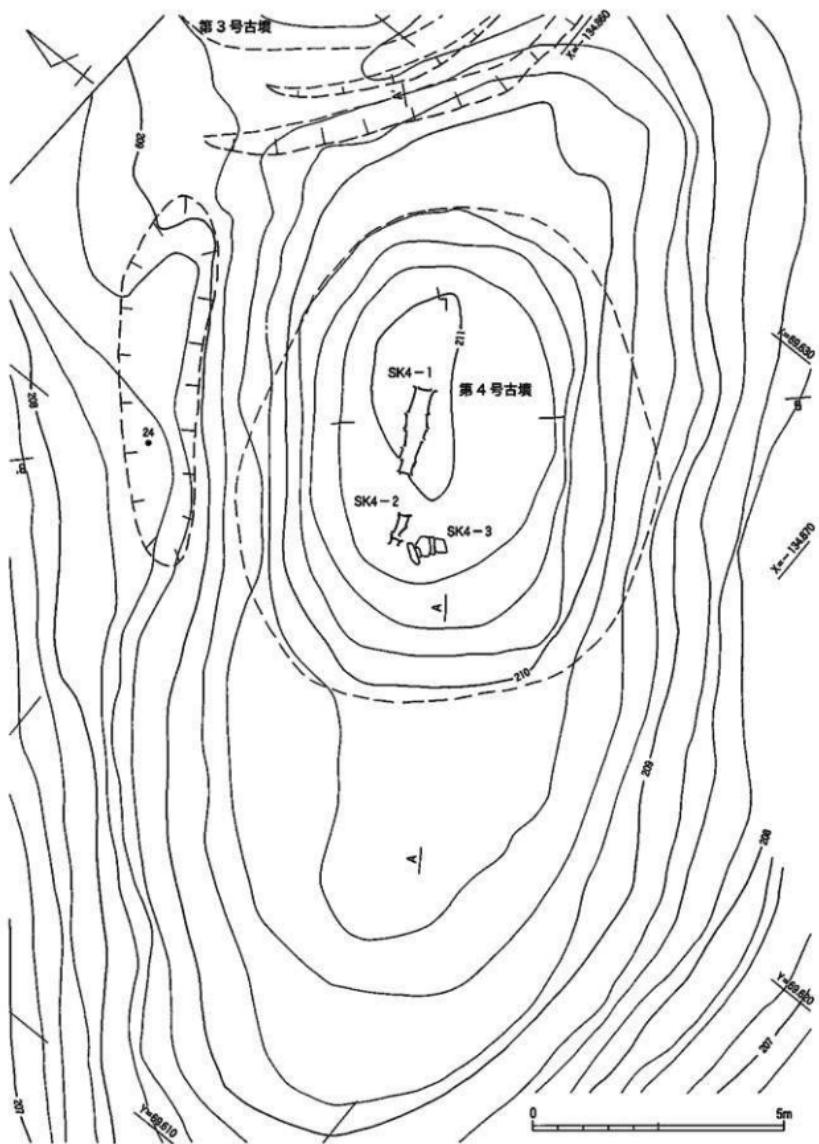
### (3) 埋葬施設

墳頂部で箱式石棺2基(SK4-1・SK4-2)と石蓋土坑1基(SK4-3)を検出した。

#### ① SK4-1(箱式石棺)(第13図、図版7 b・7 c・10 a～11 a)

墳頂部中央に位置する中心埋葬である。南西側でSK4-2の掘方とわずかに重複し、位置関係などから、SK4-1(古)→SK4-2(新)とみられる。主軸方向はN64°E(東北東-西南西方向)で、尾根線とほぼ平行する。頭位は北東小口側の幅が広いこと、北東小口側の蓋石・小口石・側石が大きいことなどから、北東側と考えられる。

掘方 掘方は上端と床面の間で傾斜が変わり、二段掘りの形状に近い。上端の形状は北東側が幅広で隅丸の長方形状である。上端の規模は長さ約2.9m、幅約1.6m、現状の深さ0.44～0.63mで



第11图 第4号古墓填丘测量图(1:100)

ある。中端の形状は上端と同様に北東側が幅広で隅丸の長方形状である。中端の規模は長さ約2.35m、幅約1.25m、深さ0.23～0.45mである。掘方のほぼ主軸線上で、やや北寄りに石棺を構築している。

**蓋石** 蓋石は7枚の板石で、蓋石の範囲は長さ約2.37m、幅約0.98mである。北東端に長さ98cm、幅55cm、厚さ33cmの大型の板石を1枚置き、その南西側に長さ58～71cm、幅24～38cm、厚さ12～30cmの板石を4枚置いて棺内を覆っている。さらに、その南西側の南西小口石の直上に長さ33cm、幅23cm、厚さ8cmの小型の板石を置き、南西端に長さ49cm、幅29cm、厚さ29cmの分厚い板石を置いている。南西端の板石は小口石や側石の外側で、掘方の地山に直に置いている。蓋石の隙間はいずれも数cm程度である。蓋石の設置順は蓋石の置き方などから、南西側から北東側に向けて順に置いたと思われる。なお、北東端から4・5枚目の蓋石の南辺で目張りのような灰色系粘土が確認され、全体の蓋石の隙間を粘土で詰めていた可能性がある。

**小口石・側石** 平面形は両側石の北東端から2枚目付近がやや膨らみ、南西端に向けて狭くなる。内法は長さ約1.7m、北東小口の幅約0.34m、最大幅約0.43m、南西小口の幅約0.25m、深さ0.24～0.39mである。小口石と側石の組み方は両側の小口とも側石が小口石を挟む形態である(a類)<sup>(1)</sup>。小口石・側石の上面は直線状で、北東小口石と南西小口石の上面のレベル差が15cm程度あり、北東から南西に向けて傾斜している。

北東小口石は横40cm、縦45cm、厚さ32cmの長方形状の板石で、南西小口石は横28cm、縦30cm、厚さ23cmの長方形状の板石であり、いずれも縦長に置いている。

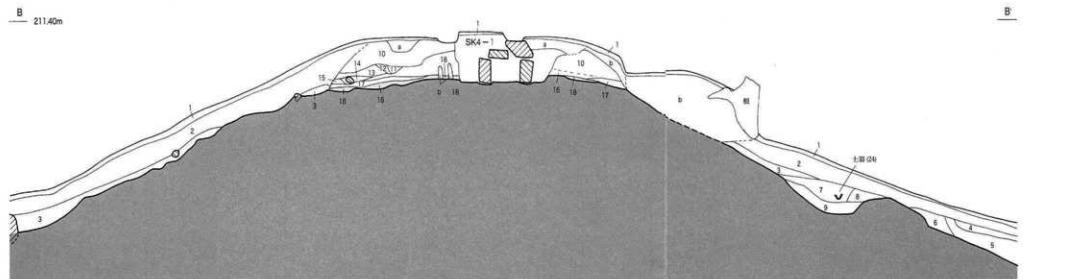
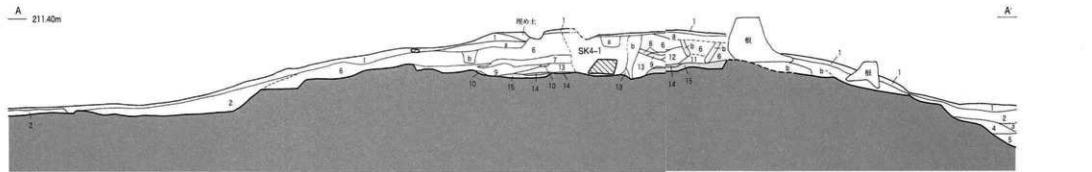
側石は両側とも板石を5枚ずつで、いずれも長方形状の板石である。側石の隙間は狭いが、その隙間に細長い板石を詰める箇所がある。北西側石は北東端から1枚目は横59cm、縦45cmの大型の板石で横長に置き、その他は横24～38cm、縦33～42cmのやや小型の板石で縦長に置いている。南東側石は北東端から1枚目と4枚目は横48～57cm、縦35～43cmの大型の板石で横長に置き、その他は横19～31cm、縦28～40cmのやや小型の板石で縦長に置いている。小口石・側石の設置順は北東小口とその両側石が大きいことから、北東側から南西側にかけて順に設置し、最後に南西小口石周辺を置いたとみられる。小口石・側石を設置するため、掘方の底面のそれぞれの箇所を数cm程度掘り込んでいる。

なお、北西側石の北東端から3枚目の側石の北西側の掘方内に、長さ約30cm、幅約15cm、厚さ約5cmの板石が水平に入り込んでいる。これは周辺の角礫と同様に側石を据える際の裏込と考えられる。

**床面** 床面はほぼ水平であるが、中央部分が若干凹んでいる。また、床面に暗黄褐色土を数cm程度敷いて棺床土としている。

**遺物** ガラス製小玉4点(19～22)が床面で出土した。北東小口から約0.8m・南西小口から約0.65mの石棺中央部の南東側石の近くに位置し、東西約25cm、南北約15cmの範囲に分布する。20～22は床面から数cm浮いた位置で、19は床面から7cm程浮いた位置で出土した。

**その他** 赤色顔料が石棺内側全面に塗布されている。



A - A'

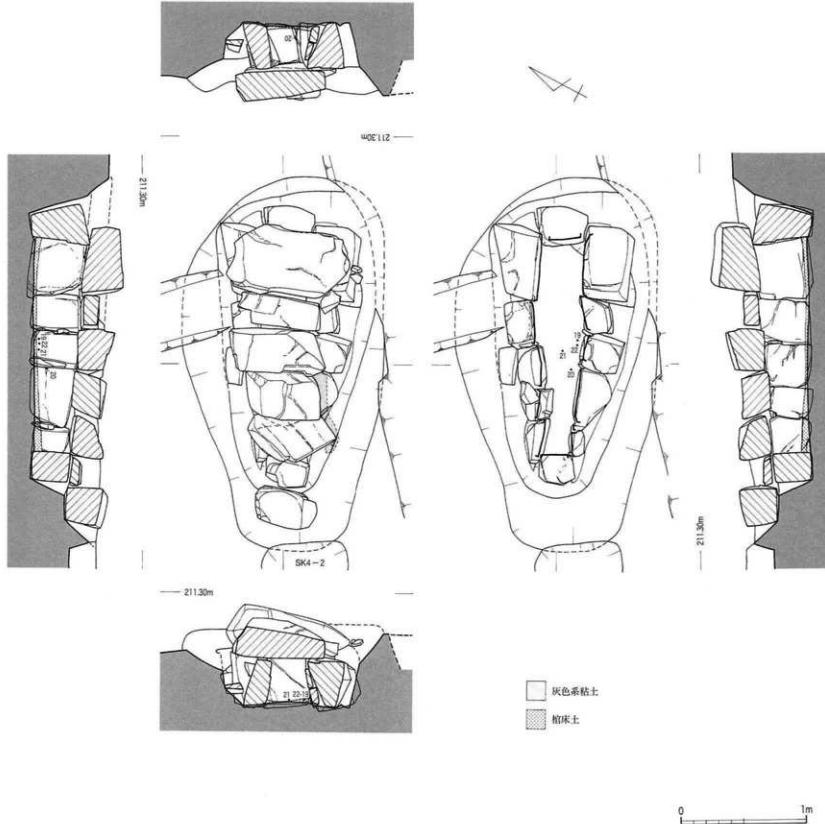
- 1 表土
- 2 暗黄褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 暗黄褐色土
- 5 暗黄褐色土 (4より暗い)
- 6 塔丘盛土
- 7 明黄褐色土 (暗多く含む、地山上に近い)
- 8 明黄褐色土 (7よりやや白っぽい)
- 9 暗黄褐色土 (6より暗い)
- 10 灰褐色土。
- 11 黄褐色土 (暗多く含む)
- 12 暗黄褐色土 (6より暗い、暗多く含む)
- 13 明黄褐色土 (暗多く含む、地山上に近い)
- 14 暗灰褐色土 (旧表土か)
- 15 灰褐色土
- 16 黄褐色土 (3よりやや暗い)
- 17 黄褐色土 (3よりやや暗い)
- 18 暗灰褐色土 (旧表土か)
- 19 かく乱土
- 20 木の根によるかく乱土

B - B'

- 1 表土
- 2 暗黄褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 灰褐色土
- 6 暗灰褐色土
- 7 黄褐色土 (3より暗い)
- 8 暗褐色土 (3に近い)
- 9 暗黄褐色土
- 10 黄褐色土
- 11 黄褐色土 (10よりやや暗い)
- 12 明黄褐色土 (暗多く含む、地山上に近い)
- 13 黄褐色土
- 14 明黄褐色土 (12より明るい)
- 15 黄褐色土
- 16 明黄褐色土 (暗多く含む、地山上に近い)
- 17 灰褐色土
- 18 暗灰褐色土 (旧表土か)
- 19 かく乱土
- 20 かく乱土 (黒斑混じる黄褐色土)
- 21 木の根によるかく乱土



第12図 第4号古墳土層断面実測図 (1 : 60)



第13図 第4号古墳SK4-1実測図(1:30)

## ② SK 4-2 (箱式石棺) (第14図、図版7 b・7 c・11 b～12 a)

墳頂部西寄りで、SK 4-1の南西側に位置する從属葬である。北東側でSK 4-1の掘方とわずかに重複し、SK 4-1(古)→SK 4-2(新)とみられる。また、南西側でSK 4-3と重複し、SK 4-3の蓋石がSK 4-2の掘方の上端にかかることから、SK 4-2(古)→SK 4-3(新)とみられる。主軸方向はN72°E(東北東-西南西方向)で、尾根線とほぼ平行する。頭位は北東小口側の蓋石や側石が大きいことなどから、北東側と考えられる。

**掘方** 掘方は中央が膨らむ変形の長方形で、長さ約0.95m、幅約0.68m、現状の深さ9～25cmである。石棺は掘方のほぼ主軸線上だが、掘方の北西側辺の方に若干寄っている。

**蓋石** 蓋石は2枚の板石で、蓋石の範囲は長さ約0.67m、幅約0.4mである。北東小口側に長さ43cm、幅39cm、厚さ7cmのやや大型の板石を1枚置き、その南西側に長さ32cm、幅18cm、厚さ5cmの小型の板石を1枚置いて棺内を覆っている。蓋石の隙間は6～9cmの隙間がある。掘方の南西辺が木根によるかく乱を受けしており、その影響で南西側の小型の蓋石が移動し、隙間が開いたと思われる。蓋石の設置順は不明である。

**小口石・側石** 平面形は南東側石の北東端から2枚目が斜めに内側に入り込んだ変形の長方形である。これは、木根によるかく乱の影響と思われ、南東側石の南西端と南西小口石も西方向にずれているよう見える。内法は長さ約0.5m、東小口の幅0.16m、最大幅(西小口付近)約0.19m、深さ8～18cmである。小口石と側石の組み方は、北東小口側は北西側石の側面を北東小口石に当て、北東小口石の側面を南東側石に当てている(b類)。一方、南西小口側は側石が小口石を挟む形態である(a類)。小口石・側石の上面は直線状で、北東小口石と南西小口石の上面のレベル差が5cm程度あり、北東から南西に向けて傾斜している。

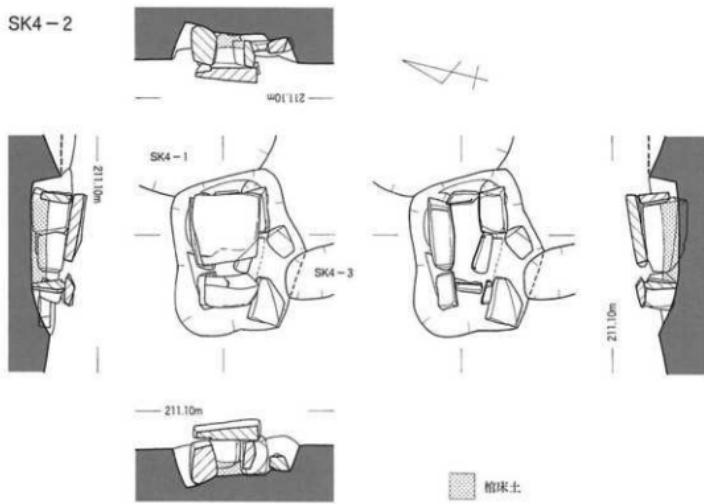
北東小口石は横20cm、縦19cm、厚さ7cmの長方形形状の板石で、横長に置いている。一方、南西小口石は横18cm、縦20cm、厚さ7cmの長方形形状の板石で、縦長に置いている。

側石は北西側2枚、南東側3枚で、いずれも長方形形状の板石である。側石の隙間は概ね狭い。ただ、南東側石の西端と中央部の石の間が5cm程度開いており、その隙間には板石を詰めておらず、木根によるかく乱の影響と思われる。北西側石は北東端から1枚目は横43cm、縦27cmの大型の板石で横長に置き、その他は横20cm、縦18cmの小型の板石で縦長に置いている。南東側石は北東端から1枚目は横28cm、縦23cmのやや大型の板石で横長に置いている。他の側石は横14～24cm・縦13～18cmの小型の板石で、2枚目は横長に、3枚目は縦長に置いている。小口石・側石の設置順は北西側石・北東小口石→南西小口石・南東側石の順に設置したとみられる。北東小口部分の両側石を設置するために、掘方の底面を2～7cm掘り込んでいる。その他の側石や小口石は掘方の底面を掘り込まずにそのまま据えている。

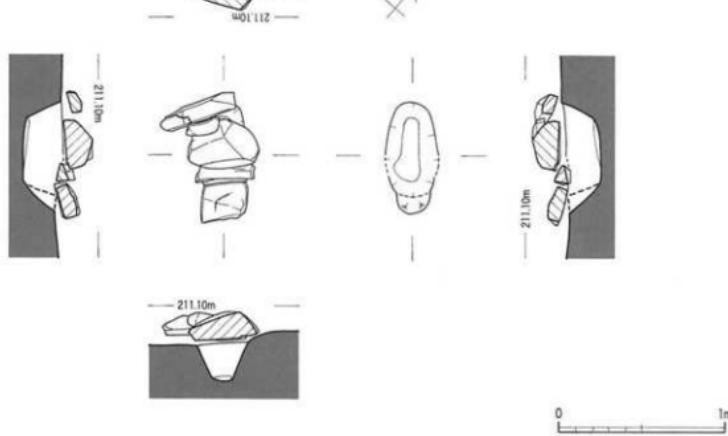
なお、南東側石の北東端の側石の南側の掘方内に長さ約18cm、幅約14cm、厚さ約9cmの板石が、南東側石の南西端の側石の南側の掘方内に長さ約27cm、幅約20cm、厚さ約7cmの板石がそれぞれ水平に入り込んでおり、いずれも側石を据える際の裏込と考えられる。

**床面** 床面はほぼ水平であるが、中央部分が若干凹んでいる。また、床面に暗黄褐色土を厚さ9

SK4-2



SK4-3



第14図 第4号古墳 SK4-2・SK4-3実測図(1:30)

cm程度敷いて棺床土としている。

遺物 遺物は出土していない。

### ③ SK 4-3 (石蓋土坑) (第14図、図版7b・7c・12b・12c)

墳頂部西寄りで、SK 4-2の南側に位置する從属葬である。北西側でSK 4-2と切り合い、SK 4-2(古)→SK 4-3(新)とみられる。主軸方向はN40°W(北西-南東方向)で、尾根線とほぼ直交する。頭位は北西寄りの蓋石が大きいことなどから、北西側と考えられる。

蓋石 蓋石は5枚の板石で、主要な部分は中央部から南東側にかけての3枚の板石である。蓋石の範囲は長さ約0.76m、幅約0.43mである。中央部に長さ42cm、幅29cm、厚さ16cmのやや大型の板石を1枚置き、その南東側に長さ27~35cm、幅11~23cm、厚さ8~10cmの小型の板石を2枚置いて墓坑の中央部から南側を覆っている。北西端には長さ48cm、幅11cm、厚さ11cmの棒状の板石を1枚置き、中央部のやや大型の板石との隙間に長さ21cm、幅8cm、厚さ7cmの棒状の板石を1枚詰めて墓坑の北西側を覆っている。南東寄りの蓋石の隙間はいずれも数cm程度である。南東寄りの蓋石の設置順は蓋石の重なり状況などから、南東側から北西側に向けて順に置いたと思われる。

墓坑 墓坑は長円形で、上端は長さ約0.56m、幅約0.32m、下端は長さ約0.38m、幅約0.16m、深さ0.21~0.25mである。墓坑の南東側が木根によるかく乱を受けている。埋土は暗黄橙褐色土である。

床面 床面はほぼ平坦で、北西側に比べて南東側がやや深くなっている。

遺物 遺物は出土していない。

### (4) 出土遺物 (第15・16図、図版11a・38)

SK 4-1からガラス製小玉4点(19~22)が、SK 4-2付近の表土で土師器の小片が出土した。墳丘外では南西側尾根上の表土で土師器の小片(23)などが、北西側斜面で土師器鉢(24)などが出土した。なお、墳丘外の北西側斜面から古代の須恵器の杯身が、墳頂部の祠跡前の表土から近世以降と思われるミニチュアの陶器が、南西側尾根の南側斜面から寛永通寶が出土した。

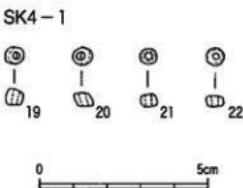
#### ① SK 4-1 出土遺物 (第15図19~22)

玉類 19~22はガラス製小玉である。大きさは最大径0.46~0.56cm、最大長0.3~0.51cm、孔径1.8mm前後、重量0.1~0.16gである。色調は21が濃紺色、その他が青緑色系である。

#### ② 周辺出土遺物 (第16図23・24)

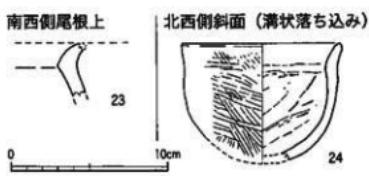
土師器 23は甕と思われる口縁部・体部の破片である。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は短く外反している。墳丘外の南西側尾根上の表土から出土した。

24は鉢で、底部を欠損するが、ほぼ完形である。体



第15図 第4号古墳出土遺物実測図  
(2:3)

部は緩やかに立ち上がり、頸部はわずかに屈曲する。口縁部は短く外傾し、端部は丸く収める。墳丘外の北西側斜面にある南北方向に延びる溝状の落ち込みの底面から約20cm浮いた状態で出土した。



第16図 第4号古墳周辺出土遺物実測図(1:3)

### 3 箱山第5号古墳

#### (1) 立地と調査前の状況 (第4・5図、図版1a～2c・13a・13b)

調査区の南西寄りで、第4号古墳の南西側約10mに位置する。また、第5号古墳南西側の溝が第6号古墳の北東側の周溝と切り合っている。墳頂部の標高は208.67mである。調査前の観察では石棺は露出していなかった。調査前の試掘の際に墳頂部で石棺の蓋石を確認していた。

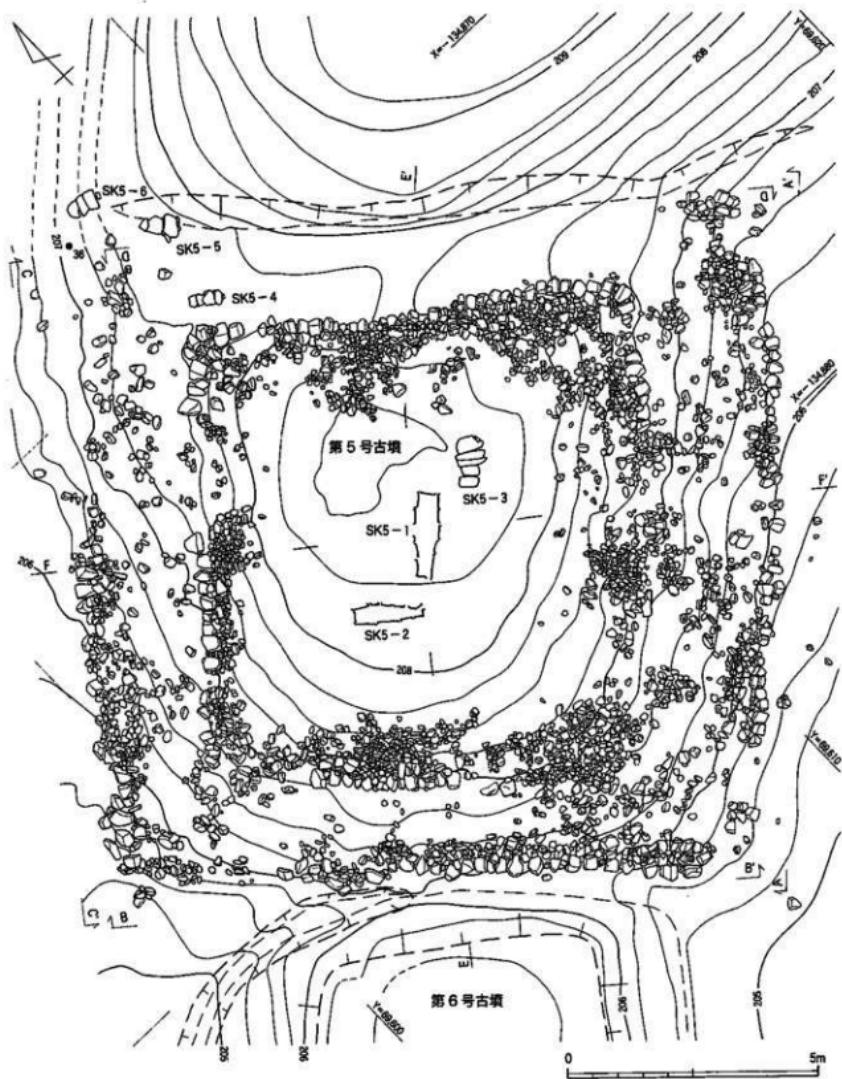
#### (2) 墳丘、溝 (第17～19図、図版13c～19b)

墳形は方墳で、二段築成である（以下、墳丘の南東側の面を「A面」、南西側の面を「B面」、北西側の面を「C面」、北東側の面を「D面」という）。墳丘の外表施設は葺石が墳頂部を除いて上下2段に存在する。ただし、D面の葺石は下段ではなく、上段だけである。

**墳丘の規模** 下段について、北西～南東方向（尾根線に直交する方向）の幅は北東側約13.3m、中央部約14.2m、南西側約13.2mで、A面・C面の中央部がやや膨らんでいる。北東～南西方向（尾根線に平行する方向）の幅は北西側約12.7m、南東側約13.7mで、南東側が幅広くなっている。下段の裾部からの墳頂部までの高さはA面で2.1～3.1m、B面で2.6～3.2m、C面で1.4～3.2mである。

上段について、北西～南東方向（尾根線に直交する方向）の幅は北東側約9m、中央部約9.4m、南西側約9.2mで、C面は直線的であるが、A面の中央部が下段と同様にやや膨らんでいる。北東～南西方向（尾根線に平行する方向）の幅は北西側約9.3m、南東側10.3mで、下段と同様に南東側が幅広くなっている。上段の裾部から墳頂部までの高さはA面で1.3～2.3m、B面で1.7～2.3m、C面で1.1～2.1m、D面で0.9～1.3mである。

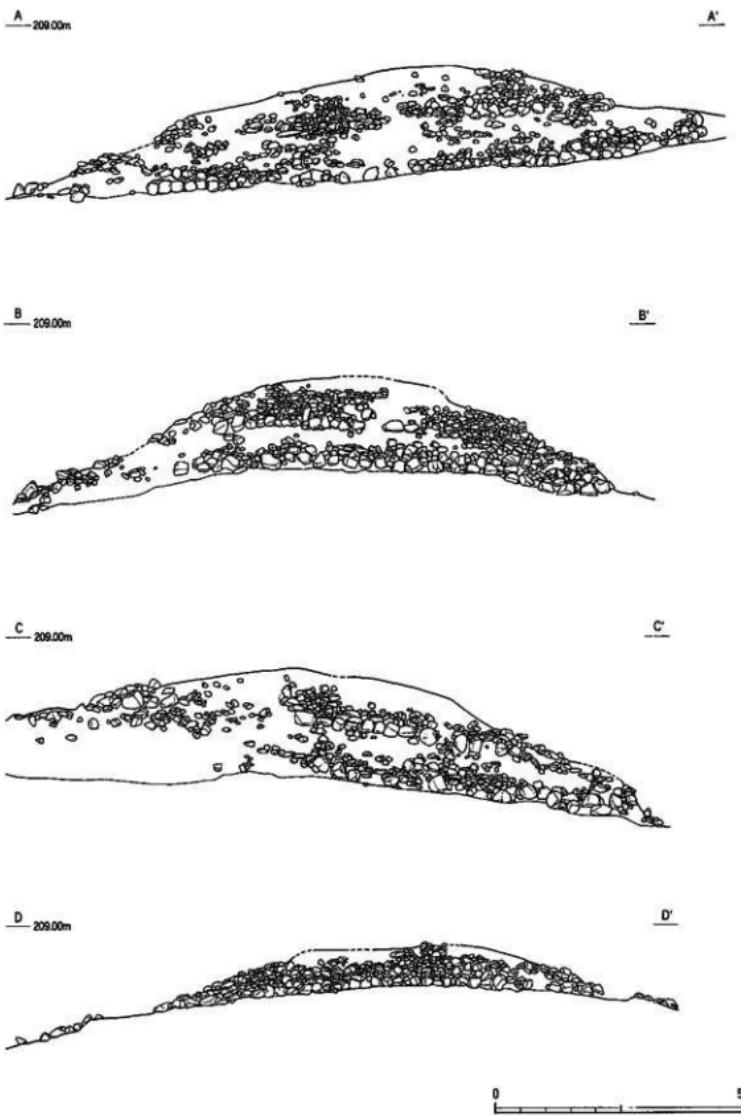
**葺石の状況** 下段の葺石の状況は次のとおりである。A面は断続的に残存し、南西端及び中央部は残存状況がよくない。最大で幅1.7m程度残っている。なお、A面北東端が内側に抉れているようにみえるが、旧状を留めている可能性がある。B面は南東部から中央部にかけてよく残っているが、北西寄りが不明確になっている。最大で幅1.1m程度残存している。C面は南西側半分が比較的よく残っているが、北東側半分の残存状況がよくない。最大で幅1.6m程度残存している。下段の平面形はB面の裾部はほぼ直線状に並び、A面・C面の裾部は中央部がやや膨らんで緩やかなカーブになっている。コーナー部分はいずれも不明瞭であるが、B面とC面のコーナーは明瞭な直角ではなく、丸みを持つように見える。他の部分も同様に丸みを持つと思われる。各面の葺石の構造は基本的に次のとおりである。裾部に据える基底石は大きめの角砾を縦長にして



第17圖 第5号古墳墳丘測量圖(1:100)

墳丘に斜めに貼り付け、基底石の上に小さめの角礫を主に横方向にして積み上げている。A面の基底石は15～30cm×15～35cmの大きめの角礫を縦長にして並べている。B面・C面の基底石よりやや小さい。基底石の間に若干隙間があるが、B面・C面より隙間は小さい。A面両端の基底石下面の高低差は約1mで、南西端が低い。基底石の上部に10～20cm×15～30cmの小さめの角礫を積み上げている。その多くは横方向に積み、部分的に棒状の礫を縦方向に積んでいる。この状況はB面・C面でも同様であり、各面とも縦方向の礫の間隔は1～1.5mである。B面の基底石は15～35cm×25～45cmの大きめの角礫を縦長に並べている。基底石の間の数cm～10数cmの隙間に小礫を詰めている箇所が多くある。B面両端の基底石下面の高低差は約0.1mで、南東端が若干低い。また、南東端と中央部の高低差は約0.5mで、中央部が高くなっている。基底石の上部に10～35cm大の小さめの角礫を積み上げている。C面の基底石は15～35cm×20～50cmの大きめの角礫を縦長に並べている。基底石の間の隙間はA・B面に比べて大きく、基底石の並びがやや乱雑に見える。C面両端の基底石下面の高低差はC面北東端が不明確であるが、1.8m程南西端が低いと推定される。基底石の上部に10～20cm×10～30cmの小さめの角礫を積み上げている。各面下段の葺石面の傾斜角度は概ね約22～26°で、緩やかな傾斜である。

上段の葺石の状況は次のとおりである。A面は断続的に残存し、全体的に残存状況はよくない。最大で幅2.1m程残存している。B面は中央部で残りはよいが、両端は不明確である。最大で幅1.6m程残存している。C面は南西側半分が比較的よく残っているが、北東側半分の残存状況はよくない。最大で幅1.7m程残存している。D面は全体的に残りがよい。なお、中央部及び北西部で部分的に基底石が抜けており、当初から基底石が抜けていた可能性がある。最大で幅2.1m程残存している。上段の平面形はB面・C面の裾部はほぼ直線状に並び、A面の裾部は中央部がやや膨らみ緩やかなカーブになっている。D面は直線状だが、やや凹んでいる。なお、D面中央部の南東寄りで基底石の並びが0.3mほど内側にずれており、このずれは基底石の設置作業の際にできたものと思われる。コーナー部分はD面の両端がよく残っており、下段と同様に明瞭な直角ではなく、丸みを持っている。他のコーナー部分は不明確だが、D面の両端と同様に丸みを持つ可能性がある。A面の基底石は20～30cm×20～55cmの角礫を縦長に並べている。基底石の隙間は下段より狭く、比較的密であり、B～D面とも同様な状況である。A面両端の基底石下面の高低差は約1mで、南東端が低い。基底石の上部に10～20cm×15～30cmの小さめの角礫を積み上げている。その多くは横方向に積み、部分的に棒状の礫を縦方向に積んでいる。この状況はB～D面でも同様であり、縦方向の礫の間隔はB・D面で0.7～1.2m、A・C面で1m程度とみられ、下段での間隔よりやや狭いようである。B面の基底石は15～30cm×20～40cmの角礫を縦長に並べており、基底石の間隔は比較的密である。B面両端の基底石下面の高低差は約0.2mで、北西端が若干低い。北西端と中央部の高低差は約0.4mで、中央部が高い。基底石の上部に10～20cm×10～35cmの小さめの角礫を積み上げている。C面の基底石は20～45cm×30～50cmの角礫を縦長に並べておらず、基底石の隙間は比較的密である。C面両端の基底石下面の高低差は約1mで、南西端が低い。基底石の上部に10～25cm×10～35cmの小さめの角礫を積み上げている。D面の



第18图 第5号古墳斜石立面測量図(1:100)

基底石は15～25cm×20～40cmの角礫を縦長に並べており、基底石の隙間は比較的密である。D面両端の基底石下面の高低差は約0.2mで、南東端が若干低い。南東端と中央部の高低差は約0.4mで、中央部が高い。基底石の上部に10～25cm×10～45cmの小さめの角礫を積み上げている。各面上段の葺石面の傾斜角度は概ね24～36°で、下段よりやや急な傾斜である。なお、上段の葺石の範囲などから、葺石の無い墳頂部の範囲は5m四方程度と推定される。

テラス面 A面～C面では下段上部と上段裾部との間に帯状にめぐる幅0.5～1mのテラス面がある。D面では尾根をカットした溝の底面を平坦にしており、A面～C面のテラス面とつながっている。このテラス面および墳頂部では埴輪等は出土しなかった。

墳丘の土層断面 南西～北東方向の土層断面をE-E'、北西～南東方向の土層断面をF-F'とする。

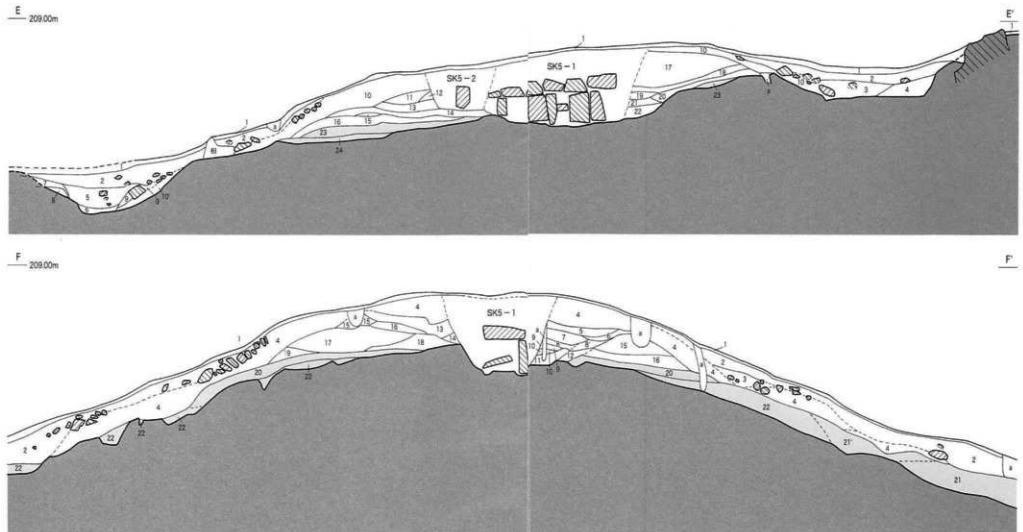
E-E'は尾根線に平行し、中心埋葬SK5-1の主軸にほぼ平行する方向である。土層断面を下方から順にみると次のとおりである。①地山の直上に23・24層があり、23層は旧表土の可能性がある。②南西側では23・24層の上に11～16層を積み重ね、北東側では23層および地山の上に17～22層を積み重ねて、第1段階の低い墳丘ができる。③さらに全体的に10・10'層を積み、墳丘の斜面に葺石を施して墳丘が完成する。④墳頂部では1層（表土）が薄く堆積し、墳丘斜面や裾部では1～9層が堆積している。墳頂部の表土が薄いこと、墳頂部が平坦でないことから、本来は上位に墳丘盛土がさらに存在していたと思われる。なお、5・6層は第6号古墳の周溝の埋土、8・9層は第5号古墳の南西側の溝の埋土と考えられ、第6号古墳の周溝が第5号古墳の南西側の溝を切っている様子がみられる。

F-F'は尾根線に直交し、中心埋葬SK5-1を横断する方向である。E-E'の堆積状況と基本的に同様である。すなわち、①地山の直上に20～22層があり、20層は旧表土の可能性がある。②北西側では20層の上に15～19層を、南東側では20層の上に15・16層を積み重ねており、両側に高さ50cm程度の低い山ができる、中央部に凹みができている。なお、E-E'南西側の12～16層も同様の低い山の可能性があり、E-E'北東側は地山を削り出して低い山にしている。これらのことから、平面的にみると「ドーナツ状の盛土」<sup>(2)</sup>ができているとみられる。③中央部の凹みに5～14層を積み重ねて凹みを埋め、第1段階の低い墳丘ができる。④全体的に4層を積み、墳丘の斜面に葺石を施して墳丘が完成する。⑤墳頂部では1層（表土）が薄く堆積し、墳丘斜面や裾部には1～3層が堆積している。

溝の状況 墳丘の北東側と南西側で尾根線と直交する直線状の溝を掘り、尾根を切断する形で墳丘を形成している。北東側の溝は上端の幅約3.1m、下端の幅約1.6mで、深さは最大約0.9mである。溝の底面は平坦で、下段上面のテラス面とつながっている。また、D面上段の葺石の基底石を溝の底面に据えている。

南西側の溝は上端の幅約2.6m、下端の幅約0.7mで、深さは最大約0.8mである。溝の底面は緩いU字形であり、B面下段の葺石の基底石を溝の底面に据えている。

### （3）埋葬施設



$$E = E^*$$

#### 君士・開港など

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1 表土             | 16 暗茶褐色土          |
| 2 黄褐色土           | 17 棕褐色土（砂礫多い）     |
| 3 剥離褐色土          | 18 剥離褐色土          |
| 4 褐色土            | 19 棕褐色土（黃褐色点多い）   |
| 5 細粒褐色土          | 20 黄褐色土           |
| 6 粗粒褐色土（地山土含む）   | 21 明茶褐色土          |
| 7 黄褐色土（やや粘りか）    | 22 棕褐色土（19よりやや暗い） |
| 8 精褐色土           | II表土以下            |
| 9 黑褐色土           | 23 黑褐色土（旧表土か）     |
| 堆积土上             | 24 剥離褐色土          |
| 10 暗褐色土          | かく土上              |
| 10' 暗褐褐色土（地山土含む） | a 木の根によるかく乱土      |
| 11 棕褐色土（砂礫多い）    |                   |
| 12 粘粒褐色土         |                   |
| 13 黄褐色土          |                   |
| 14 剥離褐色土（砂含む）    |                   |

1

1 表土

## 2 黄褐色土(砾含石)

3

- |                       |                     |
|-----------------------|---------------------|
| 暗褐色土                  | 暗褐色土                |
| 4 暗褐色土 (黄色斑点若干有り)     | 19 明黄色土 (砂礫多い)      |
| 5 暗褐色土 (黄色斑点若干有り)     | 田表土以下               |
| 6 前褐色土 (黄色斑点若干有り)     | 20 黒褐色土 (田表土とか)     |
| 7 榆褐色土 (黄色斑点多い)       | 21 黒褐色土 (フロク)       |
| 8 明黄色土                | 22 明黄色土 (クロフク、やや薄い) |
| 8' 明黄色土 (暗褐色土) (砂礫多い) | かく乱土                |
| 9 暗茶褐色土 (黄色斑点若干有り)    | かく乱土                |
| 10 明黄色土               | a 木の根によるかく乱土        |
| 11 前茶褐色土 (黄色斑点若干有り)   |                     |
| 12 明黄色土 (砂礫多い)        |                     |
| 13 榆褐色土 (砂礫多く)        |                     |
| 14 前茶褐色土 (黄色斑点若干有り)   |                     |
| 15 前褐色土 (黄色斑点若干有り)    |                     |



第19図 第5号古墳土層断面実測図 (1:60)

墳頂部で箱式石棺2基（SK5-1・SK5-2）と石蓋土坑1基（SK5-3）を検出し、墳丘北東側溝の北西端の底面で石蓋土坑3基（SK5-4～SK5-6）を検出した。

① SK5-1（箱式石棺）（第20図、図版19c～23a）

墳頂部中央に位置する中心埋葬である。南西側でSK5-2の掘方と重複し、SK5-1（古）→SK5-2（新）とみられる。また、数cm東側にSK5-3がある。主軸方向はN48°E（北東-南西方向）で、尾根線とほぼ平行する。頭位は北東小口側の幅が広いこと、北東小口側の蓋石や小口石が大きいことなどから、北東側と考えられる。

掘方　掘方は北東側がやや幅広の長円形で、長さ約2.68m、幅約1.82m、現状の深さ0.88～1.16mである。掘方のほぼ主軸線上に石棺を構築している。

蓋石　蓋石は6枚の板石で、蓋石の範囲は長さ約2.1m、幅約0.9mである。北東端に長さ90cm、幅55cm、厚さ27cmの大型の板石を1枚置き、その南西側に長さ53～90cm、幅25～42cm、厚さ10～25cmの板石を5枚置いて、棺内を覆っている。蓋石の隙間はいずれも数cm程度である。蓋石の設置順は蓋石の置き方などから、南西側から北東側に向けて順に置いたとみられる。なお、北東端から2～5枚目の蓋石の隙間に目張りのような灰色系粘土を詰めている。また、北東端から2・3枚目の蓋石の隙間に棒状の小石を詰めている。

小口石・側石　平面形は北東端から2枚目の両側石がやや膨らみ、南西端に向けて狭くなる。内法は長さ約1.67m、北東小口の幅0.36m、最大幅約0.45m、南西小口の幅0.28m、深さ0.31～0.45mである。小口石と側石の組み方は、北東小口側は北西側石の側面を北東小口石に当て、北東小口石の角と南東側石の角を当てている（f類）。一方、南西小口側は北西側石の側面を南西小口石に当て、南西小口石の側面を南東側石に当てている（b類）。小口石・側石の上面は直線状であるが、北東小口石と南西小口石の上面のレベル差が10cm程度で、北東から南西に向けて傾斜している。

北東小口石は横42cm、縦53cm、厚さ20cmの長方形形状の板石で、南西小口石は横24cm、縦36cm、厚さ16cmの長方形形状の板石であり、いずれも縦長に置いている。

側石は北西側6枚、南東側5枚で、いずれも長方形形状の板石である。側石の隙間は狭い。北西側石は北東端から1・2枚目と5・6枚目は横30～36cm、縦36～52cmのやや小型の板石、中央の3・4枚目は横18～21cm、縦54～56cmの細長い板石で、いずれも縦長に置いている。なお、中央の3枚目は床面にほぼ水平に倒れ、2・4・5枚目も内側に大きく傾いている。南東側石は南西端から1枚目は横66cm、縦40cmの大型の板石で横長に置き、他の4枚は横30～34cm、縦45～58cmのやや小型の板石で縦長に置いている。小口石・側石の設置順は北東小口石がやや大きいこと、南東側石が北西側石より大きめであることから、北東小口石→南東側石→北西側石→南西小口石の順に設置したとみられる。小口石・側石を設置するため、掘方の底面のそれぞれの箇所を数cm程度掘り込んでおり、両側石中央部で10cm近く掘り込んでいる部分がある。

床面　床面はほぼ水平であるが、中央部分が若干凹んでいる。なお、小円礫を全面に敷き詰めて礫床とし、その下位に小礫を含む暗黄褐色土を厚さ数cm敷いて棺床土としている。また、北東端

に暗灰色粘土を厚さ3cm程度敷いて枕としている。

遺物 鉢1点(25)・鉄鎌1点(26)・豎櫛1点(27)及び土師器の小片が床面で出土した。このうち、鉢・鉄鎌は南西小口近くの北西側石寄りとともに側石に平行し、いずれも先端部分を南西小口側に向けていた。その先端部分で鉢が床面に接し、鉢の上に鉄鎌が重なっていた。豎櫛は鉢の先端部分から1~2cm離れた石棺内側で出土した。

その他 赤色顔料が石棺内側全面に塗布されている。

## ② SK 5-2 (箱式石棺) (第21図、図版19c・20a・23b~24c)

墳頂部西寄りで、SK 5-1の西側に位置する從属葬である。南東側でSK 5-1の掘方と重複し、SK 5-1(古)→SK 5-2(新)とみられる。主軸方向はN50°W(北西-南東方向)で、尾根及びSK 5-1の主軸方向とほぼ直交する。頭位は北西小口側の幅が広いこと、北西小口側の側石が大きいことなどから、北西側と考えられる。

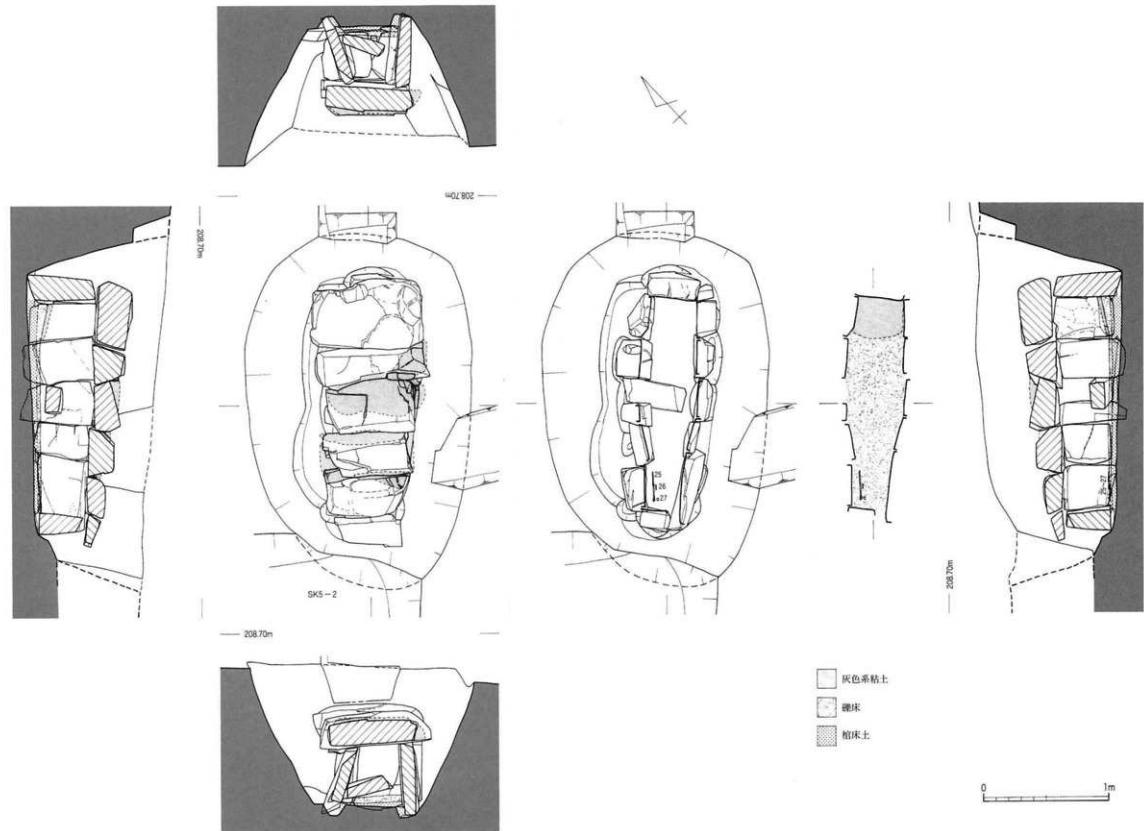
掘方 掘方は中央部がやや幅広の隅丸の長方形で、長さ約2.25m、幅約1.16m、現状の深さ約0.46~0.7mである。掘方のほぼ主軸線上に石棺を構築している。

蓋石 蓋石は5枚の板石で、蓋石の範囲は長さ約1.47m、幅約0.75mである。南東端に長さ約37cm、幅約24cm、厚さ約12cmの小型の板石を置き、その北西側に長さ56~75cm、幅29~33cm、厚さ24cm程度の同規模の板石を4枚置いて棺内を覆っている。蓋石の隙間はいずれも数cm程度である。蓋石の設置順は蓋石の置き方などから、南東側から北西側に向けて順に置いたと思われる。

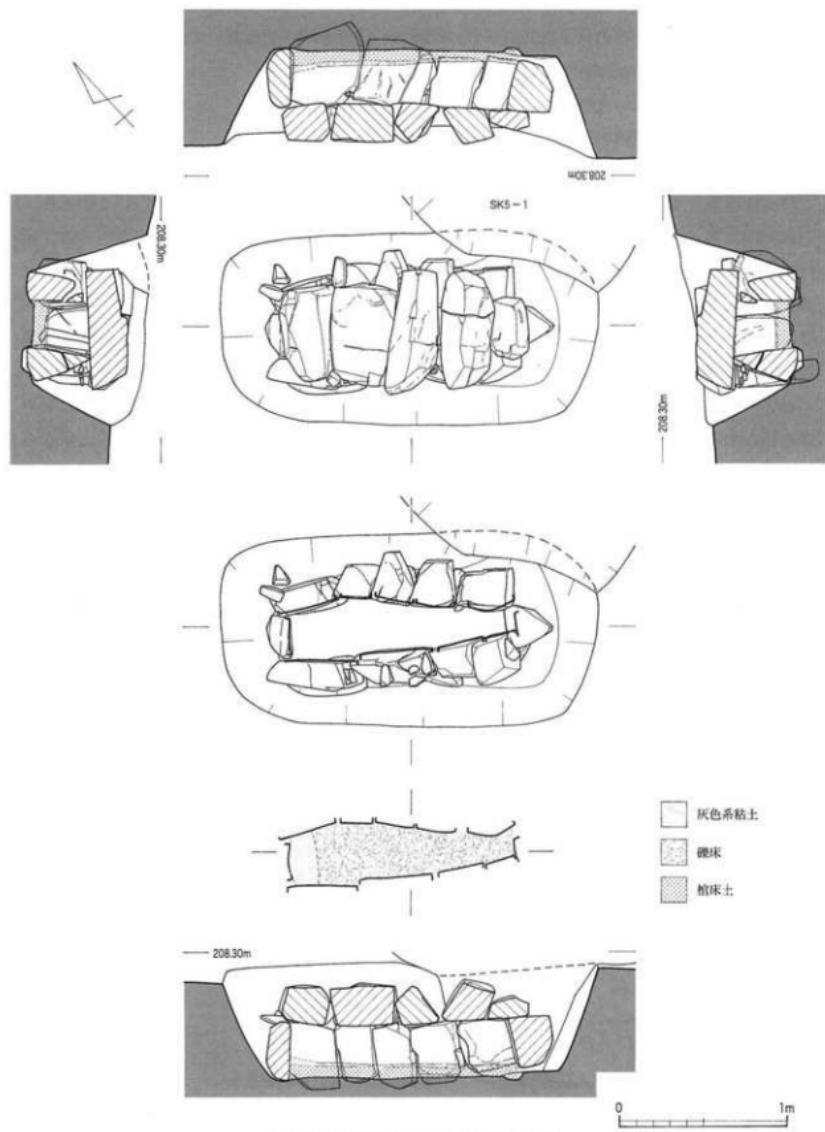
小口石・側石 平面形は北西端から2枚目の両側石付近がやや膨らみ、南東端に向けて狭くなる。内法は長さ約1.34m、西小口の幅0.30m、最大幅約0.37m、東小口の幅0.15m、深さ0.25~0.30mである。小口石と側石の組み方は、北西小口側は側石が小口石を挟む形態である(a類)。一方、南東小口側は南西側石の側面を南東小口石に当て、南東小口石の側面を北東側石に当てている(b類)。小口石・側石の上面は南西側石では直線状であるが、北東側石はやや凹凸がある。北西小口石と南東小口石の上面のレベル差が5cm程度あり、南東から北西に向けて傾斜している。

北西小口石は横25cm、縦36cm、厚さ15cmの長方形状の板石で、南東小口石は横26cm、縦32cm、厚さ28cmの長方形状の板石であり、いずれも縦長に置いている。

側石は南西側4枚、北東側5枚、いずれも長方形状の板石である。側石の隙間は狭く、北東側石の一部で隙間に細長い板石を詰めている。北東側石はいずれも横23~37cm、縦31~39cmのやや小型の板石で、縦長に置いている。南西側石は北西端から1・2枚目は横51~58cm、縦40~49cmのやや大型の板石で横長に置き、その他の2枚は横23~29cm、縦30~33cmのやや小型の板石で縦長に置いている。なお、南西側石の南東端の1枚と北東側石の東寄り4枚は南東小口石と同様に幅の割に分厚い角柱状の石材である。小口石・側石の設置順は南西側石の北西端から1・2枚目でやや大型の石材を使用していること、縦長に置かれた側石が全体的にやや北西側に傾いていることから、南西側石・北西小口石→北東側石→南東小口石の順に設置したとみられる。小口石・側石を設置するため、掘方の底面のそれぞれの箇所を数cm程度掘り込んでいる。特に、南西側石の北西端から1・2枚目は7~20cm掘り込んでいる。



第20図 第5号古墳SK 5-1実測図 (1 : 30)



第21圖 第5号古墳 SK5-2 実測図(1:30)

**床面** 床面はほぼ水平であるが、中央部分が若干凹んでいる。なお、北西端には暗灰色粘土を厚さ数cm敷いて枕とし、その粘土以外の部分の床面に小円礫を厚さ数cm敷いて礫床としている。その下位に小礫を含む暗黄褐色土を敷いて棺床土としている。

**遺物** 遺物は出土していない。

**その他** 赤色顔料が石棺内側全面に塗布されている。

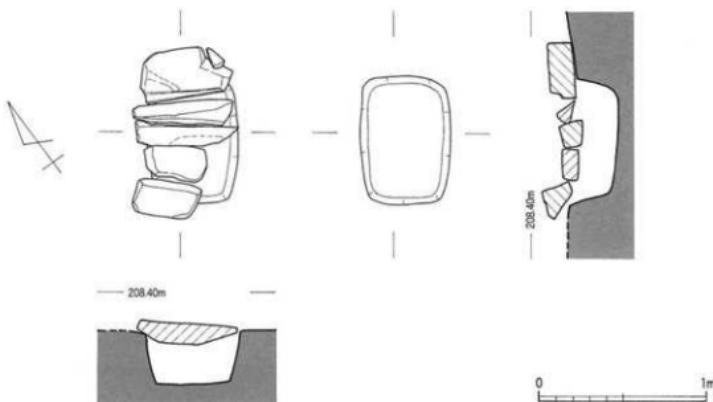
③ SK 5-3 (石蓋土坑) (第22図、図版25 a・25 b)

墳頂部東寄りで、SK 5-1の東側に位置する從属葬である。数cm南西側にSK 5-1がある。主軸方向はN36°E (北東-南西方向)で、尾根線及びSK 5-1の主軸方向とほぼ平行する。頭位は北東寄りの蓋石がやや大きいことなどから、北東側と考えられる。

**蓋石** 蓋石は5枚の板石で、蓋石の範囲は長さ約1.01m、幅約0.62mである。北東側に長さ55~61cm、幅14~30cm、厚さ10~15cmのやや大型の板石を3枚置き、その南西側に長さ37~39cm、幅21cm前後、厚さ11~19cmの小型の板石を2枚置いている。南西側の2枚は墓坑の南東部を覆っていない。また、北東端の1枚以外は掘方東側の上端にしっかりとかかっておらず、掘方内部にやや沈み込んでいる。蓋石の隙間はいずれも数cm程度である。蓋石の設置順は蓋石がほとんど重ならないため不明確だが、北東端の蓋石が墓坑から北東側に大きくはみ出している状況から、北東端の蓋石が最後に置かれたと考えると、南西側から北東側に向けて順に置いたと推測される。

**墓坑** 検出した墓坑は1段であるが、上方の蓋石の周辺にさらに1段掘られ、本来は2段であったと思われる。検出した墓坑はやや膨らんだ隅丸の長方形で、墓坑の上端は長さ約0.76m、幅約0.54m、下端は長さ約0.67m、幅約0.45m、深さ0.25~0.3mである。埋土は暗黄褐色土である。

**床面** 床面はほぼ平坦で、南西側に比べて北東側がやや深くなっている。



第22図 第5号古墳SK 5-3実測図(1:30)

遺物 遺物は出土していない。

④ SK 5-4 (石蓋土坑) (第23図、図版25c・26a)

墳丘北東側の溝の平坦な底面で、墳丘D面の上段葺石の裾部の北西側コーナーから約0.5m北東側に位置する從属葬である。SK 5-5が約1.2m北東側にあり、SK 5-6が約2.5m北側にある。他の遺構との重複はない。主軸方向はN126°E(南東-北西方向)で、尾根線とほぼ直交する。頭位は南東寄りの蓋石がやや大きいこと、南東小口側に板石を置いていることなどから、南東側と考えられる。

蓋石 蓋石は4枚の板石で、蓋石の範囲は長さ約0.71m、幅約0.21mである。いずれも長さ23~28cm、幅15~27cm、厚さ7~10cmの小型の板石である。蓋石の隙間はほとんど無い。蓋石の設置順はまず北西端から2枚目を置き、次にその両側に順次置いたとみられる。

墓坑 墓坑は2段になっている。南東側の上端付近の形状がかく乱等により不明確であるが、隅丸の長方形と推定される。現状の大きさは墓坑の上端は長さ約0.72m、幅0.37m、深さ0.15~0.2mである。下段は長円形で、下段の上端は長さ約0.5m、幅約0.2m、下端は長さ約0.37m、幅約0.13m、深さ5~8cmである。なお、上段の側面に小型の板石を横長に置いている(南東小口側1枚、北東側面4枚、南西側面1枚)。このうち、北東側面では飛び石のように置いている。この板石の大きさは幅8~12cm、縦3~9cm、厚さ4~7cmである。埋土は暗黄褐色土である。

床面 床面はほぼ平坦である。

遺物 遺物は出土していない。

⑤ SK 5-5 (石蓋土坑) (第23図、図版26b~27b)

墳丘北東側の溝の東寄り下端付近で、墳丘D面の上段葺石の北西側のコーナーから約2m北東側に位置する。SK 5-4が約1.2m南西側にあり、SK 5-6が約1m北西側にある。他の遺構との重複はない。主軸方向はN136°E(南東-北西方向)で、尾根線とほぼ直交する。近くのSK 5-4の主軸方向とはほぼ平行する。頭位は南東寄りの蓋石がやや大きいことやこの蓋石を丁寧に置いた様子が窺えることなどから、南東側と考えられる。

蓋石 蓋石は3枚の板石で、蓋石の範囲は長さ約0.83m、幅約0.56mである。南東側に長さ37~50cm、幅28~31cm、厚さ19~23cmのやや大型の板石を2枚置いて墓坑の大部分を覆い、北西側に長さ30cm、幅20cm、厚12cmの小型の板石を1枚置いて墓坑の北西端を覆っている。蓋石を安定化するために、南東端の蓋石の周縁に長さ10~15cmの小礫を数個置いており、南東端の蓋石を丁寧に置いた様子が窺える。蓋石の隙間はいずれも数cm程度である。蓋石の設置順は石の重なり方などから、まず中央に置き、次にその両側に順次置いたとみられる。

墓坑 墓坑は2段になっている。墓坑は長円形で、墓坑の上端は長さ約0.92m、幅約0.65m、現状の深さ約0.62~0.8mである。下段は長円形で、北西側が崩れている。下段の上端は長さ0.45m程度と推定され、幅約0.32mである。下端は長さ約0.3m、幅約0.08m、深さ0.37~0.48mである。埋土は暗褐色土である。

床面 床面はほぼ平坦で、中央部が若干凹んでいる。床面の北西端に5cm程度高い段がある。

**遺物** 石製勾玉 3点(28～30), 石製白玉 5点(31～35)が出土し, 29のみ出土位置を確認できた。29は下段の中央部のやや北東辺寄りで, 床面から 5cm程浮いた状態で出土した。その他は下段の墓坑を掘り上げた埋土の中から確認した。28・30・32・35は床面近くから, 31・33・34は埋土から出土した。

⑥ SK 5-6 (石蓋土坑) (第23図, 図版27c・28a)

墳丘の北側で, 墳丘北東側の溝の北端に位置する従属葬である。墳丘C面の下段葺石の北東端から約0.6m北側に位置する。SK 5-5が約1m南東側にある。他の遺構との重複はない。主軸方向はN102°E (東南東-西北西方向) で, 尾根線と斜交し, 等高線と直交する。近くのSK 5-5の主軸方向より東方向にずれている。頭位は東寄りの蓋石がやや大きいことなどから, 東側と考えられる。

**蓋石** 蓋石は3枚の板石で, 蓋石の範囲は長さ約0.73m, 幅約0.42mである。長さ34～40cm, 幅17～24cm, 厚さ15～18cmのやや大型の板石を置いて墓坑の大部分を覆い, 東端に長さ13cm, 幅8cm, 厚6cmの小型の石を1枚置いて墓坑の東端を覆っている。墓坑の北西辺は蓋石の外側にはみ出している。蓋石の隙間はいずれも数cm程度である。蓋石の設置順は, 石の重なり方などから, 西側から東側に向かって順に置いたとみられる。東端の小型の石は東側の蓋石を置いた後に置いたとみられる。

**墓坑** 墓坑は1段であるが, 中位に緩傾斜から急傾斜に変換する稜線がある。墓坑は西側が幅広の変形の長円形で, 上端は長さ約0.65m, 幅約0.45m, 下端は長さ約0.43m, 幅約0.2m, 現状の深さ約0.18～0.39mである。埋土は上層が暗灰褐色土, 下層が暗黄褐色土である。

**床面** 床面はほぼ平坦で, 西側に比べて東側がやや深い。

**遺物** 遺物は出土していない。

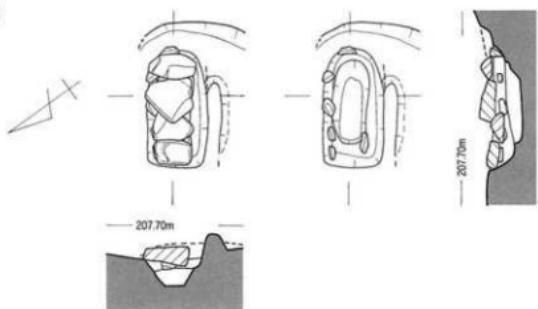
(4) 出土遺物 (第24・25図, 図版23a・27b・28b・39)

SK 5-1から鉈 (25), 鉄鎌 (26), 竪櫛 (27)と土師器の小片が, SK 5-5から石製勾玉 3点(28～30), 石製白玉 5点(31～35)が出土した。墳丘上や葺石の間から土師器甕などの小片が, 北東側の溝の埋土から土師器の小片や不明土製品(38～40)などが出土した。墳丘外では, 完形に近い土師器甕 (36)が北西側斜面のSK 6の南西側で出土し, 手づくね土器碗 (37)が南東側斜面で出土した。また, 北東側・南西側で土師器の小片などが出土した。なお, 墳丘上・墳丘外の表土や葺石の間から須恵器の破片や古錢が出土した。

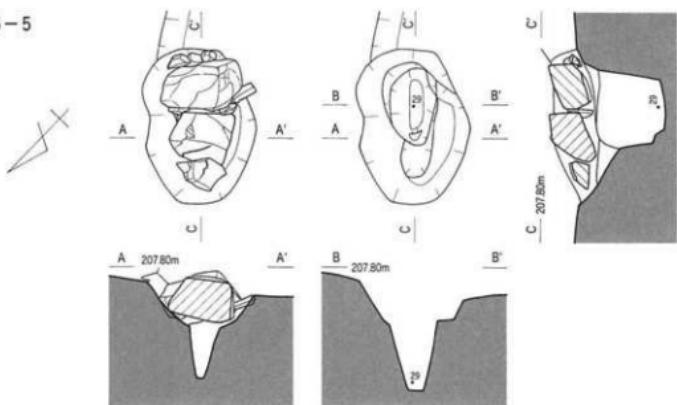
① SK 5-1 出土遺物 (第24図25～27)

**鉄製品** 25は鉈で, ほぼ完形だが, 茎部の刃部寄りの一部が欠損しており, 長さは21cm以上である。刃部先端から茎部にかけて緩やかに幅が広がり, 茎部の幅は1.1cm程度で一定である。茎部の厚さは0.3cm程度である。刃部は片側に緩く反り, 両側に刃を付けている。刃部の長さは鉈のため明確ではないが, 刃部の反りの様子から1～2cmとみられる。茎部の先端側は直線的に延びているが, 茎部の刃部側が15～20°緩やかに曲がっている。なお, 布の付着した痕跡が茎部先端

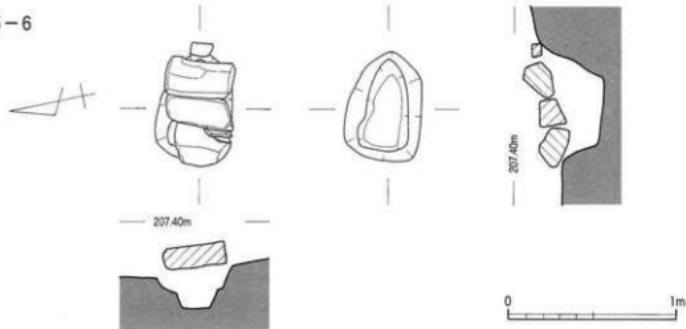
SK5-4



SK5-5



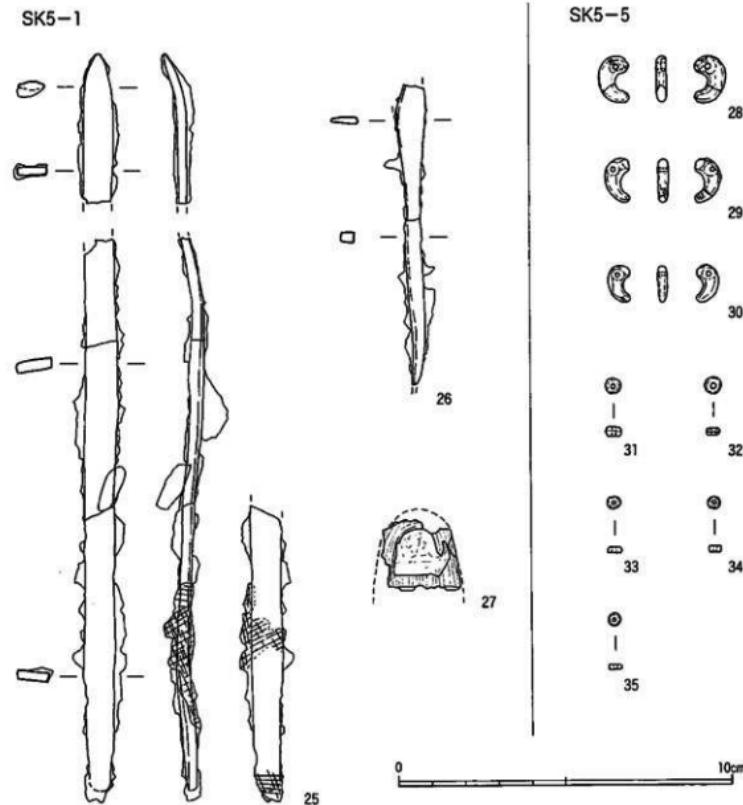
SK5-6



第23図 第5号古墳SK5-4～SK5-6実測図(1:30)

部分の片面及び一側面において端部から約7cmにわたり鎧となって残っている。布目の幅は1mm前後であり、やや粗い目の布を使用している。茎部には木柄の木質痕が見られず、布目が鉢の茎部に直接付着していることから、鉢を木柄の無い状態で布に巻いて副葬したとみられる。

26は鉄鎌で、鎌身部と茎部の先端を欠損している。現状の長さ8.9cm、幅1cmで、細長い形態である。鎌身部は片刃とみられ、背部は直線的で、刃部はやや膨んでいる。断面は扁平で刃部側が薄くなっている。厚さは0.1~0.2cmである。関部は明瞭ではなく、茎部に徐々に移行する。茎部は先端部に向けて細くなる。茎部の断面は長方形であり、厚さは0.4cm程度で鎌身部よりやや厚い。



第24図 第5号古墳出土遺物実測図(2:3)

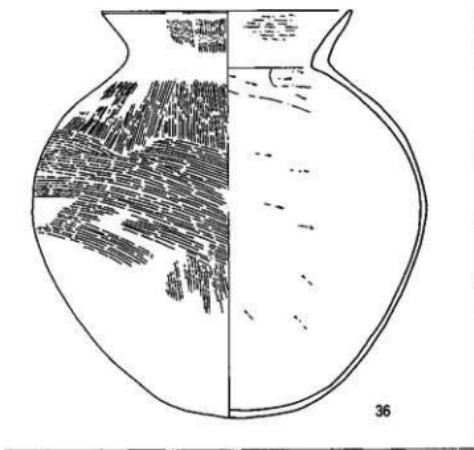
堅脚 27は堅脚で、ムネ部<sup>(3)</sup>の画面の漆膜だけが部分的に残存し、歯部は失われている。現状の長さは2.1cm、幅は約2.3cmで、やや小型である。漆膜の状況から、10本程度の竹ひごを折り曲げ、糸や樹皮で固定し、ムネ部の表面に漆を塗布したものとみられる。

② S K 5-5出土遺物（第24図28～35）

玉類 28～30は石製勾玉で、石材はいずれも珪質凝灰岩である。大きさは最大長1.06～1.37cm、厚さ0.25～0.33cm、重量0.22～0.43gで、小型で扁平な勾玉である。孔径は28が約2mm、29・30が1～1.5mmである。28は頭部から尾部まであまり幅が変わらないが、29・30は頭部が尾部に比べてやや大きい形である。29の尾部に細い刻線が4条みられるが、新しい傷の可能性がある。

31～35は石製白玉で、石材は滑石である。大きさは最大径0.35～0.43cm、最大長0.18～0.32cm、孔径1.1～1.6mm、重量0.03～0.09gである。31・32は側面の中央部に明瞭な稜線がある。一方、

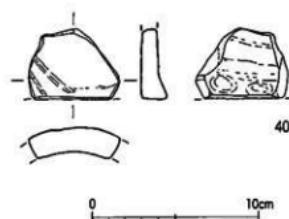
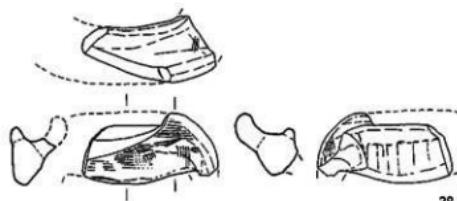
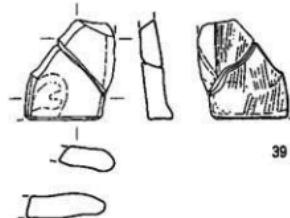
北西側斜面



南東側斜面



北東側溝



第25図 第5号古墳周辺出土遺物実測図(1:3)

33～35は側面の中央部に稜線はみられず、丸みをもって膨らんでいる。

### ③ 周辺出土遺物（第25図36～40）

土師器 36は壺で、ほぼ完形に復元できる。底部は丸底で、体部は球形を呈し、最大径がやや上位にあり、肩がやや張る。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は長く外傾し、端部は丸く收める。体部内面はヘラケズリの後、丁寧にナデが施され、体部の器壁は全体的に薄い。外面は全体的には縦方向のハケ目で、体部中央部に横方向ハケ目が多くみられる。口縁部外面・胴部外面中位及び胴部内面底部に煤が付着している。

37は手づくね土器の椀の破片である。底部はわずかに平底で、体部は緩やかに立ち上がり、端部は丸く收める。内外面に指頭圧痕が多く残る。

土製品 38～40は不明土製品で、胎土などからみて同一製品の可能性がある。38は幅2.5～3.5cm、厚さ2～2.5cmの横長でやや厚めの板状の粘土に、幅2cm程度・厚さ1cm程度の粘土を貼り付けている。この形状から移動式カマドの底部分になる可能性がある。39・40は板状の土製品で、いずれも下辺を丁寧にナデ、平坦にしている。下辺の幅はいずれも1.5cm程度である。39はやや斜めに立ち上がり、40はほぼ垂直に立ち上がる。39の横方向の断面は直線的で、片側の側面を丸く收める。40の横方向の断面は緩やかに湾曲している。いずれも下辺付近に指頭圧痕が残っている。この形状及び38との関係から、39は移動式カマドの前面の裾部、40は移動式カマドの前面以外の裾部になる可能性がある。

## 4 箱山第6号古墳

### (1) 立地と調査前の状況（第4・5図、図版1a～2a・2c・13b～14b）

調査区の南西端で、第3～6号古墳のなかで最も南西寄りで、標高の低い地点に位置する。墳頂部の標高は206.75m前後である。第6号古墳の北東側の周溝が第5号古墳南西側の溝と切り合っている。墳丘中央部付近が調査区の境界となっている。そのため、調査は古墳の北東側の調査区内について行い、南西側は未調査である。なお、調査前の試掘の際には、遺構は確認されておらず、調査区内において第6号古墳は確認されていなかった。

### (2) 墳丘、周溝（第26・27図、図版28c～30c）

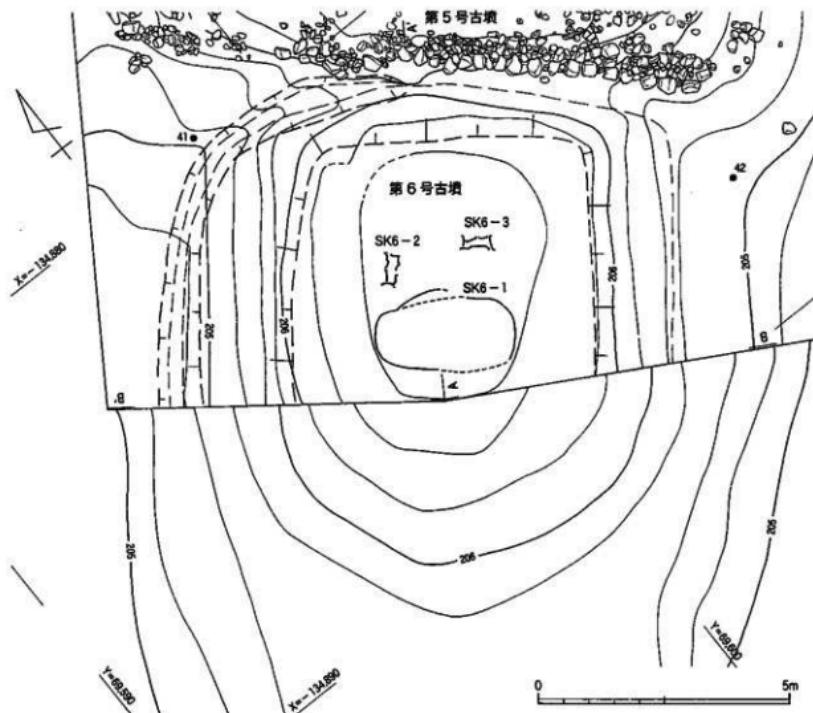
墳形は方墳で、南西側が調査区外のため不明確であるが、正方形あるいは南北にやや長い長方形になる可能性がある。北西-南東方向の幅は北東側約9m、中央部約9.8mで、中央部がやや膨らんでいる。北東-南西方向の幅は中央部が約6.2m以上で、10m程度と想定される。高さは北東側墳裾から約0.7m、北西側墳裾から約2m、南東側墳裾から約1.3mであり、尾根上の墳裾では低く、両側の斜面の墳裾では高くなっている。なお、墳丘に葺石や列石などの外表施設は検出されていない。なお、墳丘の周囲に周溝が廻っている。

墳丘の土層断面 南西-北東方向の土層断面をA-A'、南東-北西方向の土層断面をB-B'とする。

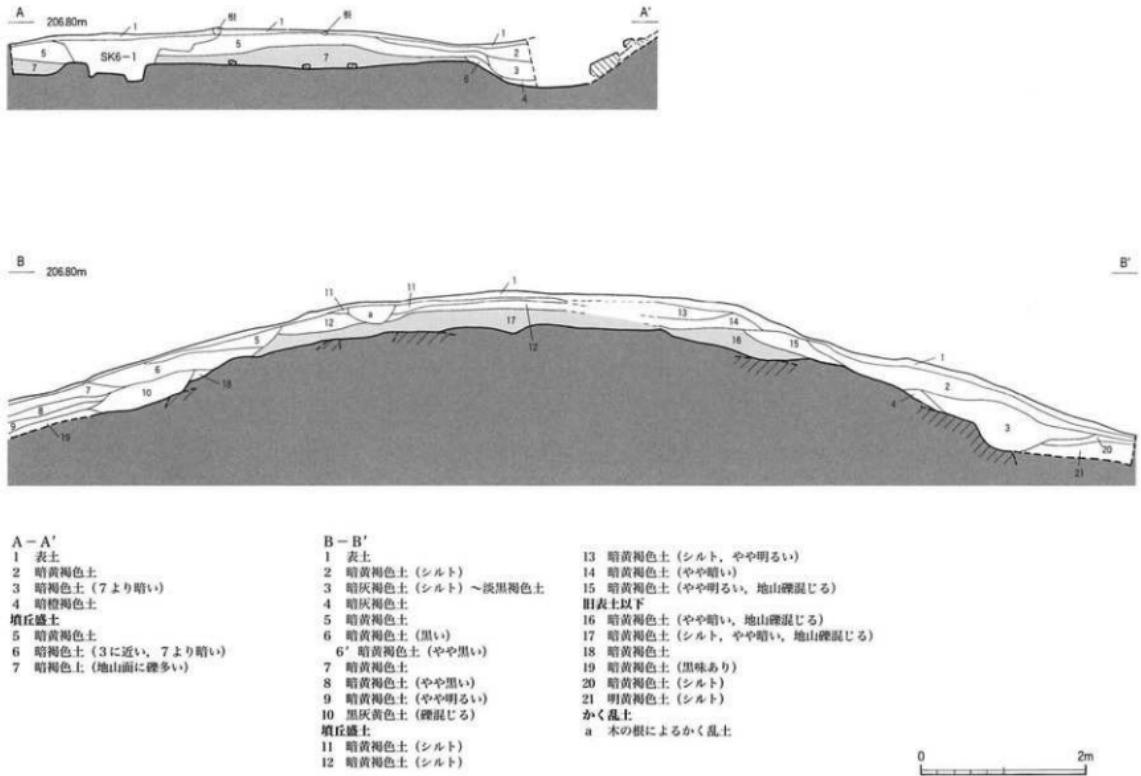
A-A'は尾根線に平行し、中心埋葬SK6-1の主軸にほぼ直交する方向である。土層断面を

下方から順にみると次のとおりである。①地山の直上に7層がある。7層は旧表土と思われ、7層の下層には礫が多くみられる。②7層の上に墳丘盛土として5層を積んでいる。③墳頂部では5層の上に1層（表土）が薄く堆積し、墳丘斜面や周溝では1～4層が堆積している。墳頂部の表土が薄く、墳頂部が平坦でないことから、本来はさらにその上方に墳丘盛土が存在していたと思われ、その盛土はかなり流失しているようである。なお、6層は第5号古墳の南側の溝の埋土とみられ、第6号古墳の周溝（3・4層）が6層を掘り込んでいる。

B-B'は尾根線に直交する方向であり、中心埋葬SK6-1の主軸と平行する方向である。A-A'の堆積状況と基本的に同様である。すなわち、①地山の直上に旧表土と思われる16・17層があり、A-A'の7層に対応する。②16・17層の上に墳丘盛土として11～15層を積んでいる。A-A'の5層に対応する。③墳頂部では11～15層の上に1層（表土）が薄く堆積し、墳丘斜面



第26図 第6号古墳墳丘測量図(1:100)



第27図 第6号古墳土層断面実測図(1:60)

や周溝では1～10層が堆積している。なお、3層は北西側の周溝の埋土、10層は南東側の周溝の埋土とみられる。

**周溝** 北東側から北西側にかけて地山を掘り込んでいる状況を検出した。その規模は長さ約4.2m以上、上端幅約1m、下端幅約0.4m、深さ数10cmである。南東側の周溝は斜面で流出して不明確で、土層断面で確認した。南東側の土層断面では上端幅約1.3m、下端幅約0.9m、深さ約0.5mである。なお、北東側の土層断面では上端幅約1.2m、下端幅約0.5m、深さ約0.4m、北西側の土層断面では上端幅約2.3m、下端幅約0.5m、深さ約0.7mである。

### (3) 墓葬施設

墳頂部で組合式木棺1基（SK 6-1）と箱式石棺2基（SK 6-2・SK 6-3）を検出した。

#### ① SK 6-1（組合式木棺）（第28図、図版31a～33b）

墳丘頂部中央、やや南寄りに位置する中心埋葬である。10cm北側にSK 6-2があり、約0.8m北東側にSK 6-3がある。主軸方向はN128°E（南東-北西方向）で、尾根線とほぼ直交する。頭位は南東側と考えられる。

**墓坑** 墓坑は南東側がやや幅広の隅丸の長方形である。北東辺が木根によるかく乱を受け、南西辺がトレンチなどにより、墓坑の上端がそれぞれ不明確になっている。現状の規模は長さ約2.76m、南東側の幅約1.45m、中央部の最大幅約1.5m、北西側の幅約1.2m、深さ約0.33～0.44mである。

墓坑は2段になっているが、中位の段のレベルは水平ではなくレベル差が大きく、南東小口側のレベルが北西小口側に比べてやや高い。

土層断面は、1～4層が木棺内部の埋土、5層が棺床土及び棺材周囲に使用した土、6層が棺材と墓坑の間の裏込めの土とみられる。なお、a層（灰白色粘土）を棺材周囲で多用している。特に、棺材の上部で棺材を開むような状態で検出した。

床面近くの南東小口部で板石1個、小礫2個、北東小口部で板石1個、小礫2個、中央部北西寄りで小礫1個が出土した。両小口にある板石・礫は小口板や側板の固定用と思われる。

床面 床面はほぼ平坦で、数cmの棺床土（5層）を敷いている。床面は木根によるかく乱を受け不明確になっているが、小口板・側板を設置するために、墓坑の底面のそれぞれの箇所を数cm～20cm程度掘り込んでいる。特に、両側板の中央部では10cm近く深く掘り込んでいる。床面の掘り込みなどから、側板を両側の小口板が挟む組合式の木棺と考えられ、木棺の内法は長さ1.7m程度、南東側の幅0.35m程度、北西側の幅0.25m程度に復元できる。

**遺物** 遺物は出土していない。

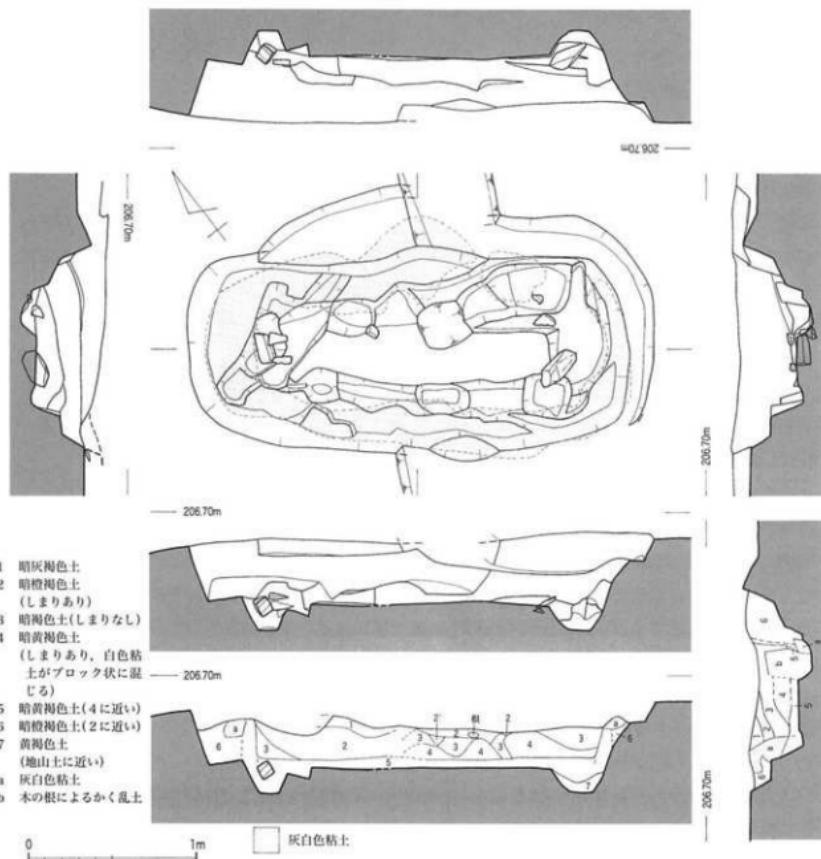
#### ② SK 6-2（箱式石棺）（第29図、図版33c～34c）

墳頂部北寄りで、SK 6-1の10cm北側に位置する從属葬である。石棺の主軸方向はN45°E（北東-南西方向）で、尾根線とほぼ平行し、SK 6-1の主軸方向とほぼ直交する。頭位は北東小口側の蓋石や側石がやや大きいことなどから、北東側と考えられる。

**掘方** 基本的には隅丸の長方形で、中央部北西辺が大きくなっている。規模は長さ約1.3m、

北東側の幅0.7m程度、最大幅約1.04m、南西側の幅0.5m程度、現状の深さ約0.35～0.45mである。掘方のほぼ主軸線上に石棺を構築している。なお、北西辺の膨らんだ部分は深さ10数cmの浅い段で、底面は緩やかに傾斜している。長さ約31cm、幅約25cm、厚さ約13cmの板石をこの段の底面に直に置いている。この段はSK2と同時に作られたものと思われるが、機能は不明である。

**蓋石** 蓋石は5枚の板石で、蓋石の範囲は長さ約0.93m、幅約0.55mである。北東端から3枚は長さ45～55cm、幅26～29cm、厚さ12～20cmの板石で、この3枚でほとんど棺内を覆っている。南西端に長さ28cm程度、幅15～25cm、厚さ8cm前後の小型の板石2枚を小口石の上に重ねて置



第28図 第6号古墳SK6-I実測図(1:30)

いている。蓋石の隙間はいずれも数cm程度である。蓋石の設置順は蓋石の置き方などから、北東端から3枚目の板石を最初に置き、その後南西側から北東側に向けて順に置き、同時に南西端の板石も重ねて置いたとみられる。

**小口石・側石** 平面形は南東側石の北東端から2枚目付近がやや膨らみ、南西端に向けて狭くなっている。内法は長さ約0.58m、北東小口の幅0.2m、最大幅約0.22m、南西小口の幅0.16m、深さ0.22～0.3mである。小口石と側石の組み方は、北東小口側は側石が小口石を挟む形態である（a類）。一方、南西小口側は北西側石の側面を南西小口石に当てる、南西小口石の側面を南東側石に当てる（b類）。小口石・側石の上面は両側石とも直線状であるが、多少凹凸がある。北東小口石と南西小口石の上面のレベル差が5cm程度あり、北東から南西に向けて傾斜している。

北東小口石は横35cm、縦34cm、厚さ17cmで、下辺の幅が狭い逆台形状の板石である。南西小口石は横23cm、縦26cm、厚さ18cmの長方形形状の板石である。両小口とも縦長に置いている。

側石は北西側3枚、南東側4枚で、南東側の中央部の1個を除いて長方形状あるいは逆台形状の板石である。側石の隙間は狭く、北西側石の一部で隙間に細長い板石を詰めている。北西側石はいずれも横16～33cm、縦26～35cmの板石で縦長に置いている。南東側石は北東小口側から3枚目は横12cm、縦9cmの小型の板石で横長に置き、その他の3枚は横18～21cm、縦23～31cmの板石で縦長に置いている。小口石・側石の設置順は北西側のほうが総じて南東側より大きめの石材を使っていること、南東側石の北東端がやや大きめであり、北東端から3枚目が極めて小さく側石の機能を果たしていないことから、北東小口石→北西側石→南東側石・南西小口石の順に設置したとみられ、南東側石は北東側から南西側に向けて置いたようである。小口石・側石を設置するために、掘方の底面のそれぞれの箇所を数cm～10cm程度掘り込んでいる。

**床面** 床面はほぼ水平で、多少凹凸がある。また、床面に厚さ数cm～5cm程度の棺床土がある。

**遺物** 遺物は出土していない。

### ③ SK 6-3（箱式石棺）（第29図、図版35a～36a）

墳頂部東寄りで、SK 6-1の約0.8m北東側に位置する從属葬である。主軸方向はN127°E（南東-北西方向）で、尾根線とほぼ直交し、SK 6-1の主軸方向とほぼ平行する。頭位は南東小口側の蓋石や側石がやや大きいことなどから、南東側と考えられる。

**掘方** 基本的には隅丸の長方形とみられ、北西端が試掘トレンドで欠損している。現存規模は上端の長さは約1.01mと推定され、南東側の幅0.55m程度、最大幅約0.63m、深さ約0.32～0.41mである。掘方のほぼ主軸線上に石棺を構築している。

**蓋石** 蓋石は3枚の板石で、蓋石の範囲は長さ約0.7m、幅約0.39mである。南東端に長さ約40cm、幅約36cm、厚さ約20cmのやや大型の板石を、北西側に長さ26～30cm、幅約13～20cm、厚さ10cm程度の小型の板石2枚を置いて、この3枚で棺内を覆っている。蓋石の隙間はいずれも数cm程度である。蓋石の設置順は蓋石の置き方などから、北西側2枚を置き、その後、南東側のやや大型の板石を置いたとみられる。

**小口石・側石** 平面形は北東側石の南東端から1・2枚目の間がやや膨らみ、北西小口に向けて

狭くなる。内法は長さ約0.52m、南東小口の幅0.15～0.19m、北西小口の幅0.1～0.12m、深さ0.13～0.19mである。小口石と側石の組み方は、南東小口側は両側石の側面を南東小口石に当てる形態である（d類）。一方、北西小口側は北東側石の側面を北西小口石に当てる、北西小口石の側面を南西側石に当てる（b類）。小口石・側石の上面は両側石とも直線状である。南東小口石と北西小口石の上面のレベル差が5cm程度あり、南東から北西に向けて傾斜している。

南東小口石は横約34cm、縦約22cm、厚さ約15cm、北西小口石は横約22cm、縦約20cm、厚さ約10cmの長方形形状の板石で、いずれも横長に置いている。

側石は両側とも2枚ずつで、いずれも長方形あるいは逆台形状の板石である。側石の隙間は狭い。北東側石は横25～29cm、縦20cm程度の板石で、いずれも横長に置いている。南西側石は横25～43cm、縦15～18cmの板石で、いずれも横長に置いている。北西小口側の側石と掘方の間に長さ22cm、縦15cm、厚さ20cm程度の礎を1個入れて側石の支えにしている。小口石・側石を設置するために、掘方の底面のそれぞれの箇所を数cm程度掘り込んでいる。小口石・側石の設置順は、南東小口側の小口石や南西側石の南東端がやや大きめであることなどから、南東小口石→両側石→北西小口石の順に設置したとみられる。

床面 床面はほぼ水平で、多少凹凸がある。また、床面に厚さ5cm程度の棺床土がある。

遺物 遺物は出土していない。

#### （4）出土遺物（第30・31図、図版36b・36c・40）

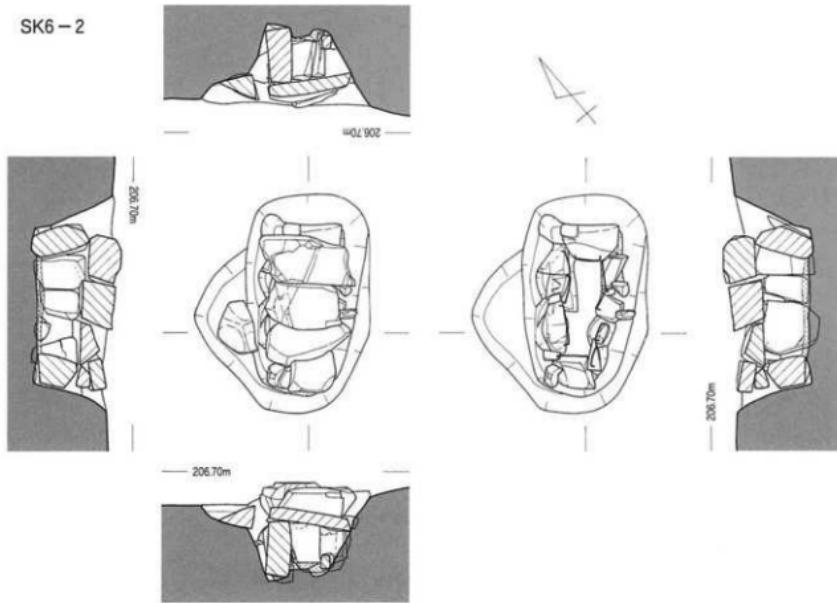
埋葬施設や墳丘上からは遺物は出土していない。北側周溝や墳丘外の西側斜面、東側斜面で土器類（土師器の壺・壺）、石製品（勾玉・管玉）が出土した。土師器壺（41）は北側周溝から数10cm北側の墳丘外の緩斜面の浅い凹みからの出土で、口縁部を斜面下方（西側）に向けて横倒しの状態であった。土師器壺（42）は墳裾から約1m東側の緩斜面で横倒しの状態で出土した。土師器の小型壺（43）及び石製管玉（45）は第6号古墳北東側周溝埋土から出土し、第6号古墳に伴うものと考えられるが、第5号古墳に伴う可能性もある。石製勾玉（44）は第6号古墳墳丘の北西側斜面から出土した。

土師器41は壺で、底部を欠失しているがほぼ完形に復元できる。体部は長円形を呈し、最大径は中位にある。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は長く外傾して端部は丸く收める。体部の内面はヘラ削りの後、ナデを施しており、体部の器壁は全体的に薄い。外面は体部中央部で横方向のハケ目が多くみられる。底部外面に煤が付着する。

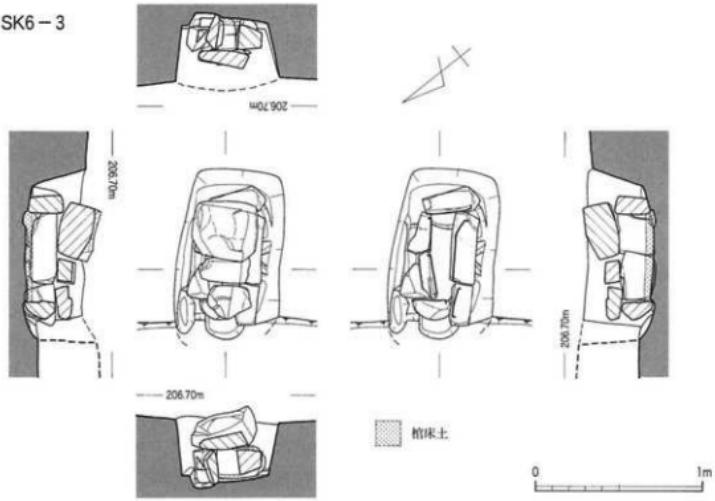
42は壺で、ほぼ完形に復元できる。底部はやや膨らみがある平底気味で、体部は球形を呈し、最大径は中位より若干上位にある。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は長く外傾し、端部は細くなり丸く收める。内外面の調整は不明確である。体部の器壁は全体的に薄い。胴部外面に煤が付着している

43は小型壺とみられる頸部から体部の破片で、全体の形状は不明である。肩部はやや張り、頸部は緩く屈曲する。体部の器壁はやや厚い。胎土は精良である。

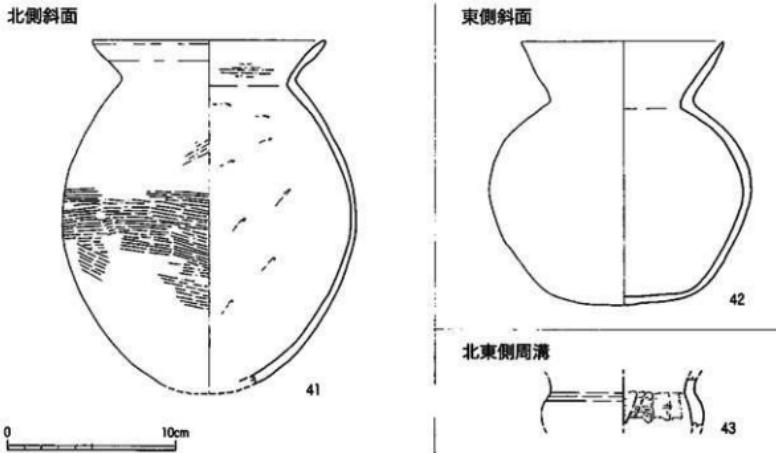
SK6-2



SK6-3



第29圖 第6号古墳SK6-2・SK6-3実測図(1:30)



第30図 第6号古墳周辺出土遺物実測図(1)(1:3)

玉類 44は石製勾玉で、石材は珪質凝灰岩で、ややガラス質である。大きさは最大長1.31cm、厚さ0.3cm、重量0.32gで、小型で扁平な勾玉である。孔径は1.5mmである。頭部が尾部に比べてやや大きい形である。なお、SK5-5出土の勾玉28~30と石材の様子は若干異なるが、大きさは近い。

45は石製管玉で、石材は珪質凝灰岩である。大きさは最大長1.62cm、最大径0.41cm、孔径1.4mm、重量0.32gで、いわゆる細形の管玉である。



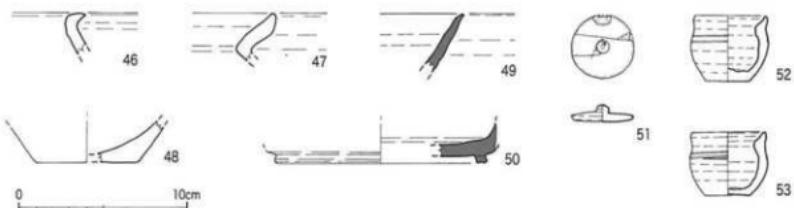
第31図 第6号古墳周辺出土遺物実測図(2)(2:3)

## 5 調査区内出土遺物（第32・33図、図版40）

調査区内で弥生土器・古代の須恵器・近世以降の陶磁器・古錢などが出土している。

弥生土器 46は無頸壺の口縁部～体部の破片と思われる。頸部は強く屈曲し、口縁部はほとんどない。口縁端部は尖り気味である。47は壺の口縁部の破片である。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は短く外傾している。端部は上方に拡張し、丸く收めている。48は底部の破片で、平底である。器種は不明である。47の時期は弥生時代後期中頃と考えられ<sup>(4)</sup>、46・48の時期は不明である。46~48はいずれも第3号古墳墳丘外の東側斜面から出土した。

須恵器 49・50は杯身である。49は口縁部～体部の破片である。体部は直線的に外傾し、口縁端

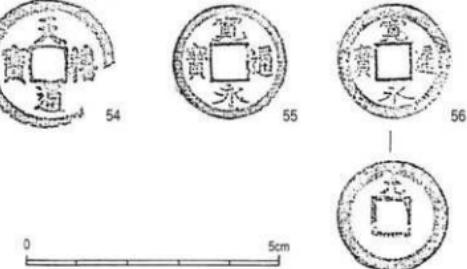


第32図 調査区内出土遺物実測図(1:3)

部は細く尖り気味である。50は高台部の破片である。底部は平底で、体部は屈曲して立ち上がる。屈曲部のやや内側に高台が付く。高台の断面は方形でやや外開きであり、接地面がやや凹んでいる。50の高台部の形態から8～9世紀代と考えられ<sup>(5)</sup>、49も同時期のものと思われる。49・50はいずれも第4号古墳墳丘外の北西側斜面で出土した。

陶器 51～53はミニチュアの陶器である。51はつまみの付いた蓋である。中央部がやや膨らみ、最大の厚さが6mm程度である。直径約7mm、高さ約5mmの円柱状のつまみが付く。同形と思われる破片が他に1点出土している。52・53は壺である。平底から体部は緩やかに内湾気味に立ち上がる。頸部は分厚く、わずかに屈曲する。口縁部は短く内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味である。体部上位に幅1mm程度の沈線を2条施している。底部の調整は、不明瞭であるが、糸切りの後ナデを施しているようである。形態や法量からみて、蓋(51)と壺(52・53)はセットになるようである。いずれも第4号古墳墳頂部にかつて所在していた祠の前の表土から出土しており、この祠に伴うものと思われる。時期は近世以降とみられる<sup>(6)</sup>。

古銭 54は「天禧通宝」(初鋤:北宋・1017年)、55・56は「寛永通宝」である<sup>(7)</sup>。56の背面に「元」の文字がある。55・56は新寛永の時期と考えられる。54は第5号古墳D面の葺石の間から出土し、本古墳群と同一尾根で南西側に近接する小城城跡に関係する可能性がある。55・56は第4号古墳の南西側尾根の南斜面で表面採集したもので、第4号古墳墳丘頂部にかつて所在していた祠に伴うものと思われる。



第33図 調査区内出土古銭拓影(原寸)

註

- (1) 次の文献では、小口石と側石の組み方を a～f類の6通りに分類されており、以下、この分類基準を援用する。  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「千代田流通墳地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」(III) 1998年
- (2) 次の文献で「ドーナツ状の盛土」と表現されている。  
三良坂町教育委員会『福井山D-2号古墳—土地改良総合整備事業に伴う発掘調査一』 1983年
- (3) 壓櫛の部分名称は、次の文献による。また、壓櫛の大きさについて、次の文献で「大きさはムネ部の幅が1cm程度の小型のものから幅5cm以上の大型まである。」とされており、本例はやや小型に属すると思われる。  
川村雷経「古墳時代の壓櫛」「国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集一」大阪大学考古学研究室 1999年 281～306頁
- (4) 次の文献に掲載されている508頁170（鳥根県前立山遺跡S I-17出土資料）及び510頁208（鳥根県前立山遺跡S I-23出土資料）が本例と類似している。時期は石見V-2・3様式で、弥生時代後期中頃とされている。  
松本岩雄「8 石見地域」「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」木耳社 1992年 483～519頁
- (5) 向田裕始「広島県（瀬戸内中部1）の8世紀の土器」「広島県（瀬戸内中部1）の9・10世紀の土器」「日本土器事典」雄山閣 1996年 778～779頁
- (6) 本例と酷似する蓋つきの壺が、尾道遺跡（東土堂地点・天寧寺境内）で出土している（17頁第15図68。この図面を割ると、大きさが本例の約2倍である）。江戸時代の遺物面より上層から出土しており、近世以降の資料とみられる。  
尾道市教育委員会「尾道遺跡一市街地発掘調査概要一」 1980年
- (7) 古鏡の分類については、次の文献を参考にした。  
兵庫県埋蔵鏡調査会「中世の出土鏡—出土鏡の調査と分類一」 1994年  
兵庫県埋蔵鏡調査会「近世の出土鏡II—分類図版篇一」 1998年

第3表 土器類・土製品観察表(1)

\*計画値の( )は復元値

報告番号	出土地点	種別・断縫	計画値(cm)	調査値	色調	出土	備考	
1	第3号古墳外 東側斜面 杯蓋	須恵器 蓋高:4.5 内縫:口縫ナメ	口径:(14.0) 内縫:須恵器ナメ、底部-口縫へラケズリのあと粗いナメ	外縫:灰青色 内縫:灰青色	否			
2	第3号古墳外 杯蓋	須恵器 蓋高:4.5 内縫:口縫ナメ	口径:(12.5) 内縫:須恵器ナメ、底部-口縫へラケズリのあと粗いナメ	外縫:淡灰色 内縫:淡灰色	否			
3	第3号古墳外 東側斜面 杯蓋	須恵器 蓋高:3.4 内縫:口縫ナメ	口径:(14.0) 内縫:須恵器ナメ	外縫:淡灰色 内縫:淡灰色	否			
4	第3号古墳外 東側斜面 杯蓋	須恵器 蓋高:2.5 内縫:口縫ナメ	口径:(13.0) 内縫:須恵器ナメ	外縫:灰青色 内縫:灰青色	否			
5	第3号古墳外 東側斜面 杯蓋	須恵器 蓋高:3.7 内縫:口縫ナメ	口径:(14.0) 内縫:須恵器ナメ	外縫:灰青色 内縫:灰青色	否			
6	第3号古墳外 東側斜面 杯身	須恵器 蓋高:4.0 内縫:口縫ナメ	口径:(11.5) 内縫:須恵器ナメ	外縫:淡灰色 内縫:淡灰色	否			
7	第3号古墳外 東側斜面 杯身	須恵器 蓋高:4.1 内縫:口縫ナメ	口径:(12.2) 内縫:須恵器ナメ	外縫:暗灰青色 内縫:暗灰青色	否			
8	第3号古墳外 東側斜面 杯身	須恵器 蓋高:4.1 内縫:口縫ナメ	口径:(12.2) 内縫:須恵器ナメ	外縫:淡灰色 内縫:暗灰青色	否	底部に刃目あり		
9	第3号古墳外 東側斜面 杯身	須恵器 蓋高:2.3 内縫:口縫ナメ	口径:(11.6) 内縫:須恵器ナメ	外縫:淡灰色 内縫:淡灰色	否			
10	第3号古墳外 東側斜面 杯身	須恵器 蓋高:2.6 内縫:口縫ナメ	口径:(10.6) 内縫:須恵器ナメ	外縫:淡灰色 内縫:淡灰色	否			
11	第3号古墳外 東側斜面 台付杯	須恵器 蓋高:8.8 内縫:口縫ナメ	口径:(13.0) 内縫:須恵器ナメ	外縫:淡灰色 内縫:淡灰色	否			
12	第3号古墳外 東側斜面 縁起・口縫部	須恵器 縁起:2.1 内縫:口縫ナメ	口径:(11.6) 内縫:須恵器ナメ	外縫:暗灰青色 内縫:暗灰青色	否	杯蓋の可能性がある		
13	第3号古墳外 東側斜面 縁起	須恵器 縁起:11.7 内縫:口縫ナメ	口径:(13.0) 内縫:須恵器ナメ	外縫:淡灰色～暗灰青色 内縫:淡灰色	否			
14	第3号古墳外 東側斜面 縁起	須恵器 縁起:15.3 内縫:口縫ナメ	口径:(15.4) 内縫:須恵器ナメ	外縫:淡灰色～暗灰青色 内縫:淡灰色	否			
15	第3号古墳外 東側斜面 縁起	須恵器 縁起:21.7 内縫:須恵器ナメ	口径:(25.8) 内縫:須恵器ナメ	外縫:上部は削瓶ナメのとき、下部はナメ 内縫:須恵器ナメ	外縫:淡灰色～暗灰青色 内縫:淡灰色	否	体部外面に2条の並行する割離(ヘア記号?)	
16	第3号古墳外 東側斜面 縁起	須恵器 縁起:21.8 内縫:口縫ナメ	口径:(11.7) 内縫:須恵器ナメ	外縫:上部-口縫ナメのとき 内縫:須恵器ナメ	外縫:暗灰青色(底部の 一部が模様化)　内縫:淡灰色	否	体部外面に横状の耳が付 (耳は1点残存)　腹裏の破片のみ、器高 不明(30mm程度)	
17	第3号古墳外 東側斜面 縁起	土師器 縁起:5.3 内縫:口縫ナメ	口径:(16.8) 内縫:口縫ナメ	外縫:黄褐色 内縫:黄褐色	普通			
23	第4号古墳外 南西側斜面 縁起	土師器 縁起:3.7 内縫:口縫ナメ	口径:(13.0) 内縫:口縫ナメ	外縫:不明(ナメか) 内縫:口縫へラケズリかに縁起ナメか?	普通			
24	第4号古墳外 北西側斜面 (焼成跡らしき)	土師器 縁起	口径:10.0 内縫:口縫ナメ	外縫:土師器-口縫のハケ目、口縫部-ハケ目 内縫:ナメ	外縫:明黄褐色 内縫:明黄褐色	扱い		
36	第5号古墳外 北西側斜面 井	土師器 縁	口径:(15.0) 内縫:口縫ナメ	外縫:底部-縫合あるいは横張りのハケ目、口縫部- 底面のハケ目のあとヨコナメ 内縫:底部-ハラケズリのあと丁寧なナメ、口縫部-ハ ケ目のあとヨコナメ	外縫:明褐色 内縫:明褐色	普通	口縫部外縫・外縫中央部 以上及び内縫底部にスス付着	
37	第5号古墳外 南東側斜面 井	手づくね土器 縁	口径:(5.6) 内縫:2.0 断縫:3.2	外縫:ナメ 内縫:ナメ	外縫:淡黄色 内縫:淡黄色	扱い		
38	第5号古墳 北東側斜面 (度通り)	不明土器品 移動式カマド	周存高:4.2 内縫:8.0 底部分:8.0	外縫:前方向のハケ目のあと粗いナメ 内縫:底部の粗いナメ	外縫:明黄褐色 内縫:明黄褐色	普通		
39	第5号古墳 北東側斜面 (度通り)	不明土器品 移動式カマド	周存高:5.9 内縫:5.5 底部分:5.5	外縫:底方向ハケ目のあと粗いナメ、底面は丁寧な ナメ	外縫:明黄褐色 内縫:明黄褐色	普通	2片接合	
40	第5号古墳 北東側斜面 (度通り)	不明土器品 移動式カマド	周存高:4.2 内縫:5.4 底部分:5.5	外縫:不明、底面は丁寧なナメ 内縫:ナメ	外縫:明黄褐色 内縫:明黄褐色	普通	外縫に2条の割離か	
41	第6号古墳外 北側斜面	土師器 縁	口径:(13.9) 内縫:17.4 底部分:15.7	外縫:底部-口縫のハケ目、口縫部-ヨコナメ 内縫:底部-ハラケズリのあとナメ、口縫部-横張りの ハケ目のあとヨコナメ	外縫:淡黄色 内縫:淡黄色	普通	外縫底部にスス付着	
42	第6号古墳外 東側斜面	土師器 縁	口径:12.5 内縫:15.5 底部分:15.8	外縫:ヨコナメ 内縫:ナメ	外縫:淡黄色 内縫:淡黄色	普通	外縫中央部以下にスス付 着	
43	第6号古墳 北東側斜面 小型窓か	土師器 縁	口径:(9.6) 内縫:14.0 底部分:13.0	外縫:ヨコナメ 内縫:ナメ	外縫:淡黄色 内縫:淡黄色	普通		
46	第7号古墳外 東側斜面 余生土器 縁起・口縫部	余生土器 縁起:2.6 内縫:口縫ナメ	周存高:2.6 内縫:不明	外縫:不明 内縫:不明	外縫:明黄褐色 内縫:明黄褐色	扱い		
47	第7号古墳外 東側斜面 余生土器 縁起・口縫部	余生土器 縁起:2.6 内縫:口縫ナメ	周存高:2.6 内縫:不明	外縫:不明 内縫:不明	外縫:明黄褐色 内縫:明黄褐色	扱い		
48	第7号古墳外 東側斜面 余生土器	余生土器 底部分:4.2	周存高:4.2 内縫:ナメ	外縫:不明(ナメか)	外縫:明黄褐色 内縫:明黄褐色	扱い		
49	第4号古墳外 北西側斜面 須恵器 縁起・口縫部	須恵器 縁起:3.5 内縫:口縫ナメ	周存高:3.5 内縫:不明	外縫:口縫ナメ 内縫:口縫ナメ	外縫:暗灰青色 内縫:暗灰青色	否		
50	第4号古墳外 北西側斜面 須恵器 縁起・口縫部	須恵器 縁起:2.4 内縫:口縫ナメ	高台:(12.8) 内縫:口縫ナメ	外縫:灰青色 内縫:暗灰青色	否			

第3表 土器類・土製品概観表(2)

報告番号	出土地点	種別・器種	計測値(cm)	調査		色調	出土	備考	*計測値の( )は復元値
				外観	内面				
51	第4号古墳頂部 側面表土	陶器(ミニチュア) 豆	最大幅:3.7 底径:1.1	外観:細部ナガ 内面:あめりのあとナダカ		外観:茶褐色 内面:茶系褐色	青		
52	第4号古墳頂部 側面表土	陶器(ミニチュア) 豆	口径:4.2 底径:2.6 高さ:4.0	外観:体部斜削ナガ、底部-条切りのあとナダカ 内面:同前ナダ		外観:淡黄褐色 内面:淡黄褐色	青	外面上部に沈縫2条	
53	第4号古墳頂部 側面表土	陶器(ミニチュア) 豆	口径:4.3 底径:2.6 高さ:3.7	外観:体部斜削ナガ、底部-条切りのあとナダカ 内面:同前ナダ		外観:淡黄褐色～橙褐色 内面:淡黄褐色～橙褐色	青	外面上部に沈縫2条	

第4表 金属製品計測表

報告番号	出土地点	種別	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	*( )内の数値は現状値	
								( )	( )
18	第3号古墳外 東側斜面	耳環	2.55	2.73	0.72	13.75	表面の一端剥落		
25	第5号古墳 SK5-1	鉢	(21.1)	1.1	0.3	(18.75)	一部欠損		
26	第5号古墳 SK5-1	鉄鏃	(8.9)	1.0	0.4	(5.76)	先端部欠損		

第5表 石製品計測表

報告番号	出土地点	種別	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	*( )内の数値は現状値	
								( )	( )
28	第5号古墳 SK5-5	勾玉	1.37	0.87	0.33	0.43	珪質凝灰岩		
29	第5号古墳 SK5-5	勾玉	1.26	0.72	0.26	0.28	珪質凝灰岩		
30	第5号古墳 SK5-5	勾玉	1.06	0.63	0.25	0.22	珪質凝灰岩		
31	第5号古墳 SK5-5	白玉	0.32	0.43	-	0.09	滑石		
32	第5号古墳 SK5-5	白玉	0.22	0.43	-	0.07	滑石		
33	第5号古墳 SK5-5	白玉	0.18	0.39	-	0.05	滑石		
34	第5号古墳 SK5-5	白玉	0.18	0.36	-	0.05	滑石		
35	第5号古墳 SK5-5	白玉	0.18	0.35	-	0.03	滑石		
44	第6号古墳 北西側斜面	勾玉	1.31	0.78	0.30	0.32	珪質凝灰岩		
45	第6号古墳 北東側周囲	管玉	1.62	0.41	-	0.32	珪質凝灰岩		

第6表 ガラス製品計測表

報告番号	出土地点	種別	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	*( )内の数値は現状値	
								( )	( )
19	第4号古墳 SK4-1	小玉	0.51	0.51	-	0.16	青緑色		
20	第4号古墳 SK4-1	小玉	0.40	0.48	-	0.12	淡青緑色		
21	第4号古墳 SK4-1	小玉	0.40	0.46	-	0.10	淡緑色		
22	第4号古墳 SK4-1	小玉	0.30	0.56	-	0.12	青緑色		

第7表 漆製品計測表

報告番号	出土地点	種別	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	*( )内の数値は現状値	
								( )	( )
27	第5号古墳 SK5-1	漆鏡	(2.1)	(2.3)	(0.2)	(0.27)	漆鏡のみ残存		

第8表 古鉢計測表

\*( )内の数値は現状値

報告番号	出土地点	種別	直徑(cm)	重量(g)	備考	
					( )	( )
54	第5号古墳 D面基部間	天板通寶	2.63	(2.16)	切跡1017年。	
55	第4号古墳外 南西側尾根 表面探査	寛永通寶	2.32	2.01	新寛永?	
56	第4号古墳外 南西側尾根 表面探査	寛永通寶	2.28	2.46	新寛永(背元No.164)	

## VI まとめ

箱山第3～6号古墳の調査の結果、第3号古墳は横穴式石室を主体と推定される円墳、第4号古墳は箱式石棺を主体とする楕円形状の円墳、第5号古墳は箱式石棺を主体とする葺石をもつ方墳、第6号古墳は組合式木棺を主体とする方墳であることが確認された。ここでは、古墳時代前期・中期の第4～6号古墳と古墳時代後期の第3号古墳に分け、それぞれの墳丘・埋葬施設・出土遺物について検討し、まとめとしたい。

### 1 第4～6号古墳について

#### (1) 墳丘について

ここでは第5号古墳を中心に、方墳・葺石・墳丘構築法についてみていく。

方墳 広島県内の方墳の分布状況は次のとおりである。県内で確認されている古墳の総数は11,231基とされ<sup>①</sup>、そのうち、遺跡地図や各報告書などで確認した方墳は146基(約1.3%)である(第14表)。その大まかな分布状況は第9表のとおりで、備後北部が約43%を占め、他の3地域が14～26%である。市町別では三次市(44基)が最も多く、次いで広島市(25基)、庄原市(19基)、福山市(14基)などである。各地域における古墳全体に対する方墳の割合は備後地域が約1.0%(北部約1.1%、南部約0.6%)、安芸地域が約2.4%(北部約1.8%、南部約3.0%)であり、安芸南部がやや高く、備後北部はやや低い。なお、第14表をみると、一つの古墳群に方墳が2基以上共存する例が多く、三次市淨樂寺古墳群(17基)、同市四拾貫向山古墳群(7基)、広島市城ノ下古墳群(7基)など特定の古墳群に集中する傾向がある。

県内の方墳の概要をみると、規模は20m以上のものが4基(約3%)、15m以上で20m未満のものが16基(約9%)、15m未満のものが123基(約87%)であり、総じて小規模のものが多い。周溝または溝を伴う例は全般的に多い。外表施設は墳丘に葺石を伴う例(三次市箱山第5号古墳・

第9表 广島県内の方墳の分布状況

現在の市町名	基数(%)	旧市町村名	基数(調査数)	現在の市町名	基数(%)	旧市町村名	基数(調査数)
安芸高田市 (1,025基)	9(6.2%)	高宮町	3(0)	庄原市 (1,513基)	19(13.0%)	庄原市	14(3)
		八千代町	4(3)			東城町	3(2)
		向原町	2(1)			高野町	1(0)
北広島町 (331基)	10(6.8%)	千代田町	9(5)			口和町	1(0)
		豊平町	1(0)	三次市 (4,003基)	44(30.1%)	三次市	36(5)
安芸太田町 (23基)	6(4.1%)	筒賀村	6(6)			三良坂町	6(0)
		安芸北部地域(約17%)	25(15)			吉舎町	1(0)
						吉舎町	1(1)
						備後北部地域(約43%)	63(11)
現在の市町名	基数(%)	旧市町村名	基数(調査数)	現在の市町名	基数(%)	旧市町村名	基数(調査数)
東広島市 (708基)	11(7.5%)	田原町	6(6)	福山市 (903基)	14(9.6%)	田福山市	13(13)
		内町	1(0)			新市町	1(0)
		豊栄町	4(0)	府中市 (329基)	5(3.4%)	府中市	4(4)
広島市 (416基)	25(17.1%)	安佐南区	2(2)			上下町	1(0)
		東区	1(1)	三原市 (508基)	1(0.7%)	三原市	1(0)
		安佐北区	11(10)			備後南部地域(約14%)	20(17)
		安佐南区	10(10)			備後地域	83(28)
廿日市市 (16基)	2(1.4%)	安芸区	1(1)			広島県全体(11,231基)	146(73)
		佐伯町	2(0)				
		安芸南部地域(約26%)	38(30)				
安芸地域			63(45)				

\*1 現在の市町村の( )は各市町内所在の古墳全体の基数

\*2 基数欄の(%)は県全体の方墳146基に対する割合

三次市淨楽寺第61号古墳・三原市ひじり塚第1号古墳), 貼石を伴う例(安芸高田市新宮第2号古墳・東広島市槇ヶ坪第2号古墳), 石列を伴う例(三次市久々原第9号古墳)が1~3例みられ、県北部に偏っている。埋葬施設は箱式石棺(29か所), 土坑(26か所), 木棺(21か所)が比較的多く、箱式石棺は各地域で万遍なくみられ、木棺・土坑は安芸南部でよくみられる。竪穴式石室(5か所), 石蓋土坑(4か所), 横穴式石室(6か所)は少ない。副葬品は農工具(刀子・鏟・鉄斧・鐵鎌・鋤先), 武器(鉄刀・鉄劍・鉄鉢・槍・鉄鎧)が全域で散見され、刀子が備後北部以外の地域で、鉄鎧が安芸北部以外の地域でよくみられる。一方、銅鏡や玉類は少ない。なお、須恵器・土師器は古墳周辺からの出土例が散見される。

近畿の状況をみると、山陰地方では弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓がなくなった後、古墳時代初頭頃になると葺石などの外表施設のない方墳が一斉に採用される<sup>(2)</sup>。また、岡山県津山盆地では前期・中期において方墳が中心的な墳墓で、多くは群をなしている<sup>(3)</sup>。このように山陰地方や津山盆地において前期・中期では方墳が中心的であったようである。

備後北部の状況をみると、方墳は少数で、円墳が圧倒的に多い。三次市内では方墳を44基確認したが、三次市内の古墳の総数4,003基<sup>(4)</sup>の中での方墳の割合は約1.1%であり、県内全体の割合(約1.3%)より低い。ただ、方墳の割合が多い古墳群がいくつかみられる。淨樂寺・七ツ塚古墳群では176基のうち方墳が19基(約11%)<sup>(5)</sup>、四拾貫向山古墳群では26基のうち方墳は7基(27%)である(因みに、本古墳群は9基のうち方墳は2基以上で、22%以上を占めることになる。)。埋葬施設は三次市内での調査例5例のうち4例の中心埋葬が箱式石棺である。なお、庄原市内での調査例4例の中心主体は木棺あるいは土坑であり、埋葬施設については三次市内と庄原市内では対照的な様相を示している。

葺石 第5号古墳は2段築成で、葺石は上下各段にあり、各段とも基本的に同様の構造である。すなわち、基底石は各段の裾部に大きめ角礫を縦長にして並べ、墳丘に斜めに貼り付けるように据えている。その基底石の上に小さめの角礫を主に横方向にして積み上げている。このような葺石の構造は廣瀬覚氏の分類のB2類に該当するようである<sup>(6)</sup>。本古墳周辺での葺石を持つ古墳は向江田町瀬戸越南古墳<sup>(7)</sup>、同町下山手第4号古墳<sup>(8)</sup>、同町宮の本第24・25号古墳<sup>(9)</sup>、三良坂町稻荷山A-第1号古墳<sup>(10)</sup>・同町稻荷山D-第2号古墳<sup>(11)</sup>などがある。例示した7例のうち、方墳は本古墳だけであり、その他は円墳である。また、葺石が2段のもの(瀬戸越南古墳・下山手第4号古墳・本古墳)と1段のものがある。中心埋葬は竪穴式石室・木棺・箱式石棺など多様である。葺石の構造は報告書から稻荷山A-第1号古墳以外はB2類とみられる。廣瀬氏はB2類を含む「B類の葺石が中国地方の山間部から近畿西・北部にかけて広く散見される」とし、「B類の成立には中国地方を中心に発達をとげた弥生墳丘墓の貼石との関係を想定せざるを得ない」と述べている<sup>(12)</sup>。本古墳周辺においても弥生墳丘墓の影響を受けた構造の葺石が前期・中期の古墳に施されたようである。

なお、本例では基底石の上に横方向に積みあげた小礫の中に、棒状の礫を縦方向に積む様子が一定間隔で部分的にみられた。その間隔は上段では0.7~1.2m程度、下段では1~1.5m程度で

ある。東広島市三ツ城第1・2号古墳では「幅約1.4～1.7m間隔で縦方向に石を並べ区画線を形成し、その間に10～50cmの石を敷き詰めている」と報告され<sup>(13)</sup>、宮の本第24号古墳でも幅1～2m程度の「葺石の基礎単位」があり<sup>(14)</sup>、本例も同様の状況と思われる。

**墳丘構築法** 第5号古墳では墳丘の中にいわゆる「ドーナツ状の盛土」がみられ、青木敬氏が「西日本の工法」<sup>(15)</sup>と呼ぶ方法で墳丘が構築されている。同様の構築方法は宮の本第21・22号古墳<sup>(16)</sup>、稲荷山A-第1号古墳<sup>(17)</sup>、稲荷山D-第2号古墳<sup>(18)</sup>などでみられる。註<sup>(11)</sup>の文献では「備後北部地方では…5世紀～6世紀前半代の古墳に多く採用されたものと考えられる。」とされており、本古墳周辺においてもこの工法が行われていたようである。

## (2) 埋葬施設について

第4～6号古墳では12基の埋葬施設（箱式石棺6基・石蓋土坑5基・組合式木棺1基）を検出した。本古墳群から約700m東にある下山手第4・5号古墳<sup>(19)</sup>など周辺地域の様相を参考にしながら埋葬施設の状況をみていく（第2・10表）。

**中心埋葬・従属葬** 埋葬施設を中心埋葬と従属葬に分けてみると第10表のとおりになる。第4・5号古墳は中心埋葬が箱式石棺で、従属葬の箱式石棺や石蓋土坑を伴う。第6号古墳は中心埋葬が組合式木棺で、従属葬の箱式石棺を伴う。このように、第4・5号古墳と第6号古墳では埋葬施設の様相が異なる。また、前者が下山手第5号古墳と、後者が下山手第4号古墳とそれぞれ似た点があり、埋葬施設の形態に関して近在の古墳群同士で似た様相がみられる。

**主軸方向・頭位** 各形態の埋葬施設の頭位についてグラフ化してみた（第34図）。頭位はN50°W～N136°Eの範囲に入り、大きく3方向に分かれる。すなわち、①北東方向（N36°E～N72°E）5基、②南東方向（N102°E～N136°E）5基、③北西方向（N50°W～N40°W）2基である。

第10表 中心埋葬・従属葬別の埋葬施設一覧

古墳名	中心埋葬	墳頂部の従属葬	墳裾の従属葬
箱山第4号古墳 (円墳)	SK4-1 (大型の箱式石棺) …平行 (赤色顔料) (ガラス製小玉4点)	SK4-2 (小型の箱式石棺) …平行 SK4-3 (小型の石蓋土坑) …直交	
箱山第5号古墳 (方墳) (葺石)	SK5-1 (大型の箱式石棺) …平行 (赤色顔料・粘土枕・礫床) (施1点・鉄鍛1点・堅柳1点)	SK5-2 (大型の箱式石棺) …直交 SK5-3 (小型の石蓋土坑) …平行	SK5-4 (小型の石蓋土坑) …直交 SK5-5 (小型の石蓋土坑) …直交 (石製勾玉3点・石製目玉4点) SK5-6 (小型の石蓋土坑) …斜交
箱山第6号古墳 (方墳)	SK6-1 (大型の組合式木棺) …直交	SK6-2 (小型の箱式石棺) …平行 SK6-3 (小型の箱式石棺) …直交	

(参考)

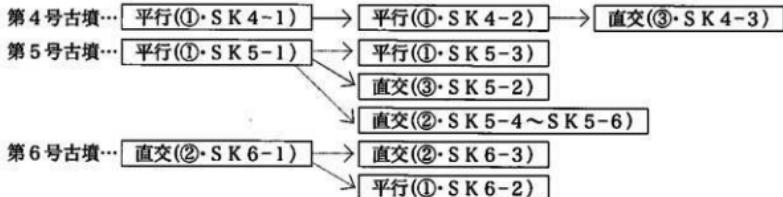
古墳名	中心埋葬	墳頂部の従属葬	墳丘斜面・墳裾の従属葬
下山手第5号古墳 (方墳)	SK1 (大型の箱式石棺) …平行 (赤色顔料) (施1点・鉄鍛1点)		SK4 (大型の石蓋土坑) …直交
	SK2 (大型の箱式石棺) …平行 (粘土枕)		
	SK3 (大型の箱式石棺) …直交 (赤色顔料)		
下山手第4号古墳 (円墳) (葺石)	SK1 (大型の組合式木棺) …直交 (小玉2点)	SK2 (小型の箱式石棺) …平行	SK3 (大型の石蓋土坑) …斜交 SK4 (大型の石蓋土坑) …直交 SK5 (大型の石蓋土坑) …平行

\* 表内の「平行」は尾根に並行するもの、「直交」は尾根に直交するもの、「斜交」は尾根に対して斜めになるもの

このうち、②と③は主軸方向でみるとほとんど同一方向（北西-南東方向）を指向している。このことから、主軸方向は北東-南西方向（①）と北西-南東方向（②+③）の大きく2方向に分かれる。尾根線がほぼ北東から南西方向に延びることから、北東-南西方向（①）は尾根線とほぼ平行する方向（以下、「平行」という）に、北西-南東方向（②+③）は尾根線とほぼ直交する方向（以下、「直交」という）になる（なお、SK5-6は尾根線に対して斜めの方向であるが、直交に近いため、ここでは直交に含める）。平行（①）

には箱式石棺4基、石蓋土坑1基があり、いずれも墳頂部に位置する。このうち、箱式石棺2基は第4・5号古墳の中心埋葬である。直交（②）には組合式木棺1基、箱式石棺1基、石蓋土坑3基がある。このうち、組合式木棺と箱式石棺は第6号古墳の墳頂部に位置し、組合式木棺は第6号古墳の中心埋葬である。一方、石蓋土坑はいずれも第5号古墳北東側の溝内に位置する。直交（③）には箱式石棺1基、石蓋土坑1基があり、いずれも墳頂部に位置する。

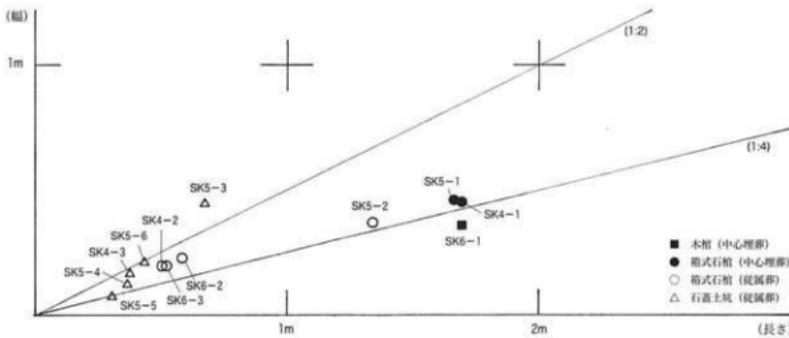
以上の主軸方向・頭位と埋葬施設の新旧関係を組み合わせると次のようになる。



このように、主軸方向が第4・5号古墳では基本的に平行→直交に変化し、第6号古墳では直交→直交及び直交→平行に変化しており、第4・5号古墳と第6号古墳では主軸方向の変化の様子が異なる。なお、前者が下山手第5号古墳と、後者が下山手第4号古墳とそれぞれの変化の様子が似ており、主軸方向についても前述の埋葬施設の形態と同様の傾向がみられる。

**埋葬施設の規模** 各形態の埋葬施設の規模（長さ×幅）についてグラフ化した（第35図）。箱式石棺6基の内法は次の2つに分かれる。すなわち、大型のもの（長さ134～170cm、幅37～45cm、以下、「i型」という。）が3基、小型のもの（長さ50～58cm、幅19～22cm、以下、「ii型」という。）が3基である。i型のうち2基は第4・5号古墳の中心埋葬である。なお、i型は下山手第4・5号古墳の大型の箱式石棺（長さ168～173cm、幅32～41cm）3基と、ii型は下山手第4・5号古墳の小型の箱式石棺（長さ52cm、幅25cm）1基とそれぞれ同規模である。

石蓋土坑5基の規模は土坑下端の長さが30～67cm、幅が8～45cmであり、ii型の内法に近い。なお、本古墳群の石蓋土坑に比べて、下山手第4・5号古墳の石蓋土坑4基（長さ131～



第35図 第4～6号古墳埋葬施設の規模(長さ×幅)

166cm・幅37～45cm)はかなり大きい。

組合式木棺1基の内法は長さ170cm、幅35cmで、i型の規模に近い。なお、本例に比べて下山手第4号古墳の組合式木棺SK1(長さ145cm・幅39cm)はやや小さい。

このように埋葬施設の規模は大きく2つに分かれそうである。また、石蓋土坑以外の埋葬施設は下山手第4・5号古墳の埋葬施設とそれぞれ近い数値である。

**箱式石棺の構造** 箱式石棺6基の石材の組み方や立て方にについてみていく(第2・11表)。小口石と側石の組み方は頭位では4種類(a・b・d・f類)があり、多様である。一方、足位では2種類(a・b類)があり、第4号古墳の2基がa類、第5・6号古墳の4基がb類である。中心埋葬2基は様子が異なり、従属葬4基も多様である。なお、下山手第4・5号古墳の箱式石棺4基の組み方も多様であり、本古墳群と似ている。

石材の立て方にについて、小口石は主に縱長であるが、従属葬の2基が横長をしている。側石も主に縱長である。中心埋葬の2基の側石はほとんど縱長である。SK4-1の頭位の両側石と足

第11表 箱式石棺の属性

古 墳 名	遺構 番号	(規模)	石材の組み方		小口石		左側石*		右側石*		備 考		
			頭位	足位	頭位	足位	枚数	縦長	横長	枚数	縦長	横長	
箱山第4号古墳	SK4-1	(大型)	a類	a類	縦長	縦長	5	4	1	5	3	2	中心埋葬
箱山第5号古墳	SK5-1	(大型)	f類	b類	縦長	縦長	6	6	-	5	4	1	中心埋葬
					(小計)		11	10	1	10	7	3	
箱山第4号古墳	SK4-2	(小型)	b類	a類	横長	縦長	2	1	1	3	1	2	従属葬
箱山第5号古墳	SK5-2	(大型)	a類	b類	縦長	縦長	4	2	2	5	5	-	従属葬
箱山第6号古墳	SK6-2	(小型)	a類	b類	縦長	縦長	3	3	-	4	3	1	従属葬
	SK6-3	(小型)	d類	b類	横長	縦長	2	0	2	2	0	2	従属葬
					(小計)		11	6	5	14	9	5	

(参考)

古 墳 名	遺構 番号	(規模)	石材の組み方		小口石		左側石		右側石		備 考		
			頭位	足位	頭位	足位	枚数	縦長	横長	枚数	縦長	横長	
下山手第5号古墳	SK2	(大型)	d類かf類	d類	縦長	縦長	6	6	-	6	6	-	中心埋葬
	SK2	(大型)	d類かf類	d類	方形か	縦長	6	6	-	6	6	-	中心埋葬
	SK3	(大型)	c類か	e類か	縦長	縦長	4	3	1	4	1	3	中心埋葬
下山手第4号古墳	SK4	(小型)	a類	a類かe類	縦長	横長	2	1	1	3	3	-	従属葬
					(小計)		18	16	2	19	16	3	

\* 本書では、足位から頭位に向けて左側の側石を「左側石」、右側の側石を「右側石」とする。

位の右側石が横長であるのに対し、SK 5-1 の足位の右側石だけが横長であり、頭位での側石の立て方が異なっている。従属葬の4基の側石はある程度の割合で横長がみられる（左側石で5／11、右側石で5／14）。このうち、SK 6-3 はすべて横長で特異である。また、ほかの3基のうち、2基は頭位の側石を横長にしている。なお、下山手第4・5号古墳も小口石・側石ともほとんど縦長である。このうち、下山手5号古墳SK 3 は頭位の右側石が横長であり、第4号古墳SK 4-1 に似ている。また、下山手4号古墳SK 2 は足位の小口石や側石の一部が横長であり、本古墳群の従属葬に似た点がある。

箱式石棺の内部 箱式石棺の内部で砾床・粘土枕・赤色顔料の塗布を確認した（第2・10表）。

砾床はSK 5-1・SK 5-2で検出した。周辺では向江田町椎現第2号古墳SK 1<sup>(20)</sup>、同町宮の本第21・23～25号古墳SK 21-1・SK 23-1・SK 24-2・SK 25-1<sup>(21)</sup>で検出されており、いずれも中心埋葬である。なお、砾床がある箱式石棺を伴う古墳は山陰地方をはじめ西日本で広く確認されているようである<sup>(22)</sup>。

粘土枕もSK 5-1・SK 5-2で検出した。周辺では下山手第5号古墳SK 2、宮の本第21～23・25号古墳SK 21-1・SK 22-1・SK 23-1・SK 25-1などで検出されており、いずれも中心埋葬である。

石棺内側での赤色顔料の塗布はSK 4-1・SK 5-1・SK 5-2で確認した。周辺では下山手第5号古墳SK 1・SK 3、宮の本第21～24号古墳SK 21-1・SK 22-1・SK 23-1・SK 24-1・SK 24-2などで検出されており、いずれも中心埋葬である。

このように、4世紀末から5世紀中葉頃を中心に、本古墳群を含む周辺の古墳で中心埋葬の箱式石棺の内部で砾床・粘土枕・赤色顔料の塗布などが共通してみられる。

### （3）出土遺物について

#### ①埋葬施設の副葬品

中心埋葬の副葬品はSK 4-1 でガラス製小玉4点、SK 5-1 で鉈・鐵鎌・堅櫛各1点がある。従属葬の副葬品はSK 5-5 で石製勾玉3点・石製白玉5点がある。ここでは、鉈・鐵鎌・堅櫛・玉類についてみていく。

鉈 鉈（25）は刃部先端から茎部にかけて緩やかに幅が広がる形態で刃部が短いことから、古瀬清秀氏の分類の「I a類」に該当するとみられる<sup>(23)</sup>。I a類は弥生時代から続き、古墳時代を通してみられるようである。寺沢知子氏によると、鉈の前期古墳からの出土率は刀子・袋状鉄斧とともに他の農工具に比べて高いようである<sup>(24)</sup>。また、農工具の出土傾向を「I型」・「II型」に設定し、出土状況によりそれぞれa類（棺外副葬）・b類（棺内副葬）に分けている<sup>(25)</sup>。本例の出土状況はI種類の農工具の副葬で棺内副葬であることから「II b型」になる。

備後北部での前期・中期の古墳からの鉈の出土例は7か所である（第12表）<sup>(26)</sup>。古墳からの出土率が高いとされる刀子・袋状鉄斧・鉈のうち、刀子の出土例は備後北部で28か所であり<sup>(27)</sup>、刀子に比べ鉈の出土例は少ない。三次市内では6か所の古墳から出土し、三次市東部及び東南部に

分布する。副葬する古墳の墳形や埋葬施設の形態は多様である。出土点数は1～4点で、1点の出土が多い。鉢の形態は報告書をみるとIa類・IIa類が多いようである。共伴する遺物は農工具・武器・玉類など多様であるが、いずれも鉄鏃と共に伴しており、備後北部では鉢と鉄鏃の共伴関係が強いようである。

なお、三次市東部の3か所（上四拾貫第6号古墳・下山手第5号古墳・本例）で鉢と鉄鏃がまとまって出土している。本例の場合、鉢と鉄鏃は接しており、堅櫛と1～2cm程離れている。本例の蓋部に布目が付着していることから、鉢と鉄鏃は一緒に布巻きにして副葬した可能性があり、堅櫛も布巻の内側に入れたか布巻の外側に置いたものと思われる。因みに、副葬品に布目が付着する類例は庄原市御堂西第2号古墳<sup>(28)</sup>・安芸太田町横路小谷第1号古墳<sup>(29)</sup>・広島市須賀谷第1号古墳<sup>(30)</sup>・同市恵下第1号古墳<sup>(31)</sup>などがあり、副葬品を布巻にしておさめたと思われる古墳が県内各地でみられる。

また、本例では蓋部が緩やかに曲がっている状態であるが、このような状態については副葬の際に意図的に折り曲げられた可能性が指摘されている<sup>(32)</sup>。県内の類例は安芸高田市新宮第2号古墳<sup>(33)</sup>などがあり、中国山地や山陰地方において前期・中期の方墳への鉢の副葬に際して同じような行為が行われたようである。

鉄鏃 鉄鏃（26）は杉山秀宏氏の分類の「片刃鏃群」のB形式（通有の長身化する片刃鏃）・第I形式（逆刺の無いもの）に該当するとみられる<sup>(34)</sup>。県内での前期・中期の古墳からの鉄鏃の出土例は61か所で<sup>(35)</sup>、三次市内では14か所の古墳から出土しており、三次市東部及び東南部に分布している（第12表）。出土する古墳は円墳が多く、埋葬施設の形態は多様である。出土点数は1～38点で、1～7点と少量の副葬と、22～38点の多めの副葬の2通りがある。鉄鏃の形態は多様で、片刃形の鉄鏃も數か所でみられる。共伴する遺物は多様で、武器との共伴が多く、農

第12表 備後北部の古墳出土の鉢・鉄鏃（主に前期・中期）

番号	所在地	古墳名	墳形	埋葬施設	鉢	鉄鏃	その他の副葬遺物	文献
1	三次市	島敷町	太郎丸古墳	円墳	磐穴式石室	2	38 銅鏡、铁刀、鐵劍、刀子、鐵鏡、玉、類など	1
2	三次市	四拾貫町	四拾貫小原第19号古墳 (旧第1号古墳)	円墳	C主体・削竹形木棺(粘土卯)	-	23 鐵劍、鐵鏃、鐵斧	2
3	三次市	四拾貫町	上四拾貫第6号古墳	円墳	組合式木棺	4	22 須恵器、土師器、鐵劍、刀子、袋狀鐵斧	3
4	三次市	四拾貫町	上四拾貫第10号古墳	円墳	B主体・箱式石棺	-	2 鐵刀	3
5	三次市	向日町	箱第5号古墳	方墳	SK5-1・箱式石棺	1	1 堅櫛	本書
6	三次市	向日町	下山第5号古墳	方墳	SK1・箱式石棺	1	1	4
7	三次市	向日町	宮の前第21号古墳	円墳	SK21-1・箱式石棺	-	1 鐵鏃、鐵斧	5
8	三次市	大田幸町	上定第25号古墳	円墳	磐穴式石室	-	4 鐵刀	6
9	三次市	西瀬戸町	酒匂高塚古墳	帆立貝形古墳	1号主体・磐穴式石室	-	4 刀子、鍬先、鐵斧、鐵釘、鐵石	7
10	三次市	三良坂町	寺山第1号古墳	円墳	土坑	-	7 鐵刀	8
11	三次市	吉舎町	大番池第2号古墳	円墳	SK1・木棺	-	3 鐵鏃、刀子	9
12	三次市	吉舎町	大番奥池第3号古墳	円墳	SK4・土坑	-	4 鐵刀	9
13	三次市	吉舎町	大番池第7号古墳	円墳	SK1・土坑	1	7	9
14	三次市	吉舎町	三玉大塚古墳	帆立貝形古墳	磐穴式石室	2	4 鏡、筒形剣器、刺突具、刀子、矛、石突、馬具、鍬先、短甲、玉類	10
15	庄原市	板橋町	大塚古墳	円墳	木棺(土坑)	-	6 鐵劍、刀子	11
16	庄原市	市町	一の谷第6号古墳	円墳	木棺？(土坑)	-	9 須恵器	12
17	庄原市	東城町	大塚第2号古墳	円墳	木棺(土坑)	-	3 鐵刀、刀子など	13
18	庄原市	東城町	大泊山第1号古墳	前方後円墳	磐穴式石室	1	28 鏡、筒形剣器、刺突具、鐵劍、鐵刀、鐵槍、鐵手斧、尖筒、玉類	14

工具との共伴もよくみられる。一方、玉類・鏡・堅櫛などとの共伴は少ない。

堅櫛 堅櫛（27）は前述のとおり鉈・鐵鎌の直近で出土したが、その位置は箱式石棺の西小口近くの北西側石寄りで、脚部と想定される。川村雪絵氏の分類では「脚位型」に属し、全国的にみると少なく「例外的な行為ととらえるべき」例とされる<sup>(36)</sup>。

堅櫛は県内では東広島市三ツ城第1号古墳（4点）<sup>(37)</sup>・福山市龜山第1号古墳（17点）<sup>(38)</sup>・三次市下矢井南第4号古墳（5点）<sup>(39)</sup>・同市善法寺第1号古墳（8点）<sup>(40)</sup>及び本例（1点）の合計5か所（35点）で出土している。いずれも埋葬施設からの出土で、円墳の粘土櫛からの出土が多く、本例のような方墳の箱式石棺からの出土は県内では稀である。川村氏の集成によると、方墳からの出土例は京都府北部から鳥取県・岡山県北部にかけての日本海地方及び中国山地に点在しており、中国山地の一部である備後北部においても似た傾向があるかもしれない。

玉類 ガラス製小玉4点（19～22）は直径4.6～5.6mm・長さ3～5.1mmで、青緑色系3点・濃紺色系1点である。大きさは古墳時代を通して直径5mm・長さ3～4mmのものがよくみられ、中期には直径2～3mmの小型が増えるようあり<sup>(41)</sup>、本例は概ね前者に該当する。色調は前期は青色・紺色が主体で、中期に青色・紺色に加えて黄色・黄緑色・オレンジなど多彩なものも出てくるようであり<sup>(42)</sup>、本例は前期の可能性がある。県内での前期・中期の古墳からのガラス製小玉の出土例は51か所で<sup>(43)</sup>、備後北部では16か所である（第13表）。備後北部では出土する古墳は円墳が多く、埋葬施設は多様である。出土点数は10点未満が4か所（太郎丸古墳・下山手第4号古墳・野稻南第11号古墳及び本例）、10点以上が12か所（川西第1号古墳の「多数」を含む）であり、10点以上の出土例が多い。他の玉類との共伴例は12か所であり、他の玉類と共に伴しない例は三次市内の4か所（太郎丸古墳・下山手第4号古墳・茶臼古墳及び本例）である。このように、本古墳群の周辺ではガラス製小玉の出土点数が少ない古墳や他の玉類との共伴がない古墳がいくつかみられる。

なお、本例は石棺中央部の南側石寄りに集まって出土した。その出土位置は被葬者の左手の部分にあたることから、被葬者の左手につけた状態で埋葬された可能性がある。玉城一枝氏は「玉を連ねた腕輪を「手玉」とされ、「古墳時代の手玉は…両手に着装することが多く、『片方の腕だけに着ける場合は…左手の方が多い』という傾向がある」とされており<sup>(44)</sup>、本例はこのケースに該当すると思われる。手玉の長さは、前期ではほとんど一連<sup>(45)</sup>で、中期に二連以上が増えるようである。本例は出土点数が4点であり、一連とみられる。なお、古墳時代の手玉は日常的には主に女性が着用するようであるが、埋葬に伴う手玉には呪的な意味があると考えられ、手玉を着用する被葬者の男女の区別はみられないようである。このことから、副葬品のガラス製小玉からは本例の被葬者の性別は明らかにできない。

石製勾玉3点（28～30）は最大長1.06～1.37cm、厚さ0.25～0.33cmで扁平な小型品である。県内での前期・中期の古墳からの出土例は45か所で<sup>(46)</sup>、備後北部では17か所である（第13表）。備後北部では出土した古墳は円墳が多く、埋葬施設の形態は多様である。出土点数はいずれも1～5点の範囲に入り、1点の出土例が多い。他の玉類との共伴例は川西第4号古墳以外の16か所

であるが、本例のような白玉との共伴例は4か所（権現第3号古墳・三玉大塚古墳・御堂西第2号古墳及び本例）にとどまる。

石製白玉5点（31～35）は、側面の形状についての篠原祐一氏の分類では、31・32は側面に稜があるA類、33～35は側面に稜はみられないが膨らみをもつB類に該当するようである<sup>(47)</sup>。このことから、A類とB類が共存する時期は5世紀前葉の可能性が高い。県内での前期・中期の古墳からの白玉の出土例は10か所で<sup>(48)</sup>、備後北部では5か所である（第13表）。備後北部では出土した古墳は円墳3基・方墳1基・帆立貝形古墳1基である。埋葬施設の形態は多様である。なお、県内では総じて大型の埋葬施設への副葬であるのに対し、三次市内の3か所（権現第2・3号古墳例及び本例）では長さ30～60cmほど小型の箱式石棺や石蓋土坑への副葬であり、やや特異な様相である。出土点数は備後以外の県内では9～144点の範囲であるのに対し、備後北部では4～20点の範囲であり、備後北部で少ない傾向がある。他の玉類との共伴例は5か所であり、このうち、勾玉との共伴例は4か所、管玉との共伴例は2か所である。

第13表 備後北部の古墳出土のガラス製小玉・石製勾玉・石製白玉（主に前期・中期）

番号	所在地	古墳名	墳形	埋葬施設	ガラス製小玉	勾玉	白玉	その他の玉類	その他の副葬遺物	文献
1	三次市 島敷町	太郎丸古墳	円墳	堅穴式石室	1				銅鏡、鉄刀、鉄劍、刀子、泡池、鐵鍊など	1
2	三次市 四拾賀町	四拾賀第9号古墳	円墳	A主体・木棺（粘土卯）	100	1	管玉1		銅鏡など	1
3	三次市 四拾賀町	四拾賀小原第19号古墳 (船形1号古墳)	円墳	B主体・木棺（粘土卯）	388	4	石製小玉1614、算盤玉4	鉄刀、刀子	2	
4	三次市 向江田町	施現第2号古墳	円墳	SK1・箱式石棺		16	管玉1	鍾		15
5	三次市 向江田町	施現第2号古墳	円墳	SK4・箱式石棺		1	管玉2	刀子		15
6	三次市 向江田町	施現第3号古墳	円墳	SK1・箱式石棺		1	20	玉126	刀子	15
7	三次市 向江田町	施現第3号古墳	円墳	SK2・箱式石棺		3	管玉21、有孔盾 円形玉1			15
8	三次市 向江田町	船山第4号古墳	円墳	SK4-1・箱式石棺	4					本書
9	三次市 向江田町	船山第5号古墳	方墳	SK5-5・石蓋土坑		3	5			本書
10	三次市 向江田町	野船南第11号古墳	円墳	第2号主体部・木棺（土坑）	1		管玉4、土製小玉5ほか			16
11	三次市 向江田町	下山手第4号古墳	円墳	SK1・組合式木棺	ガラス製か2					4
12	三次市 大田幸町	細原第16号古墳	円墳	土坑	25		管玉ほか			1
13	三次市 大田幸町	上足第27号古墳	円墳	堅穴式石室?	268	3			銅鏡	6
14	三次市 西酒屋町	溝法寺第5号古墳	？	土坑	73	3	管玉12、畫玉2、算盤玉2、平玉2	刀子、須恵器	1	
15	三次市 西酒屋町	酒屋高屋古墳	帆立貝形古墳	第2号主体・堅穴式石室	188	1	滑石製小玉4	鉄劍、鉄釘		7
16	三次市 西酒屋町	大久保第5号古墳	円墳	滑石製木棺（粘土張）			滑石製小玉26	鉄劍、刀子、琴柱形石製品		17
17	三次市 三若町	川西第1号古墳	円墳	箱式石棺	多數		滑石製小玉多數	銅鏡、鉄刀、鉄劍、刀子、毛拔き	1	
18	三次市 三若町	川西第2号古墳	円墳	箱式石棺		1	管玉1、丸玉4	鉄刀、鍾		1
19	三次市 三若町	川西第4号古墳	円墳	箱式石棺		3				1
20	三次市 吉舎町	三玉大塚古墳	帆立貝形古墳	堅穴式石室	117	5	4	管玉1	銅鏡、筒形銅器、劍突具、10 刀子、矛、石斧、馬具、 歯甲、短甲（明治36年に併行 石製白玉353個、滑石製管玉1個出土）	10
21	三次市 吉舎町	寺津第2号古墳	円墳	木棺（土坑）		1	管玉9	刀子、須恵器		18
22	三次市 甲斐町	茶臼古墳	方墳	SK2・箱式石棺	15					19
23	庄原市 板橋町	御堂古第2号古墳	円墳	木棺（土坑）		1	18	銅鏡		20
24	庄原市 上原町	馬立第2号古墳	円墳	堅穴式石室	15	3	管玉2	刀子		21
25	庄原市 東城町	大迫山第1号古墳	前方後円墳	堅穴式石室	21	1	管玉7	銅鏡、筒形銅器、銅鏡、 鉄劍、鉄刀、鉄槍、鉄手 斧など	14	
26	庄原市 東城町	東大仙山第10号古墳	円墳	第1主体・土坑	61	1	管玉9、算盤玉1			22

## ②埋葬施設以外から出土した遺物

第5号古墳周辺から土師器・土製品などが、第6号古墳周辺から土師器・勾玉・管玉などが出士した。ここでは土師器・土製品についてみていく。

土師器 壺（36）は丸底で肩がやや張った球形の体部で、頸部は「く」の字に屈曲する。器形は庄原市原畠遺跡S B 9 出土例（第55図147・第56図155）に類似する<sup>(49)</sup>。ただし、原畠遺跡例は外面のハケ目がほとんど縦方向であるのに対し、本例は横方向のハケ目が多く、本例が若干古い可能性がある。なお、原畠遺跡例（147・155）は原畠遺跡Ⅰ期に属し、Ⅱ期（4世紀後半から5世紀前半）以前と考えられている<sup>(50)</sup>。壺（41）は長円形の体部で、頸部は「く」の字に屈曲する。上記の36よりやや細めの器形だが、36と同様に体部外面中央部は横方向のハケ目が多く、36に近い時期と思われる。壺（42）はやや平底気味で、体部はやや扁平な球形であり、口縁部は長く外傾してのびる。いわゆる直口壺は前期・中期にみられるが、42は薄手で内外面ともつくりが丁寧であり、古い様相と思われる。

土製品 不明土製品（38～40）のうち、38は移動式カマドの底部分、39・40は移動式カマドの裾部の可能性がある。38の大きさは現存幅が約8cmで、幅10数cm程度と推定される。移動式カマドは庄原市宮脇遺跡<sup>(51)</sup>や東広島市助平3号遺跡<sup>(52)</sup>などで出土しており、いずれも幅が40cm程度である。これらに比べると本例は小さいことからミニチュアである可能性がある。ト部行弘氏によると、ミニチュア竈型土器は6世紀から7世紀にかけて近畿地方の横穴式石室を持つ古墳を中心に出土している<sup>(53)</sup>。このことから、本例がミニチュア竈型土器であれば、第5号古墳には伴うものではなく、尾根の上方からの流れ込みの可能性が高い。推測の域を出ないが、本例の出土場所から25m程離れた第3号古墳（横穴式石室が主体）との関係も考えられる。

## ③出土遺物の時期

以上から、出土遺物の時期は次のとおりにまとめられる。ア) SK 4-1 出土のガラス製小玉は、青色系が主である前期の可能性がある。イ) SK 5-1 出土の鉄鎌（26）は中期初頭頃に出現するようである。ウ) SK 5-5 出土の滑石製白玉は5世紀前葉頃の可能性が高いと考えられる。エ) 第5号古墳周辺出土の土師器壺（36）は少なくとも5世紀前半以前とみられる。オ) 第6号古墳周辺出土の土師器壺（41）は上記の36に近い時期とみられる。カ) 第6号古墳周辺出土の石製勾玉・石製管玉は前・中期によくみられるが、勾玉（44）の形態がSK 5-5 出土の勾玉に酷似し、SK 5-5 の時期に近い可能性があり、また、管玉（45）は細形で古い様相である。

## （4）時期・性格について

新旧関係 墳丘や埋葬施設の内容から、次のような古墳間の関係がある。ア) 墳形は第4号古墳が円墳、第5・6号古墳が方墳であり、第5・6号古墳の関係が近い。イ) 中心埋葬は第4・5号古墳が箱式石棺、第6号古墳が組合式木棺であり、第4・5号古墳の関係が近い。ウ) 埋葬施設の主軸方向は、第4・5号古墳の中心埋葬は平行（從属葬は平行+直交）、第6号古墳の中心埋葬は直交（從属葬は直交+平行）であり、第4・5号古墳が似ている。これらのことから、第

5号古墳は第4・6号古墳のどちらとも近い関係があり、時期的に近いと考えられる。また、第4・6号古墳は近い関係の要素があまりみられず、時期的にやや間隔があるようと思われる。この第4・6号古墳の間の時期に第5号古墳が入ると考えられる。

第4・5号古墳の新旧関係は、ア) 第4号古墳が眺望のよい尾根の高い場所を占地していること、イ) 中心埋葬の箱式石棺の構造は似ているが、SK4-1がより丁寧に作っている様子が見られることなどから、第4号古墳（古）→第5号古墳（新）と考えられる。

第5・6号の新旧関係は、ア) 第5・6号古墳の間の溝の切り合い状況から、第6号古墳の周溝が新しいこと、イ) 本古墳群内においては埋葬施設の主軸方向が概ね平行→直交に変化する傾向があり、SK5-1（平行）→SK6-1（直交）と推定されること、ウ) 本古墳群と様相がよく似ている下山手第4・5号古墳における変化[下山手第5号古墳中心埋葬（箱式石棺）→下山手第4号古墳中心埋葬（組合式木棺）]を援用すると、SK5-1（箱式石棺）→SK6-1（組合式木棺）と考えられることなどから、第5号古墳（古）→第6号古墳（新）と考えられる。

以上から、第4～6号古墳の新旧関係は、第4号古墳→第5号古墳→第6号古墳と考えられる。各古墳の時期 第4～6号古墳の遺構からみた時期は次のようにまとめられる（出土遺物の時期は前述のとおり）。ア) 第4号古墳が円墳、第5・6号古墳が方墳で、いずれも前期・中期にみられる。イ) 第5号古墳の墳丘内の「ドーナツ状の盛土」は備後北部では5世紀から6世紀前半代の古墳でよくみられる。ウ) 第5号古墳の葺石は廣瀬氏分類のB2類に該当し、前期中葉から後葉とされる。エ) 埋葬施設は石棺・石蓋土坑・組合式木棺で、いずれも前期・中期にみられる。オ) 第4・5号古墳の箱式石棺内の砾床・粘土枕・赤色顔料の塗布は周辺の古墳では4世紀末から5世紀中葉頃を中心とされる。箱式石棺内の砾床は出雲・石見地方では前期後半から中期前半によくみられる。

以上の遺構・出土遺物の時期から、まず、第5号古墳の時期についてみていくと、上記の遺構の状況をみると概ね前期中葉から中期前半に入りそうである。出土遺物の時期は、中心埋葬の副葬品は中期初頭以後と考えられ、従属葬の副葬品は5世紀前葉の可能性が高い。これらのことから、概ね5世紀前半頃の時期と推定される。

第4号古墳の時期は、中心埋葬出土玉類は前期の可能性があり、新旧関係で第5号古墳に近い時期で第5号古墳より古いとみられることから、概ね4世紀代から5世紀前半頃の可能性がある。

第6号古墳の時期は、古墳周辺出土玉類は5世紀前葉頃に近い可能性があり、新旧関係で第5号古墳に近い時期で第5号古墳より新しいとみられることから、概ね5世紀代の可能性がある。各古墳の性格 第5号古墳の墳形は方墳であるが、方墳は備後北部では古墳全体に対する割合は低い（1.1%）が、山陰地方や津山盆地などと同様に在地性の強い伝統的な形態と考えられる。第5号古墳や周辺地域で散見されるB類の葺石についても弥生墳丘墓の貼石の影響を受けた在地性の強い形態と考えられている。なお、第5号古墳は全面に葺石を施していることから、被葬者は地域の中で比較的優勢な有力者層と考えられる<sup>(54)</sup>。埋葬施設は主軸方位や箱式石棺の形態など、周辺の古墳と類似する点がある。中心埋葬の副葬品は鏡・鉄鎌・堅櫛がある。鏡などの鉄製

農工具の副葬については、寺沢知子氏によると、「首長墓繼承時に農工具を使用した所作儀礼が実施され」、「前期末から中期古墳においては儀礼はよりパターン化したものとなり、…」と記されている<sup>(55)</sup>。鉈の副葬は周辺の古墳でもみられ、ある程度共通した儀礼が行われたようである。なお、鉈・鐵鎌を1か所にまとめて副葬する状況が周辺の古墳でもみられ、また、副葬品を布巻にして副葬する例や鉈を折り曲げて副葬する例が県内や山陰地方で類例がみられるなど、広い範囲で似たような行為が行われていたようである。このように、第5号古墳では墳形（方墳）・外表施設（葺石）から在地的な性格の強い様相がみられ、埋葬施設（主軸方向・構造・磯床・粘土枕・赤色顔料の塗布など）や副葬の際の行為などは周辺地域と共通する様相がみられる。一方、副葬品の儀礼は形骸化しているが、なおも畿内政権の影響がみられる。このことから、第5号古墳の中心埋葬の被葬者は、畿内政権の影響を残す反面、在地性の強い性格を持ち地域の中で比較的優勢な有力層と考えられる。

第6号古墳も方墳であり、第5号古墳と基本的に同様の在地性の強い性格と思われるが、葺石がないことからやや勢力が削がれている可能性がある。また、中心埋葬が箱式石棺→組合式木棺になり、主軸方向も平行→直交へ変化するなど、第5号古墳から変容しているようである。

第4号古墳は円墳であり、方墳と比べて在地的な性格はやや薄いと思われる。ただ、埋葬施設は第5号古墳と基本的に同様であり、第5号古墳につながる立場とみられることから、第4～6号古墳を営む集団を率いる地域の初期の有力層と考えられる。

## 2 第3号古墳について

### （1）墳丘・埋葬施設について

**墳丘** 第3号古墳は直径10m程度、高さ1.6～2.5mの円墳と推定される。周溝は南西側で検出され、幅3.1～3.7mの規模である。墳丘には葺石・列石などの外表施設は確認されていない。墳丘の盛土の工程は次のとおりである。ア) 地山面を掘り込み、側壁・奥壁を構築しながら、掘方内を埋める。イ) 側壁・奥壁を構築しながら、さらに黒色系土と黄褐色系土を積み重ねる。ウ) 天井石を架構しながら、広い範囲で黒色系土と黄褐色系土を積み重ねて墳丘を作る。

**埋葬施設** 埋葬施設は横穴式石室で、片袖式あるいは両袖式と考えられる。玄室は奥行き2.4m程度、幅1.6m程度と推定され、玄室の高さは1.1m以上である。床面の状況は不明だが、江の川流域でよくみられる敷石や土器床を伴う可能性がある。玄室の入り口や羨道は不明確だが、左袖の存在が推定できた。県内の横穴式石室は袖石が有る例は少なく、無袖式が圧倒的に多いようである<sup>(56)</sup>。備後北部では三次市向江田町大仙大平山第22号古墳<sup>(57)</sup>と同市甲奴町塚ヶ迫第1号古墳<sup>(58)</sup>で片袖式の横穴式石室が調査されている。この2例と本古墳を比較すると、玄室の規模は塚ヶ迫第1号古墳が最も大きく、本古墳が最少である。また、「石室の狭長度を示す 玄室幅／玄室長の値」<sup>(59)</sup>は本古墳では0.67、大仙大平山第22号古墳では0.54、塚ヶ迫第1号古墳では0.47であり、塚ヶ迫第1号古墳が最も細長く、本古墳が最も幅広のようである。側壁の積み方は、検出した範囲では基本的に似ている。ただ、基底石は本古墳では不明だが、塚ヶ迫第1号古墳では横長に並

べ、大仙大平山第22号古墳では縦長に並べており、古墳によって異なるようである。奥壁は塚ヶ迫第1号古墳では大きな長方形状の板石を2枚縦長にして並べ、大仙大平山第22号古墳も大きな方形状の板石を2枚縦長と横長にして並べ、それぞれその上にやや小さな石を横積みしている。本古墳の奥壁は検出した範囲では大仙大平山第22号古墳と似ている。このように、本古墳の横穴式石室は約1.2km西側にある大平大仙山第22号古墳の石室の形態や石の積み方等に似た点があり、関係が近いと思われる。

## (2) 出土遺物について

遺物は墳丘外の東側斜面で須恵器の破片が多数まとまって出土したが、これらの破片は接合するものが少なく、横穴式石室から掻き出されて東側の斜面下へ流れ落ちたものと思われる。このほか墳丘周辺で土師器・弥生土器・耳環などが出土した。ここでは須恵器の杯蓋・杯身を中心にみていく。

須恵器 杯蓋の1～5は口径13.5～14cm、器高4cm前後である。1～3の口縁部はやや斜めに開き気味であり、4・5の口縁部はほぼ直立する。口縁端部はいずれも丸く收める。いずれも向田裕始氏編年のII形式第2段階（6世紀第4四半期頃）に該当する<sup>(60)</sup>。杯身の6～10のうち、6～9は口径11.6～12.2cm、10は口径10.6cmで、10がやや小さい。口縁部の立ち上がりは7・10は反り気味であり、その他は直線的である。6が1cm程度立ち上がり、その他は数mm～5mm前後である。6～9は向田氏編年のII形式第2段階（6世紀第4四半期頃）に、10は向田氏編年のII形式第3段階（7世紀前半頃）に該当する。

土師器 壺（17）は西側斜面から出土した。体部上部から口縁部が分厚く、頸部が強く「く」の字に屈曲し、口縁部が短く外反する特異な形態である。この類例として安芸高田市内長見遺跡SB11出土例（第23図24、7世紀前半）がある<sup>(61)</sup>。これは口径11cmで本例（口径16.8cm）より小さいが、形状が酷似しており、時期的に近いと考えられる。

耳環 18は銅芯で銀を貼っており、断面は梢円形である。松本百合子氏によると、この形態は奈良県下では6世紀後半頃によくみられるようである<sup>(62)</sup>。

## (3) 時期・性格について

古墳の時期 出土遺物の時期は、須恵器の杯蓋・杯身は6世紀第4四半期と7世紀前半に分かれることから、第3号古墳は6世紀第4四半期頃に築造され、7世紀前半頃追葬が行われたものと考えられる。

古墳の性格 本古墳の横穴式石室は備後北部では数少ない片袖式あるいは両袖式と推測される。また、本古墳から約1.2km離れた大仙大平山第22号古墳の石室の形態や石の積み方に類似性がみられる。なお、本古墳及び周辺地域において畿内のあるいは外来的な様相がいくつかみられる。すなわち、ア)前述の土師器壺（17）と類似する内長見遺跡SB11出土例は滑石製鋸齒文紡錘車と

共伴しているが、この滑石製鋸歯文紡錘車は畿内の氏族からの配布物と考えられており<sup>(63)</sup>、この土器類を通して畿内的な性格が窺われること、イ)本古墳から南西へ約25mの場所(第5号古墳北東側溝出土)で出土した不明土製品がミニチュア竈形土器の可能性があり、外来的な性格が窺われること<sup>(64)</sup>、ウ)本古墳から約400m東側にある野稻南第9号古墳で出土した瓢形埴(5世紀後半~6世紀前半)<sup>(65)</sup>は特異な形態をしており、これも外来的な性格が窺われることなどが挙げられる。このように本古墳及び周辺地域では他地域とはやや異なる様相がみられる。

以上、9基確認されている箱山古墳群のうち、今回は第3~6号古墳の4基について発掘調査を行った。その結果、第4~6号古墳は前期・中期に相次いで築造され、第3号古墳は後期に築造された古墳であることが分かった。そのなかで、第5号古墳は墳形(方墳)・外表施設(葺石)などから在地的な性格を強く帯びた古墳であること、第3号古墳は畿内的あるいは外来的な性格を持つと考えられる古墳であることなどが明らかとなり、当地域周辺の古墳時代の社会・文化の様相を考える良好な資料が得られた。

#### 註

- (1) 桑原隆博「広島県の古墳～円墳～」『ひろしまの遺跡』第110号 公益財団法人公財広島県教育事業団 2013年 8頁
- (2) 桜山智弘「最後の四隅突出型埴丘墓」『古代文化研究』第18集 島根県古代文化センター 2010年 1~31頁
- (3) 安川豊史「24 古墳時代における美作一群小墳の動向と評価」『吉備の考古学的研究(下)』山陽新聞社 1992年 157~182頁

なお、この文献によると、方墳の内部主体は箱式石棺がほとんどであり、また、方墳の中では埴丘規模の格差や埴丘の外表施設(葺石や埴輪など)の有無などから、階層化がみられるようである。なお、円墳が立地の面や規模の面において方墳よりやや優位であったとされている。

- (4) 註(1)の文献と同じ。
- (5) 植田千佳徳「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群測量調査報告」『広島県立歴史民俗資料館 研究紀要』第4集 広島県立歴史民俗資料館 2003年 24~48頁
- (6) 因みに、浄楽寺古墳群で116基のうち方墳が17基(約15%)、七ツ塚古墳群で60基のうち方墳が2基(約3%)である。
- (7) 次の文献では、B2類は「扁平な石材を貼り付けて基底石とするが、明確な立ち上がりをもたず、裾部から一定の角度で石材を積み上げるもの。」とされ、時期は前期中葉から前期後葉とされている。以下、基石の分類は廣瀬氏の分類による。  
廣瀬寛「⑥基石と段築成」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社 2011年 64~73頁
- (8) 濑戸越南古墳は直径12~13mの円墳で、中心埋葬は箱式石棺である。葺石は2段で、構造はB2類とみられる。5世紀後半から6世紀墳と考えられている。  
財団法人広島県教育事業団「中国自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13) 濑戸越南古墳」2011年
- (9) 下山手第4号古墳は直径約15mの円墳で、中心埋葬は組合式木棺である。葺石は2段で、構造はB2類とみられる。5世紀前半から中葉と推定されている。  
三次市教育委員会「下山手第4・5号古墳—三次市水道事業(第Ⅲ期拡張事業)に伴う埋蔵文化財の発掘調査一」1994年
- (10) 宮の本第24号古墳は直径約30mの3段築成の円墳で、中心埋葬は竪穴式石室及び箱式石棺である。葺石は中段の1段だけ、構造はB2類とされる。なお、下段の埴輪に列石が囲っている。4世紀末墳と考えられている。  
宮の本第25号古墳は直径約16mの円墳で、中心埋葬は箱式石棺である。葺石は1段で、構造はB2類とされる。4世紀末から5世紀中葉頃と考えられている。

財団法人広島県教育事業団『中国自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第20～26・31・32号古墳』2013年

⑩ 桜荷山A-第1号古墳は直径9.8～10mの円墳で、中心埋葬は木棺である。蓋石は1段で、構造はD類とみられる。5世紀後半から6世紀初頭と推定されている。なお、註(6)の文献では、D類は「石材を盛土に埋め込みながら全体を積み上げて行くもの。石材同士が十分に噛み合はず、基底石の大きさも他の石材と明確な区別がない。」とされ、時期は中期から後期初頭にかけて出現するようである。

広島県三次市教育委員会『櫻荷山A-第1号古墳—主要地方道三次庄原線交通安全一種事業に係る発掘調査報告書一』2010年

⑪ 桜荷山D-第2号古墳は直径約10mの円墳で、中心埋葬は土坑である。蓋石は墳丘の一部に1段あり、構造は形骸化したB2類とみられる。6世紀代と考えられている。

三良坂町教育委員会『櫻荷山D-2号古墳—土地改良総合整備事業に伴う発掘調査一』1983年

⑫ 註(6)の文献と同じ。

⑬ 財団法人東広島市教育文化振興事業団『西条中央七丁目 史跡三ツ城古墳発掘調査報告書—史跡三ツ城古墳保存整備事業に係る発掘調査一』2004年

⑭ 註(9)の文献と同じ。

⑮ 次の文献によると、「土手状の盛土を墳丘外周付近にめぐらせ、土手状盛土で囲われた中を盛土する西日本の工法、墳丘中心部に盛り上げた小丘をさらに外側へ拡張する東日本の工法に墳丘構築技術が大きく二分され」るようである。

青木敬『古墳の築造企画と構築技術』『季刊考古学』第106号 雄山閣 2009年 22～26頁

⑯ 註(9)の文献と同じ。なお、宮の本第23・25号古墳は明確ではないが、「西日本の工法に通ずるところがある」とされ、宮の本第24号古墳は東日本の工法と西日本の工法の「折衷的な墳丘構築法と考えることができる」とされている。

⑰ 註(9)の文献と同じ。

⑱ 註(9)の文献と同じ。

⑲ 註(9)の文献と同じ。なお、報告書では、下山手第4号古墳の時期は5世紀前半～中葉。下山手第5号古墳は4世紀末～5世紀初頭とされている。

⑳ 財団法人広島県教育事業団『中国自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）椎原第1～3号古墳』2010年

なお、椎原第2号古墳の時期は「5世紀前半を中心に4世紀に遡る可能性がある」とされている。

㉑ 註(9)の文献と同じ。なお、宮の本第21～25号古墳は4世紀末～5世紀中葉頃と考えられている。

㉒ 次の文献aの「表2 箱式石棺に腰床が伴う古墳一覧」による。なお、出雲地方では古墳時代前期から中期前半に多くみられ、松江市奥才古墳群では前期中葉からみられるようである。また、次の文献bによると、大田市庵寺古墳群では前期後葉以降にみられるようである。

a 赤澤秀則「IV. 小結」「奥才古墳群第8支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査」島根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会 2002年

b 深田浩『庵寺古墳群の調査』『庵寺古墳群と日本海交流 石見東部の古墳時代前期』（講演会資料）島根県埋蔵文化財調査センター 2013年 11～18頁

㉓ 古瀬前秀「古墳出土の施の形態的変遷とその役割」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集一』松崎寿和先生退官記念事業会 1977年 257～270頁

㉔ 寺沢知子「鉄製農工具副葬の意義」『福岡考古学研究所論集』第四 吉川弘文館 1979年 347～373頁

㉕ 註(9)の文献によれば、「I型は刀子・袋状鉄斧・施を基本的なセット主体とし、四種以上の農工具を副葬しているもの」、「II型は二種以下の農工具を副葬したもの」とされている。なお、施の形態の違いによる「I型」・「II型」の明確な差がないようである。

㉖ 第12表のうち、施については各報告書による。鉄鋤については次の文献中の「第6表 広島県内の主な鉄製副葬古墳」及び各報告書による。

財団法人広島県教育事業団『中国自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）大畠奥池第1～3・7

## 号古墳』 2010年

- ④ 註引の文献中の「第16表 広島県内の刀子を出土した主な前・中期古墳」による。
- ⑤ 御堂西第2号古墳（円墳、4世紀末～5世紀中頃）の主体部（組合式木棺）から出土した銅鏡に布目が付着している。布目は粗く、大麻ではないかと思われている。
- 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『御堂西古墳群発掘調査報告—庄原市板橋町・庄原カントリークラブ内所在遺跡の調査一』 1984年
- ⑥ 横路小谷第1号古墳（円墳、5世紀初頭）の第2主体部（桐竹形木棺）から出土した銅鏡・刀子・鍵先に布目が付着している。
- 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（3） 1982年
- ⑦ 須賀谷第1号古墳（円墳、5世紀中頃）周溝内の土坑から重なって出土した鉄鎌・鉄鏟に布目が付着している。
- 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『須賀谷古墳群・豊谷東遺跡発掘調査報告書』 1985年
- ⑧ 恵下第1号古墳（墳形不明、5世紀中頃）の主体部（二重土坑）から出土した銅鏡に布目が付着している。
- 広島県教育委員会『高陽新住宅街市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
- ⑨ 註跡b及び次の文献によると、大田市庵寺第8号古墳（方墳、前期後半～末）の第1主体部（組合式木棺）や松江市奥才第14号古墳（方墳、前期中葉～後葉）の第1主体（箱式石棺）で、鏡の茎部が曲がった状態で出土しており、副葬の際に意図的に曲げられた可能性が指摘されている。
- 島根県鹿島町教育委員会『奥才古墳群』 1985年
- ⑩ 新宮第2号古墳（方墳、4世紀後半）の第1号主体部（箱式石棺）出土の鏡（報告書の第58図63）は、茎部が弯曲しながら、ほぼ直角に折り曲げている。
- 八千代町教育委員会『新宮遺跡群発掘調査報告書』 2000年
- ⑪ 分類については、次の文献aによる。なお、時期について、次の文献aの第4回及び第2表によると、B形式は第I・II形式ともIV期（古墳時代中期初頭頃）に出現し、その後古墳時代中期に長身化するようである。本例は短めであり、古相を示すと思われる。また、水野敏典氏は次の文献bの「図6 古墳時代鉄鎌編年」の中で、「片刃箭式」鉄鎌を中期I・2の時期（図6では4世紀末～5世紀前葉頃）に位置付けている（水野氏は、中期を5期に分けている）。
- a 杉山秀宏「古墳時代の鉄鎌について」『経原考古学研究所論集 第八 創立五十周年記念』吉川弘文館 1988年 529～644頁
- b 水野敏典「I 金属製品の型式学的研究 ⑤鉄鎌」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 2013年 63～71頁
- ⑫ 註跡の文献中の「第6表 広島県内の主な鉄鎌副葬古墳」及び各報告書による。地域別の出土箇所は、備後北部が19か所、備後南部が14か所、安芸北部が4か所、安芸南部が25か所で、安芸南部での出土がやや多い。また、方墳からの出土例は備後北部が2か所、備後南部が5か所、安芸南部が4か所の合計11か所で、県北部の方墳から出土は少ない。
- ⑬ 堅櫛の出土位置についての分類は次の文献による。なお、堅櫛の時期について、次の文献で「堅櫛は古墳時代以降出現し、前期から中期にかけてほぼ全国的に普及するが、後期にはいると消滅してしまう」と述べられている。
- 川村智穎「古墳時代の堅櫛」『國家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集一』大阪大学考古学研究室 1999年 281～306頁
- ⑭ 三ツ城第1号古墳（前方後円墳、5世紀前半）の主体部（二重の箱式石棺）から出土した。
- 広島県教育委員会『三ツ城古墳 広島県文化財調査報告第1輯』 1954年
- ⑮ 亀山第1号古墳（円墳、5世紀前半）の主体部（粘土櫛）から出土した。
- 広島県教育委員会『亀山遺跡—第2次発掘調査概報一』 1983年
- ⑯ 下矢井南第4号古墳（円墳、4世紀末から5世紀初頭）の主体部4基（粘土櫛及び木棺直葬）から出土したほか、小片が数点出土している。
- 財団法人広島県教育事業団『年報5 平成19年度』 2010年
- ⑰ 善法寺第1号古墳（円墳、4世紀後半）の主体部（粘土櫛）から出土した。
- 広島県双三郡・三次市史料叢刊行会『広島県双三郡・三次市史料叢刊』第五篇 1974年

- ⑥ 伊藤雅文「5装身具 C玉類」『古墳時代の研究 第8巻 古墳II 副葬品』雄山閣 1991年 103~116頁
- ⑦ 関川尚功「6玉とガラス」『古墳時代の研究 第5巻 生産と流通II』雄山閣 1991年 101~112頁
- ⑧ 訂正の文献中の「第5表 広島県内の玉・刀子・鎌を出土した主な前・中期古墳」からガラス製小玉を抽出したほか、各報告書から追加した。地域別の出土箇所は、備後北部が14か所、備後南部が12か所、安芸北部が4か所、安芸南部が19か所である。なお、備後北部にはガラス製の可能性がある小玉を出土した下山手第4号古墳を加えている。
- ⑨ 玉城一枝「手玉考」『櫻原考古学研究所論集』第十二 吉川弘文館 1994年 93~124頁  
以下、手玉についてはこの文献による。
- ⑩ 玉城氏は、一連の長さを17.5cmに設定している。
- ⑪ 訂正の文献中の「第5表 広島県内の玉・刀子・鎌を出土した主な前・中期古墳」から勾玉を抽出した。地域別の出土箇所は、備後北部が17か所、備後南部が10か所、安芸北部が3か所、安芸南部が15か所で、ガラス製小玉と分布状況が似ている。
- ⑫ 鷹原祐一「白玉研究私論」「研究紀要」第3号 財団法人橋本木文化振興事業団文化財センター 1995年 17~49頁  
なお、白玉の時期については、A類は4世紀後葉～5世紀前葉、B類は5世紀初頭～後葉とされている。
- ⑬ 訂正の文献中の「第5表 広島県内の玉・刀子・鎌を出土した主な前・中期古墳」から白玉を抽出した。地域別の出土箇所は、備後北部が5か所、備後南部が2か所、安芸南部が3か所で、備後北部が比較的多い。
- ⑭ 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(24) 番久遺跡・原畠遺跡」2013年
- ⑮ 訂正の文献と同じ。
- ⑯ 財団法人広島県教育事業団「宮脇遺跡発掘調査報告書 地域高規格道路江府三次道路(一般国道183号)道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」2004年
- ⑰ 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(II)」1993年
- ⑱ 卜部行弘「11その他 1土製品」『古墳時代の研究 第8巻 古墳II 副葬品』雄山閣出版 1991年 206~217頁
- ⑲ 次の文献のなかで、「全面葺石は前期小墳の中でより有力なものに、部分葺石はより小型のものに用いられたとの想定が妥当であろう。」と述べられている。  
今井亮「第9章 若干の考察 4. 墳丘と葺石」『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会 1984年 67~68頁
- ⑳ 訂正の文献と同じ。
- ㉑ 次の文献の「第2表 発掘調査された広島県内の主要な横穴式石室」に掲載されたデータを参考にした。  
財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳」2007年
- ㉒ 大仙大平山第22号古墳は直径約12mの円墳で、玄室は長さ2.96m(最大)、幅1.6m、高さ1.24mである。6世紀後半～7世紀初めと考えられている。
- ㉓ 三次市教育委員会「大仙大平山第21・22号古墳～市道山家線道路改良工事に伴う発掘調査報告書～」2000年
- ㉔ 塚ヶ迫第1号古墳は直径7.5~8.5mの円墳で、玄室は長さ3.2m、幅1.5m、高さ1.4mである。石室床面に敷石がある。6世紀後半と考えられている。  
甲尻町教育委員会「塚ヶ迫第1号古墳発掘調査報告書」1983年
- ㉕ 訂正の文献と同じ。
- ㉖ 向田裕始「芸備地方における須恵器生産(1)－古墳時代を中心として－」『芸備古墳文化論考』芸備友の会 1985年 131~163頁  
以下、須恵器の編年についてはこの文献による。
- ㉗ 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「内長見遺跡」1992年
- ㉘ 次の文献によると、「奈良県下の例によると、…廟芯金・銀張耳環は、6世紀前半から6世紀後半に多く見られる。断面が…橿円形のものに6世紀前半に遡る例はないようである。」とされている。  
松本百合子「5装身具 B耳飾」『古墳時代の研究 第8巻 古墳II 副葬品』雄山閣 1991年 103~111頁
- ㉙ 中山学「野光谷古墳出土石製鏡齒文鉢縁車について—A類鏡齒文鉢縁車の配布・受容意義を中心に—」『芸備』第37集 芸備友の会 2009年 63~80頁。

- なお、滑石製鋳物文紡錘車の分布域と鳥形須恵器の分布域に重なっており、外来的な要素についても言及されている。
- 脚註の文献によると、「ミニチュア炊飯具を調査する古墳は、渡来系氏族との関連で捉えるのが最も有効」とされている。
- ④ 三次市教育委員会『野福南第8～11号古墳』 2004年

#### 第12～14表の文献

- (1) 広島県双三郡・三次市史料總覽刊行会『広島県双三郡・三次市史料總覽』第五編 1974年
- (2) 四拾貢小原発掘調査団『四拾貢小原』 1969年
- (3) 広島県教育委員会「中國縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (4) 三次市教育委員会『下山手第4・5号古墳—三次市水道事業(第Ⅲ期拡張事業)に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』1994年
- (5) 財團法人広島県教育事業団『中國横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(29) 宮の本第20～26・31・32号古墳』 2013年
- (6) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『大門・上定・殿山』 1987年
- (7) 広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』 1983年
- (8) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(V) 2003年
- (9) 財團法人広島県教育事業団『中國横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大番奥池第1～3・7号古墳』 2010年
- (10) 吉舎町教育委員会『三玉大塚古墳』 1983年
- (11) 広島県教育委員会『大風呂古墳発掘調査概報—庄原カントリークラブゴルフ場造成にかかる—』 1976年
- (12) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『一の谷第6・7号古墳』 1998年
- (13) 大塚古墳群発掘調査団『大塚古墳群発掘調査報告書—広島県比婆郡東城町所在—』 1980年
- (14) 広島県東城町教育委員会・広島大学文学部考古学研究室『広島県比婆郡東城町 大迫山第1号古墳発掘調査概報』1989年
- (15) 財團法人広島県教育事業団『中國横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 横現第1～3号古墳』 2010年
- (16) 三次市教育委員会『野福南第8～11号古墳』 2004年
- (17) 広島県教育委員会「中國縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 1979年
- (18) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 1994年
- (19) 財團法人広島県教育事業団『中國横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12) 茶臼古墳』 2011年
- (20) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『御堂西古墳群発掘調査報告—庄原市板橋町・庄原カントリークラブ内所在遺跡の調査—』 1984年
- (21) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山東B地点遺跡・清水3号遺跡』 1998年
- (22) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『川東大仙山第10・11号古墳』 1994年
- (23) 植田千佳龍『史跡淨業寺・七ツ塚古墳群測量調査報告』『広島県立歴史民俗資料館 研究紀要』第4集 広島県立歴史民俗資料館 1978年 24～48頁
- (24) 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『境ヶ谷遺跡群—庄原喪葬團地造成に係る埋蔵文化財の調査—』 1983年
- (25) 広島大学文学部考古学研究室『広島県比婆郡東城町 中央山古墳群の発掘調査』 1978年
- (26) 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『石鎚山古墳群』 1981年
- (27) 広島県教育委員会『県営駅家住宅团地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1976年
- (28) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳』 1998年
- (29) 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『長迫跡遺跡発掘調査報告—県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の調査—』 1982年
- (30) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『石鎚推現遺跡群・西ヶ谷遺跡発掘調査報告—県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』 1981年
- (31) 広島県教育委員会『石鎚推現古墳群発掘調査報告—第6・7・8号古墳—』 1981年
- (32) 広島県教育委員会『石鎚推現古墳群発掘調査報告(第9・10号古墳)』 1982年

- (3) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『山の神遺跡群・池ノ追遺跡群』 1998年
- 04 八千代町教育委員会「新宮遺跡群発掘調査報告書」 2000年
- 05 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『城ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群』 1986年
- 06 広島県教育委員会「中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 1982年
- 07 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『大槻遺跡群 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1985年
- 08 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『猪ヶ坪3号遺跡(B地区)』 1988年
- 09 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』 I 1990年
- 10 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(IX) 1993年
- 11 財團法人広島県教育事業団「寺山城跡 県立可部高等学校移転事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」 2004年
- 12 広島市教育委員会「広島市安佐南区祇園町所在広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告」 1984年
- 13 檀昌寺西遺跡発掘調査団「広島市戸坂町檀昌寺西遺跡発掘調査報告」 1980年
- 14 財團法人広島市文化財団「堀の岡古墳群—広島市安佐北区白木町所在一」 1999年
- 15 立石古墳発掘調査団「広島市高陽町立石古墳発掘調査報告」 1978年
- 16 広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1977年
- 17 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(IV) 1987年
- 18 財團法人広島市歴史科学教育事業団「広島市佐伯区五日市町所在 城ノ下A地点遺跡発掘調査報告」 1991年
- 19 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』 1987年
- 20 財團法人広島市文化財団「成岡A地点遺跡—広島市安芸区中野東二丁目所在一」 2001年
- 21 広島県教育委員会「広島県遺跡地図」電子版

第14表 広島県内の方墳一覧（1）

古墳名	所在地	規模	道構	道物 <sup>＊2</sup>	備考	文獻
1 鎮治園田古墳	三次市 葦原町	一边12.5m	周溝			51
2 久々原第9号古墳	三次市 西村屋町	7×5 m	石列			51
3 西拾貢山第17号古墳	三次市 西拾貢町	8.5×6.5m				51
4 西拾貢山第18号古墳	三次市 西拾貢町	一边8 m				51
5 西拾貢山第19号古墳	三次市 西拾貢町	9.5×9 m				51
6 西拾貢山第20号古墳	三次市 西拾貢町	9×7 m				51
7 西拾貢山第21号古墳	三次市 西拾貢町	9.5×5 m				51
8 西拾貢山第22号古墳	三次市 西拾貢町	11×9 m				51
9 西拾貢山第23号古墳	三次市 西拾貢町	一边7.5m				51
10 四拾貫太九郎第19号古墳	三次市 岩瀬町	14.5×9.5m				51
11 四拾貫太九郎第20号古墳	三次市 岩瀬町	9.5×8 m				51
12 丹波北第5号古墳	三次市 江口川之内町	一边27m	周溝			51
13 丹波寺第7号古墳	三次市 高杉町	一边10.2m				51
14 丹波寺第14号古墳	三次市 高杉町	一边10.2m	周溝			51
15 丹波寺第15号古墳	三次市 高杉町	10.2×9.8m				51
16 丹波寺第20号古墳	三次市 高杉町	一边213m				51
17 丹波寺第58号古墳	三次市 高杉町	15.5×13.5m	周溝			51
18 丹波寺第60号古墳	三次市 高杉町	19×19m	周溝、苔石、箱式石棺1	鐵劍、鐵鎌	人骨	23
19 丹波寺第65号古墳	三次市 高杉町	4.8×4.2m				51
20 丹波寺第66号古墳	三次市 高杉町	6.5×4.3m				51
21 丹波寺第77号古墳	三次市 高杉町	13.5×10m				51
22 丹波寺第78号古墳	三次市 高杉町	13.5×10m				51
23 丹波寺第79号古墳	三次市 高杉町	13×10m				51
24 丹波寺第80号古墳	三次市 高杉町	12×8.2m	周溝			51
25 丹波寺第88号古墳	三次市 高杉町	7.8×6.5m				51
26 丹波寺第92号古墳	三次市 高杉町	12×10m				51
27 丹波寺第95号古墳	三次市 高杉町	11.5×7.8m	周溝			51
28 丹波寺第118号古墳	三次市 高杉町	17.5×13.2m				51
29 丹波寺第119号古墳	三次市 高杉町	13.8×12.5m				51
30 七ツ塚第12号古墳	三次市 高杉町	11.1×7 m				51
31 七ツ塚第56号古墳	三次市 高杉町	11×8 m				51
32 高保第14号古墳	三次市 向江田町	6×5 m			方墳か	51
33 箱山第5号古墳	三次市 向江田町	14.2×13.7m	苔石、箱式石棺2、石蓋、鐵鏡、鐵錫、(玉類、土坑1 (石蓋土坑3)、土部器)		本宮	
34 箱山第6号古墳	三次市 向江田町	一边9.8m	周溝、組合式木棺1、箱式石棺2	(玉類、土師器)	本宮	
35 下手第5号古墳	三次市 向江田町	22×16m	周溝、箱式石棺3、(石蓋、鐵鏡、(銅鏡)、土坑)	人骨	4	
36 戴山第15号古墳	三次市 大田幸町					51
37 田代北第20号古墳	三次市 三良板町田代	一边12m				51
38 菩薩大仙山第9号古墳	三次市 三良板町皆瀬	14×12m				51
39 菩薩大仙山第10号古墳	三次市 三良板町皆瀬	一边14m	周溝			51
40 菩薩大仙山第18号古墳	三次市 三良板町皆瀬	一边15m			方墳か	51
41 大仙山第1号古墳	三次市 三良板町三良板	一边19m				51
42 大仙山第2号古墳	三次市 三良板町三良板	一边14m				51
43 羽場谷古墳	三次市 吉町安田	一边4 m			方墳or古墓	51
44 茶臼古墳	三次市 幸町字質買	12×10m	周溝、箱式石棺3	ガラス小玉	人骨	19
45 銀音堂第1号古墳	庄原市 山内町	一边10m	周溝			51
46 石塔山第2号古墳	庄原市 本町	一边9 m				51
47 狐ヶ谷第1号古墳	庄原市 小川町	11×10.5m				51
48 鶴喰堂第1号古墳	庄原市 鶴喰町	6.1×5.9m	周溝、組合式木棺か1 (土部器)		20	
49 上河内古墳	庄原市 鶴喰町	一边4.5m				51
50 千ヶ寺第17号古墳	庄原市 鶴喰町	19×16.5m	周溝			51
51 千ヶ寺第18号古墳	庄原市 鶴喰町	11.5×10m				51
52 千ヶ寺第22号古墳	庄原市 鶴喰町	11.5×11m				51
53 千ヶ寺第23号古墳	庄原市 鶴喰町	12×10.5m				51
54 千ヶ寺第24号古墳	庄原市 鶴喰町	15×14m	周溝			51
55 月貞寺第20号古墳	庄原市 本村町	13×10m				51
56 月貞寺第21号古墳	庄原市 本村町	7.5×7.4m	木棺1 (粘土糊)		3	
57 月貞寺第22号古墳	庄原市 本村町	13×7.7m				51
58 境ヶ谷第1号古墳	庄原市 川原町	一边10m程度	周溝、横穴式石室	鐵刀、鐵釘、須恵器	方墳か	24
59 中央山第3号古墳	庄原市 東城町川東	5.5×4.5m	周溝、二重土坑1、土坑1			25
60 向追第6号古墳	庄原市 東城町川西	8×7 m				51
61 大塚第4号古墳	庄原市 東城町新免	6×6 m	周溝、土坑1		方墳か	13
62 中向住第2号古墳	庄原市 口町向住	11×7 m				51
63 城山古墳	庄原市 高野町中門田	一边10m	箱式石棺			51

第14表 広島県内の古墳一覧(2)

no.	古墳名	所在地	規模	遺物	参考文献
64	吹越第4号古墳	福山市 加茂町	105×9m	銅、二重土坑1 鉄刀、刀子	26
65	吹越第5号古墳	福山市 加茂町	105×8m	銅、土坑1 鉄刀、鉄鏡、刀子	26
66	吹越第6号古墳	福山市 加茂町	9×8m	銅、土坑1	26
67	手方谷第7号古墳	福山市 車家町	7.6×5m	銅式石棺1 刀子	27
68	手方谷第8号古墳	福山市 車家町	12.4×7.5m	銅、箱式木棺小1	方墳か 27
69	法成寺本谷古墳	福山市 車家町	11×9m	銅、石蓋土坑1、土坑1 鉄劍、鉄鏡、刀子	人骨 28
70	長迫第1号古墳	福山市 車家町	20×10m	銅、土坑1 鉄斧	方墳か 29
71	長迫第2号古墳	福山市 車家町	33×24m 3	銅、斐式石室1、土坑1 鉄、鉢、鐵鏡、(砾石、土) (鉄鏡)	方墳か 29
72	石鶴塚現第3号古墳	福山市 車家町	一辺8m	銅、組合式木棺2 鉄鏡	30
73	石鶴塚現第6号古墳	福山市 車家町	7.5×7m	銅 (土部器)	31
74	石鶴塚現第7号古墳	福山市 車家町	7×6.5m	銅、組合式木棺1(二重 土坑)	31
75	石鶴塚現第9号古墳	福山市 車家町	8×3m	銅、土坑2	32
76	石鶴塚現第11号古墳	福山市 車家町	一辺7m	銅、組合式木棺1	33
77	大佐山白壁古墳	福山市 新市町戸手	一辺12m	横穴式石室	51
78	山の神第2号古墳	府中市 元町	11.5×6.5m	銅、箱式石棺1 刀子、銅鏡	人骨2 33
79	山の神第3号古墳	府中市 元町	8.2×7.7m	銅、箱式石棺2 玉類、銅鏡	人骨2 33
80	山の神第4号古墳	府中市 元町	6.5×4.7m 坑1	銅、箱式石棺1、石蓋土 鉄鏡	人骨2 33
81	飯王山A第4号古墳	府中市 飯王町	一辺6m	石蓋土坑	人骨 51
82	古城塚第1号古墳	府中市 上下町矢多田			61
83	ひじり塚第1号古墳	三原市 高坂町	一辺15m	砾石 須恵器	51
84	新塚第2号古墳	安芸高田市 八千代町西田	15×8.5m	銅、貼石、箱式石棺2 鉄鏡、鉢、玉類	人骨 34
85	新塚第5号古墳	安芸高田市 八千代町西田	11×13.5m	銅、覆石、横穴式石室 鉄鏡、鉄釘、刀子、耳環、 土師器、須恵器	34
86	新宮第6号古墳	安芸高田市 八千代町勝田	7×6m	銅、箱式石棺1 鉄斧、刀子	34
87	鳥山古墳	安芸高田市 八千代町勝田	7.8×6m	横穴式石室	51
88	藏原塚第3号古墳	安芸高田市 高宮町房後	13×8m	周溝	51
89	藏原塚第4号古墳	安芸高田市 高宮町房後	16×8m	周溝	51
90	追迫南第2号古墳	安芸高田市 高宮町房後	一辺12m		61
91	松ヶ平古墳	安芸高田市 向原町有留	一辺16m	銅、平坦面	51
92	戸島山塚古墳	安芸高田市 向原町戸島	一辺18m	横穴式石室	51
93	市原塚第1号古墳	山県郡 北広島町今吉田	12×9.5m		51
94	大船塚第2号古墳	山県郡 北広島町今田	一辺13.5m		51
95	大船塚第3号古墳	山県郡 北広島町今田	一辺10.5m		51
96	中山勝負跡第5号古墳	山県郡 北広島町丁保余原	11~13×10mか 8.5~14.5×9m	銅、箱式石棺1、(土坑1) 刀子、土師器、(磨石)	方墳か、人骨 35
97	中出勝負跡第6号古墳	山県郡 北広島町丁保余原	mか	銅、箱式石棺1 鉄器	方墳か、人骨 35
98	中出勝負跡第7号古墳	山県郡 北広島町丁保余原	9~11.5×8 mか	銅、箱式石棺1	方墳か、人骨 35
99	中山勝負跡第9号古墳	山県郡 北広島町丁保余原	7.2×7mか	銅、組合式木棺1 (铁斧)	方墳か 35
100	金ノ瀬第4号古墳	山県郡 北広島町丁保余原	4.9~5.1m	箱式石棺	36
101	御園塚第1号古墳	山県郡 北広島町丁保余原	16×13m	箱式石棺1 銅鏡、鐵劍、玉類	方墳か 35
102	御園塚第3号古墳	山県郡 北広島町丁保余原	一辺10m程度	箱式石棺1 鉄刀	方墳か 35
103	板山塚第2号古墳	山県郡 安芸太田町上高賀	7.7×7.1m	(主体部なし) (造物なし)	36
104	板山塚第3号古墳	山県郡 安芸太田町上高賀	8~9.5m (主體部なし)	(主體部なし) (土師器)	36
105	鏡小谷塚第2号古墳	山県郡 安芸太田町中間賀	一辺8m	土坑2 玉類	36
106	鏡小谷塚第3号古墳	山県郡 安芸太田町中間賀	一辺10m	横竹形木棺1 刀子、土師器	36
107	鏡小谷塚第4号古墳	山県郡 安芸太田町中間賀	20~22×11~15m	(土師器)	36
108	鏡小谷塚第5号古墳	山県郡 安芸太田町中間賀	8~12m	(主体部なし) (造物なし)	36
109	大柄第3号古墳	東広島市 西条町	一辺12.6m以上	銅、箱式石棺2 刀子	鉄劍、鐵鏡、鐵鏡、頭先。方墳か 37
110	鏡ヶ坪第1号古墳	東広島市 高屋町	15×7m	銅、箱式石棺1、土坑1 (土師器)	方墳か 38
111	鏡ヶ坪第2号古墳	東広島市 高屋町	9×9m	周溝、貼石、箱式石棺1 (土師器)	39
112	鏡ヶ坪第4号古墳	東広島市 高屋町	一辺8m	周溝、横穴式石室1 玉類、(土師器、須恵器)	円墳or方墳 39
113	鏡ヶ坪第5号古墳	東広島市 高屋町	一辺4m以上	銅、箱形石棺1	方墳か 39
114	才ヶ浦第1号古墳	東広島市 高屋町	9.5×7.5m	銅、斐式石室2 鉄劍、槍、鉄斧、鉄、銅鏡、 玉類、(土師器)	40
115	有田塚第3号古墳	東広島市 河内町入野	一辺7.5m		第4号古墳の 造り出しの 可能性あり 51
116	岸田塚	東広島市 豊栄町清武	一辺7m		51
117	郷原塚第1号古墳	東広島市 豊栄町清武	一辺5m		方墳か 51
118	郷原塚第2号古墳	東広島市 豊栄町清武	一辺5m		方墳か 51
119	郷原塚第3号古墳	東広島市 豊栄町清武	一辺6m		方墳か 51

第14表 広島県内の方墳一覧（3）

no.	古墳名	所在地	規模	道構	遺物*2	備考	文献
120	可部寺山第6号古墳	広島市 安佐南区可部町	一辺10m程度	溝、削竹形木棺1	鉄矛、鉄鏃、(土師器)	方墳か	41
121	芳谷第1号古墳	広島市 安佐南区祇園町	10×8mか	溝、削竹形木棺1	銅鏡、刀子、玉類、(土師器)	方墳か	42
122	柳島寺西武跡	広島市 東区芦原町	10×7mか	箱式石棺2	銅鏡、刀子、銅鏡	方墳か	43
123	塔の岡第6号古墳	広島市 安佐北区白木町	13.1×10.6m	周溝、石積、横穴式石室	銅鏡、器、鏡、留金具、須恵器、土師器		44
124	立石古墳	広島市 安佐北区龟崎	17×10m	周溝、箱式石棺3	(須恵器)	赤色顔料、人骨	45
125	真亀第1号古墳	広島市 安佐北区真亀	18×12m	周溝、削竹形木棺(粘土床)1	銅刀、刀子、銅鏡、施		46
126	真亀第2号古墳	広島市 安佐北区真亀	8.5×7m	周溝、土坑1	(刀子、須恵器)	方墳か	46
127	地蔵堂山第1号古墳	広島市 安佐北区落合	17×14m	木棺1	銅刀、銅鏡、針、銅先、銅鏡、铁斧、銅鏡、刀子、有孔円板		46
128	地蔵堂山第2号古墳	広島市 安佐北区落合	14×10m	周溝、竪穴式石室？1	銅鏡、銅刀、銅鏡、(銅鏡、銅鏡)		46
129	地蔵堂山第3号古墳	広島市 安佐北区落合	一辺5～6m	周溝？、土坑1		方墳か	46
130	地蔵堂山第4号古墳	広島市 安佐北区落合	一辺3.6m	周溝	(須恵器)		46
131	山手第2号古墳	広島市 安佐北区高瀬町	5×5mか	周溝、土坑1	銅鏡か	46	
132	大明地第1号古墳	広島市 安佐北区口田	15×10mか	溝、削竹形木棺1	石鏡、玉類、(土師器、銅鏡)	方墳か	47
133	大明地第3号古墳	広島市 安佐北区口田			(須恵器、土師器、玉類)	方墳か	47
134	城／下第4号古墳	広島市 佐伯区五日市町	一辺6m	周溝、組合式木棺1	刀子、(須恵器)		48
135	城／下第5号古墳	広島市 佐伯区五日市町	一辺8m	周溝、箱式石棺1	刀子	人骨	48
136	城／下第6号古墳	広島市 佐伯区五日市町	一辺10m	周溝、木棺蓋1、組合式木棺1	(銅鏡、土師器)		48
137	城／下第7号古墳	広島市 佐伯区五日市町	一辺9m	周溝、土坑1	(土師器)		48
138	城／下第8号古墳	広島市 佐伯区五日市町	8×6m	周溝、二重土坑1			48
139	城／下第9号古墳	広島市 佐伯区五日市町	6.5×5.2m	周溝、二重土坑1			48
140	城／下第10号古墳	広島市 佐伯区五日市町	10×8.6m	周溝、(主体部全壊)			48
141	月見城第2号古墳	広島市 佐伯区倉尾	一辺6m	周溝、土坑4	銅鏡、玉類、(鏡先、施 須恵器)		49
142	月見城第6号古墳	広島市 佐伯区倉尾	一辺7m	周溝、土坑3			49
143	月見城第7号古墳	広島市 佐伯区倉尾	一辺9m	周溝、組合式木棺2	(土師器、須恵器)		49
144	成岡第1号古墳	広島市 安芸郡中野東	11×9m	周溝、組合式木棺1	刀子、留金具、(土師器)		50
145	管／丘第1号古墳	廿日市市 佐伯区建田	6.5×5.8m			方墳or古墓	51
146	管／丘第2号古墳	廿日市市 佐伯区建田	一辺4.5m			方墳or古墓	51

\*1 この表は、広島県教育委員会「広島県遺跡地図」電子版及び各報告書を基に作成した。なお、遺跡地図・各報告書で方墳と推測されている例も含む。

\*2 遺物欄の（ ）内は、埋葬施設以外で出土した遺物

# 図 版





a 第3～6号古墳遠景  
(南東上空から)



b 第3～6号古墳全景  
(真上から、右上が北)



a 第3～6号古墳遠景  
(南東から)



b 第3～5号古墳調査前  
状況 (南西から)



c 第4～6号古墳調査前  
状況 (北東から)

a 第3号古墳調査前状況  
(南西から)



b 第3号古墳墳丘検出  
状況 (南西から)



c 第3号古墳土層  
(B-B') (南から)





a 第3号古墳土層  
(C-C') (南西から)



b 第3号古墳土層  
(A-A' 周溝内)  
(南東から)



c 第3号古墳土層  
(A-A' 墳丘内)  
(南から)

a 第3号古墳土層  
(A-A' 墳丘内)  
(南東から)



b 第3号古墳石室検出  
状況 (東南東から)



c 同上 (南南西から)





a 第3号古墳石室奥壁  
(東から)



b 第3号古墳石室南側壁  
(北北東から)



c 同上 (北西から)

a 第4号古墳調査前状況  
(南西から)



b 第4号古墳調査状況  
(南西から)



c 同上(蓋石除去後)  
(南西から)





a 第4号古墳土層  
(A-A' 南西側)  
(南東から)



b 第4号古墳土層  
(A-A' 墳丘内)  
(南から)



c 第4号古墳土層  
(A-A' 北東側)  
(南東から)

a 第4号古墳土層  
(B-B' 墳丘内南東寄り)  
(北東から)



b 第4号古墳土層  
(B-B' 墳丘内北西寄り)  
(北から)

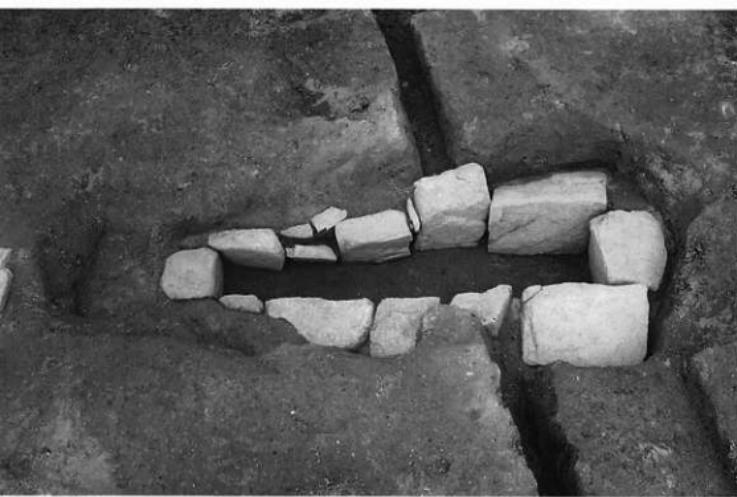


c 第4号古墳土層  
(B-B' 北西側)  
(北東から)





a 第4号古墳SK4-1  
(蓋石) (南東から)



b 同上 (棺内) (南東から)



c 同上 (棺内) (南西から)

a 第4号古墳SK4-1  
遺物出土状況（北から）



b 第4号古墳SK4-2  
(蓋石) (北北西から)



c 同上 (棺内) (北北西から)

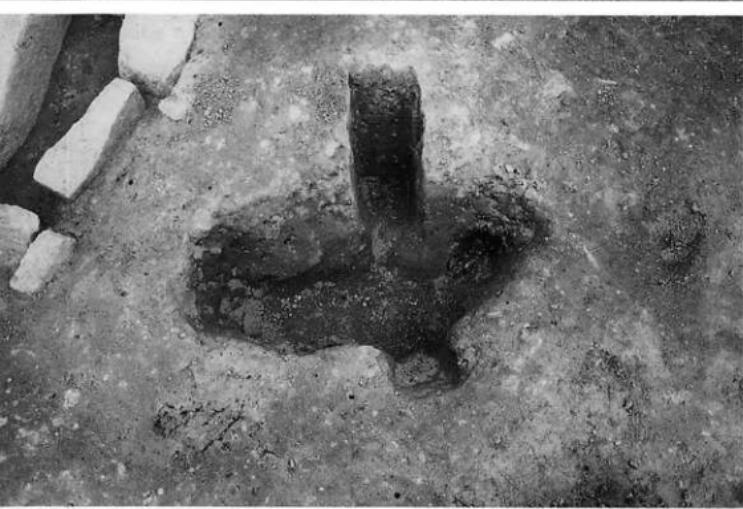




a 第4号古墳SK 4-2  
(棺内) (西南西から)



b 第4号古墳SK 4-3  
(蓋石) (南西から)



c 同上 (墓坑) (南西から)

a 第5号古墳調査前状況  
(南西から)



b 第5・6号古墳調査前  
状況 (北東から)



c 第5・6号古墳全景  
(真上から、右上が北)





a 第5・6号古墳全景  
(北東上空から)



b 同上 (南東上空から)

a 第5号古墳墳丘検出  
状況（北東から）



b 同上（南西から）



c 同上（西から）





a 第5号古墳埴丘検出  
状況（南から）



b 同上（東から）



c 第5号古墳土層  
(E-E' 北東側、溝内)  
(南東から)

a 第5号古墳土層  
(E-E' 墳丘内上段  
北東寄り) (東から)



b 第5号古墳土層  
(E-E' 墳丘内上段  
南西寄り) (北西から)



c 第5号古墳土層  
(E-E' 墳丘内南西寄り)  
(西から)





a 第5号古墳土層  
(E-E' 南西側、溝内)  
(南東から)



b 第5号古墳土層  
(F-F' 墳丘内北西寄り)  
(西から)



c 第5号古墳土層  
(F-F' 墳丘内上段  
北西寄り) (南西から)

a 第5号古墳土層  
(F-F' 墳丘内上段  
南東寄り) (南西から)



b 第5号古墳土層  
(F-F' 墳丘内南東寄り)  
(南から)



c 第5号古墳SK5-1  
・SK5-2検出状況  
(北東から)





a 第5号古墳SK 5-1  
・SK 5-2検出状況  
(蓋石除去後)  
(北東から)



b 第5号古墳SK 5-1  
(蓋石, 粘土検出状況)  
(北西から)



c 同上(蓋石, 粘土除去後)  
(北西から)

a 第5号古墳SK5-1  
(蓋石、粘土除去後)  
(南西から)



b 同上 (棺内) (北西から)



c 同上 (棺内, 床面)  
(北西から)





a 第5号古墳SK5-1  
(棺内, 床面)  
(南西から)



b 同上(棺内, 北東端粘土)  
(南西から)



c 同上(棺内, 床面半截  
状況)(南東から)

a 第5号古墳SK5-1  
(棺内、遺物出土状況)  
(南東から)



b 第5号古墳SK5-2  
(蓋石) (南西から)



c 同上 (棺内) (南西から)

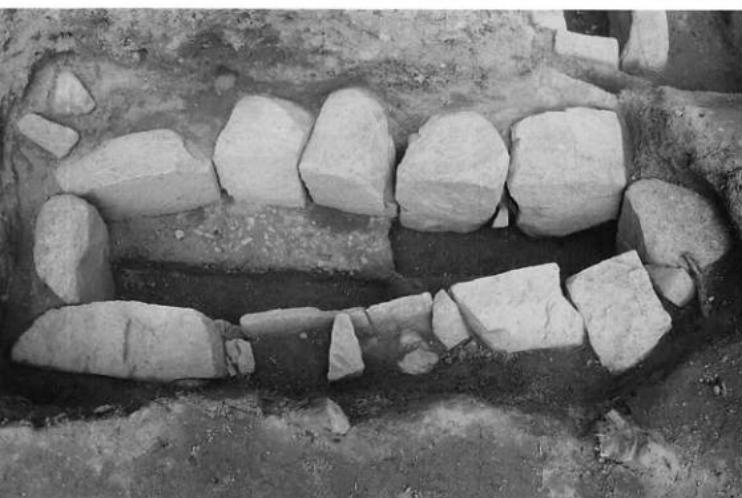




a 第5号古墳SK 5-2  
(棺内) (南東から)



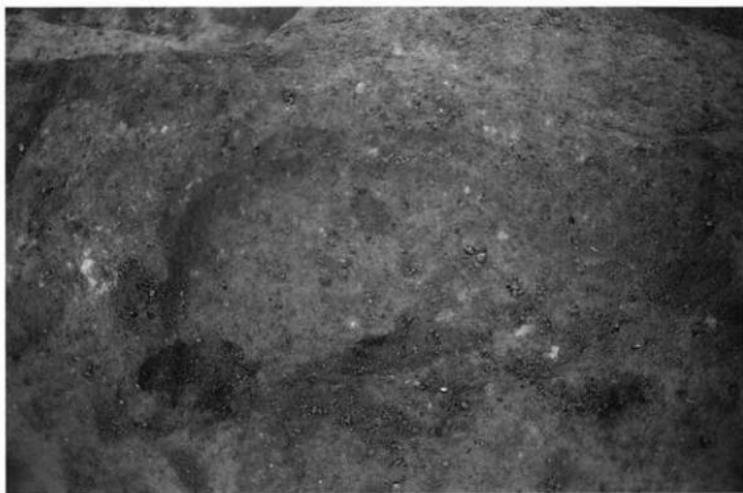
b 同上 (棺内, 北西端粘土)  
(南東から)



c 同上 (棺内, 床面半裁  
状況) (南西から)



a 第5号古墳SK 5-3  
(蓋石) (南東から)



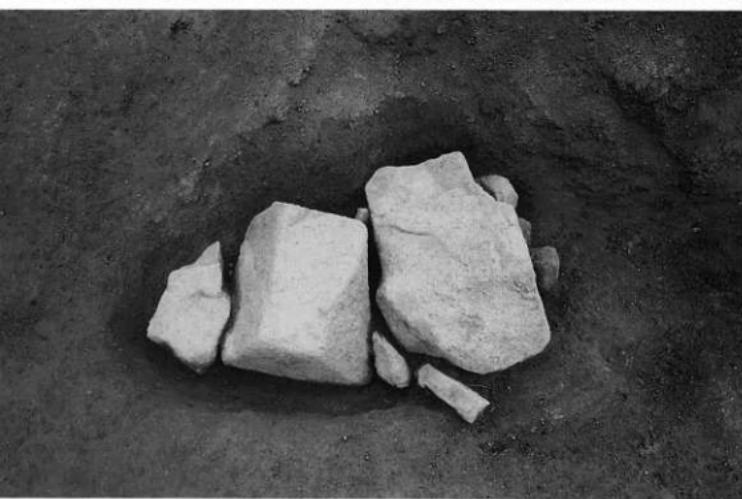
b 同上 (墓坑) (南東から)



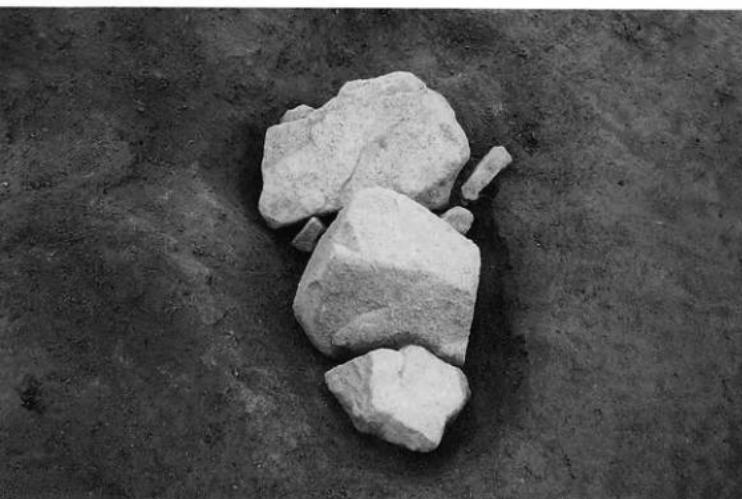
c 第5号古墳SK 5-4  
(蓋石) (北東から)



a 第5号古墳SK5-4  
(墓坑) (北東から)



b 第5号古墳SK5-5  
(蓋石) (南西から)



c 同上 (蓋石) (北西から)

a 第5号古墳SK5-5  
(墓坑) (北西から)



b 同上 (墓坑, 遺物出土  
状況) (西から)



c 第5号古墳SK5-6  
(蓋石) (南南西から)





a 第5号古墳SK 5-6  
(墓坑) (南南西から)



b 第5号古墳墳丘外  
(SK 5-6南西側)  
遺物出土状況 (西から)



c 第6号古墳墳丘検出  
状況 (北東から)



a 第6号古墳埴丘検出  
状況（北西から）



b 第6号古墳北東側周溝  
(北西から)



c 第6号古墳土層  
(B-B' 南東側)  
(北東から)



a 第6号古墳土層  
(B-B' 墳丘内南東寄り)  
(東から)



b 第6号古墳土層  
(B-B' 墳丘内北西寄り)  
(北から)



c 第6号古墳土層  
(B-B' 北西側)  
(北東から)



a 第6号古墳調査状況  
(南西から)



b 同上（蓋石除去後）  
(南西から)



c 第6号古墳SK 6-1  
(土層, 北西-南東方向)  
(南西から)



a 第6号古墳SK 6-1  
(土屑、南西-北東方向)  
(南東から)



b 同上 (粘土検出状況)  
(南西から)

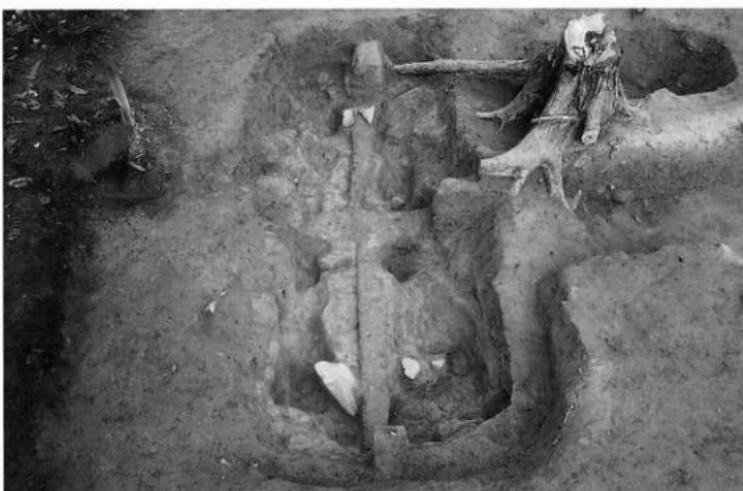


c 同上 (粘土検出状況)  
(南東から)

a 第6号古墳SK6-1  
(粘土除去後)  
(南西から)



b 同上 (粘土除去後)  
(南東から)



c 第6号古墳SK6-2  
(蓋石) (北西から)





a 第6号古墳SK6-2  
(蓋石) (南西から)



b 同上 (棺内) (北西から)



c 同上 (棺内) (南西から)

a 第6号古墳SK6-3  
(蓋石) (南西から)



b 同上 (蓋石) (北西から)



c 同上 (棺内) (南西から)





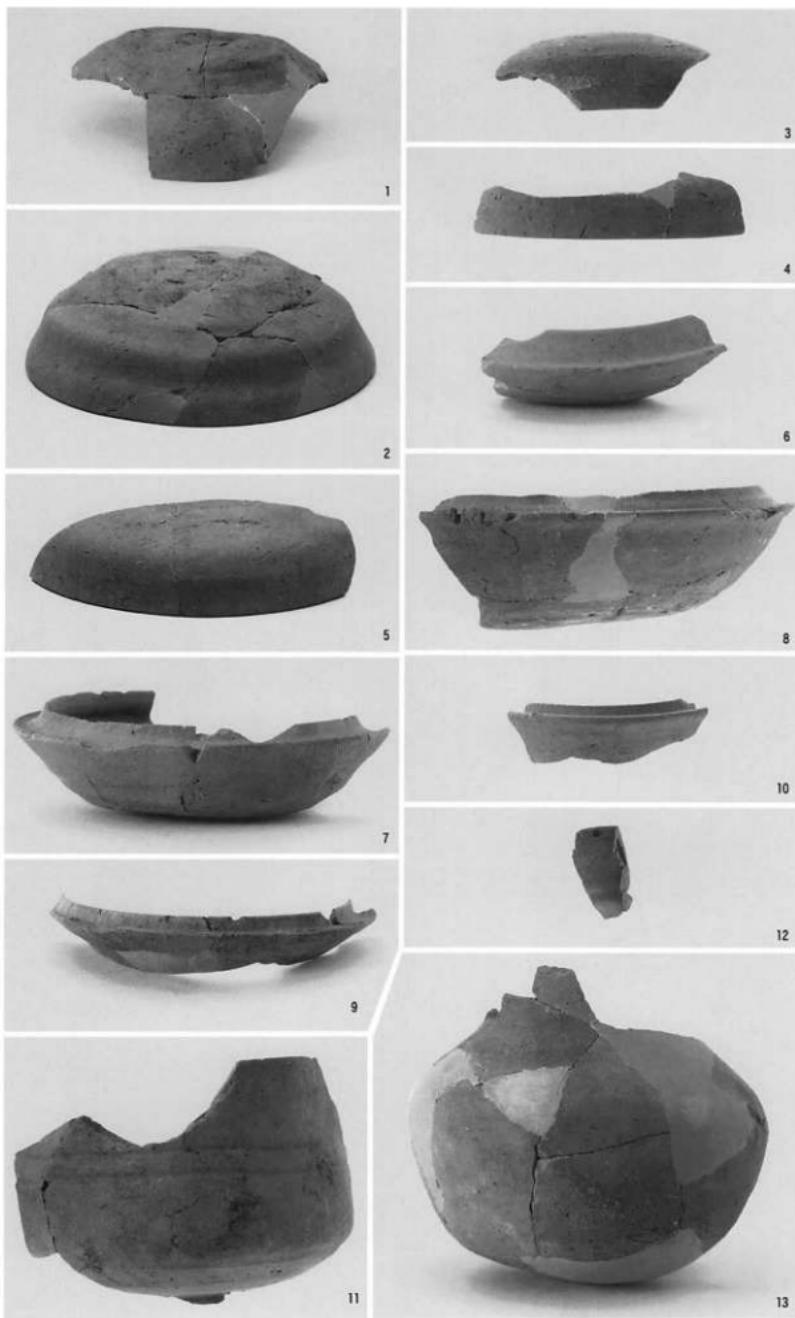
a 第6号古墳SK6-3  
(棺内) (北西から)



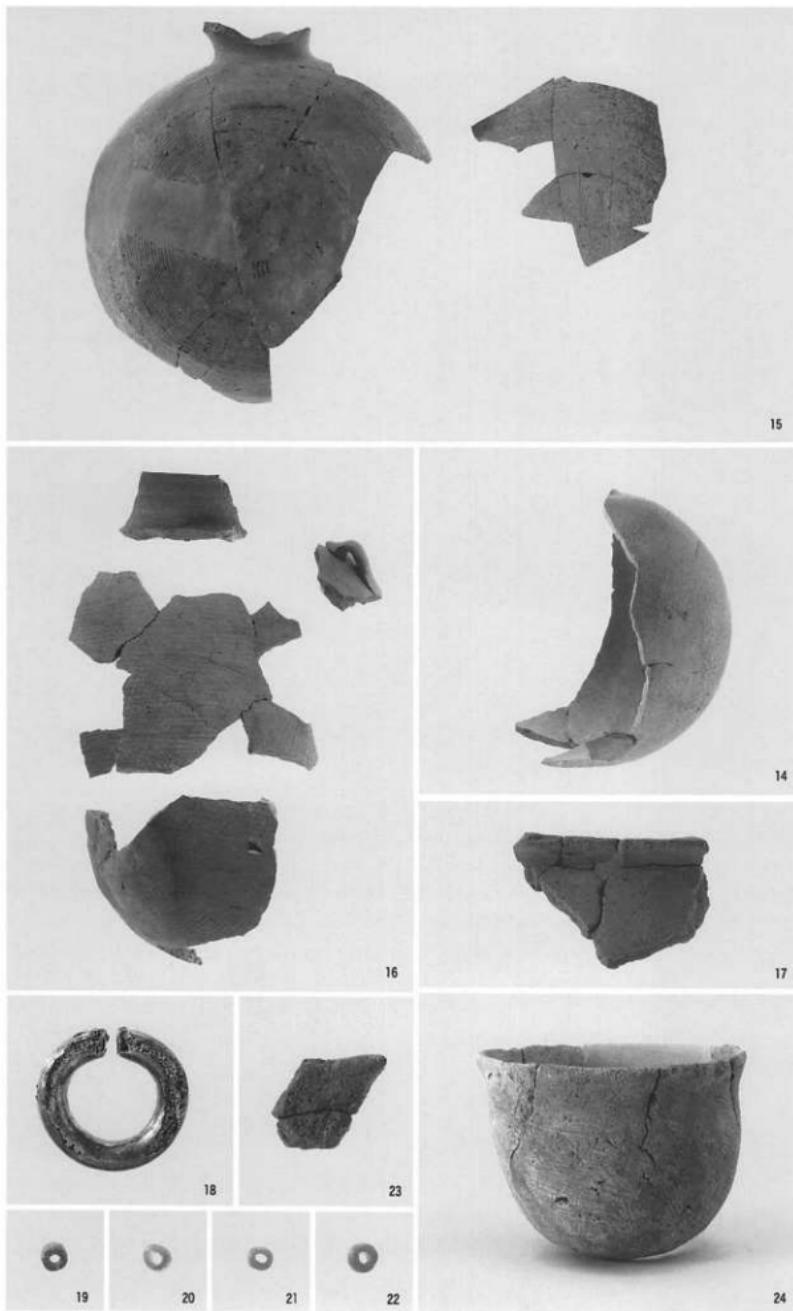
b 第6号古墳墳丘外  
(北西側斜面) 遺物出土  
状況 (西から)



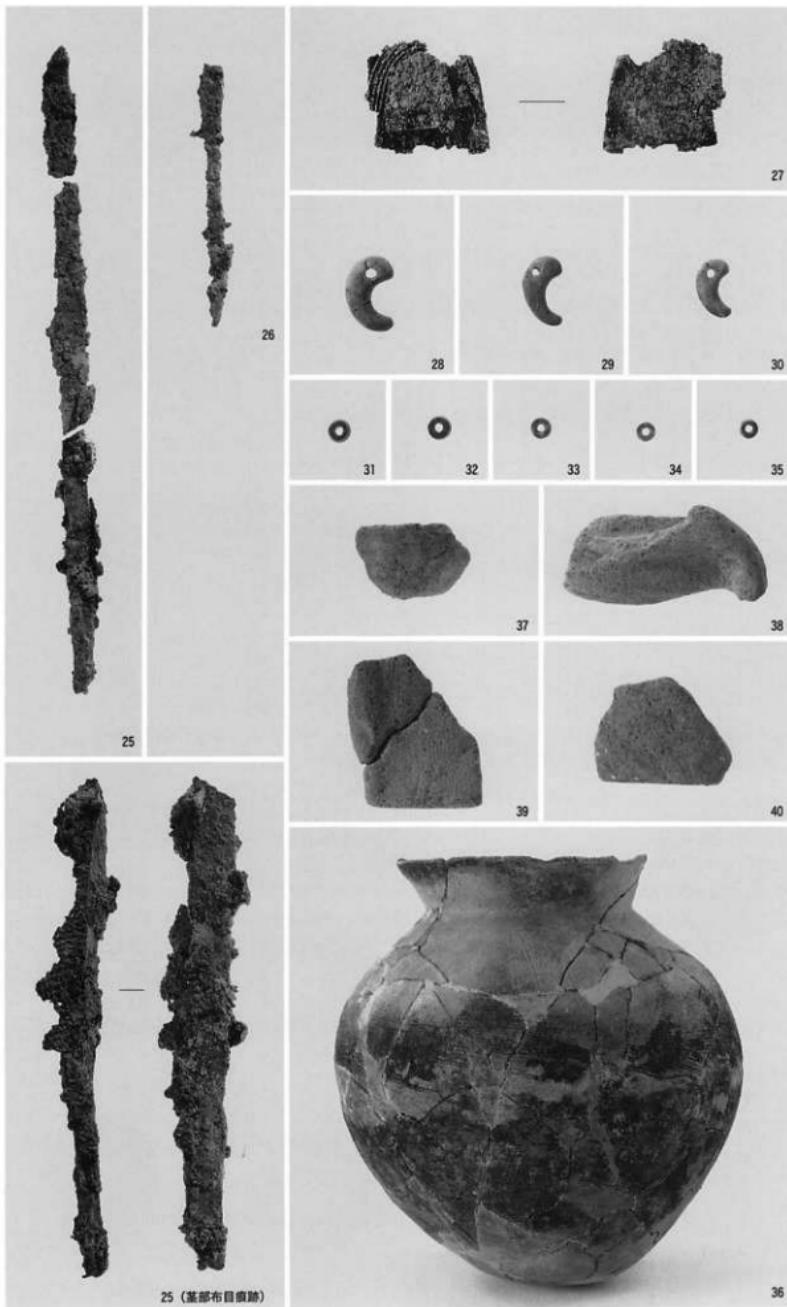
c 第6号古墳墳丘外  
(東側斜面) 遺物出土  
状況 (南から)



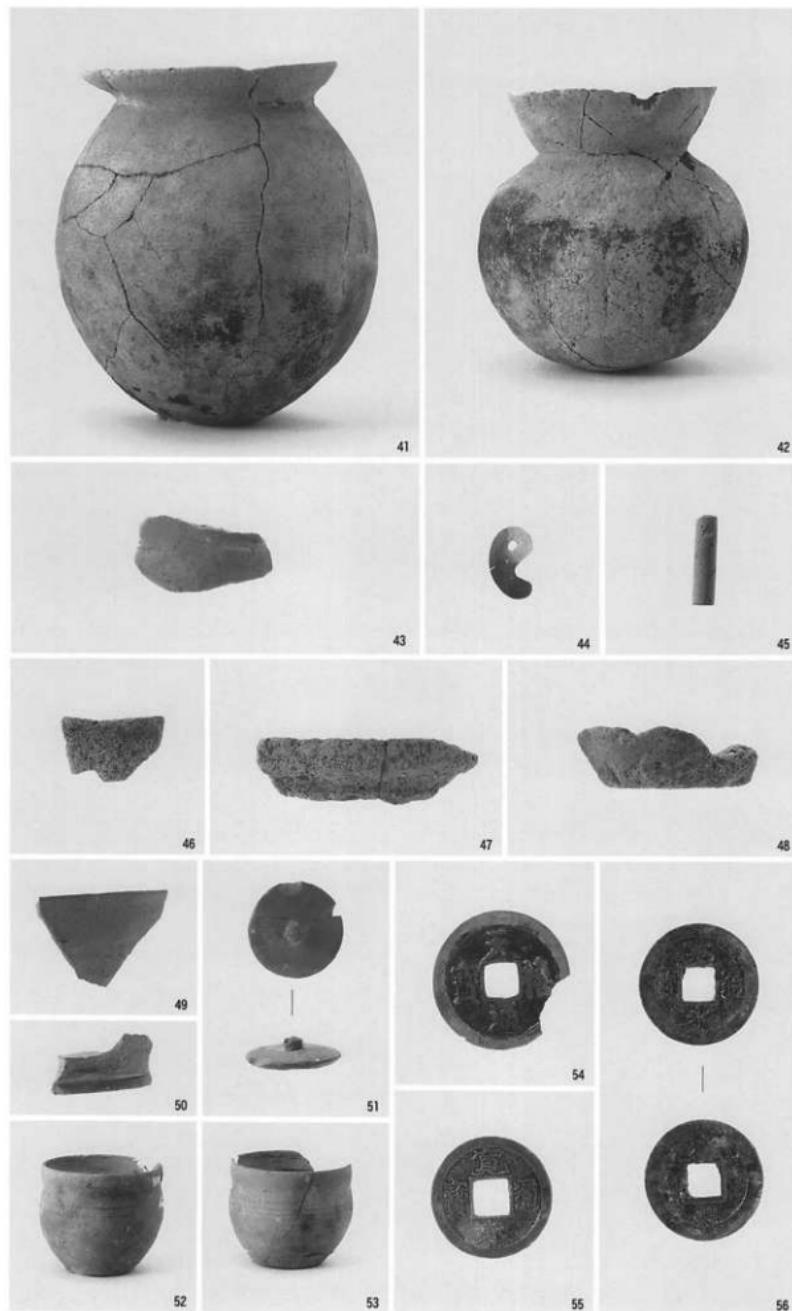
出土遺物（1）



出土遺物（2）



出土遺物（3）



出土遺物（4）

## 報告書抄録

公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第61集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告（33）

箱山第3～6号古墳

発行日 平成26（2014）年3月14日

編 集 公益財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室  
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951

発 行 公益財団法人 広島県教育事業団

印刷所 株式会社 ニシキプリント